山之天之日影而爲鬘天眞折云云日本紀に堀天香山之五百箇眞坂樹而云云と有て次に以天香山之眞坂樹爲鬘以蘿（蘿此云比舸礙）爲手繦（手繦此云多須枳）同一書には採五百箇眞坂樹八十玉籤とも有かく眞坂樹は瑯鏡木綿など付る料とする事古事記にも紀にも既に有るを又坂樹を鬘ともせむや鬘繦などは長き蔓有物をこそすれ木を用んよしなし古語拾遺にも以眞避葛爲鬘と有然れば紀の以眞坂樹爲鬘と有は後世字を誤れる事明かなり凡さかきとまさきかづらの言の意は古事記日本紀書きし人だちも能得ず只借字にて坂樹賢木眞折など書し物なりされど訓の爲に借に離山綿海などの如く、まぎらはしからぬ字を用ゆる例なれば同文には眞坂樹の字借まじきを思ふにとかくに字を誤けむ、後世傳れる紀とも文も字も亂れ違へる所多きを人ごとに空理をのみいひて本文本言をよく思ひ知る人なければ説とも一つらに用ゐかたきなり【此字の誤りを他をおし文を正して考へざる故にさる木をかづらとよむことを疑ひ或は紀と古語拾遺と違へると思ひくさ〴〵のひが考をおこせる人有り皆いふにたらず】

本

和幾毛己加、（こは萬葉七に卷向之痛足之川由また卷十二に纏向之痛足乃山爾雲居乍てふ如く有べきを誤て和きもこがとうたへるなり此歌古今歌集に取物の歌とてまきむくのと有歌も奈良朝の歌と聞ゆれば必さ有べき事なり、然るを古今六帖にもわぎもこと誤り此神遊にも早くより書しをみだりにまきもくまきもて、などよみ誤れる人有り古事記に麻岐牟久能比志呂乃美夜、姓氏錄に卷椋、新撰萬葉に眞木牟倶之日原と書る假字もて實はまきむくといへる事を知べし、○大和國城上の郡の纏向珠城宮とも日代宮ともいひて上つ代に都立られし地の山なり）

安奈志乃也萬乃、（纏向は所の大名、穴師は眞中に在ること春日の三笠山、篠靡の大津などいふが如し）

也萬比止々、比止毛志留へ久、（古今集に今は人も見るがにと有を顯昭か古今注には見るがねと有、六帖ともゑか有是ぞ古の辭にて萬葉に多し後世がなてふ願ふ辭と同じ、こゝも卽願ふ意なれば古今集にも是も本はがねと有しを後世意もてがにともべくともなほせし物なり）

也萬加門良世與、也萬加門良世與、（山かづらは眞榮かづらをいふ次のまさきのかづらてふ歌卽同じかつらの取物の歌なるにても玄れ、此かつらの事は前にいへり

○神名式城上郡に穴師坐兵主神社、卷向坐若御魂神社と有る此の二社の中の祭に仕奉るもの、よめる歌有りしを取物の歌に用ゐしならん、六帖に「行かうへに、またもゆけこま、神かきや（なびのイ）、みむろの山の山かづらせん、てふは飛鳥の神なびの社の祭の時の事なれば相むかへて今をも玄るべし、又垂仁天皇紀に大倭大神を祭る神地を穴磯邑に定て淳名城雅入姫命して祭らせ給へる事あり然らば此あなし山の神祭は上つ代公よりおもく崇みなさせ給へばその御祭の人と人も見むをおぼしき事として人も見るがねとよめるにやあらん、さて山人てふは其神事も仕奉る神主祝部などのいと下に仕る人なり儀式の平野祭の條に云云親王以下各就座訖山人候東門外一琴師率二炊女等一盛二酒肴於八脚机一而迎在二門內一山人廿人（用左右衞士：執二賢木一入列立二机前一以申二神壽詞一訖炊女四人受二賢木一復二本座一（謂門內座）于時琴歌發聲炊女四人東向起舞訖以二酒肴一賜二山人等一訖琴師炊女復二本座一（謂舍內座）訖山人左右分立薪庭中退出、其外に、冬祭者廻御馬了物忌神舞以山人和舞とも見えたり此薪を立又和舞をすといひ又大嘗祭のゆきすきの山に從ふをも山人などいふに合せ思へば卽神の坐す山の山人のかのまさきひかげなどをも採て奉り薪をも奉る其神事に仕奉をいふべくおほゆ）

末（但庭火唱之）是も注なり

美也萬耳波、安良禮不留良之、止也萬奈留、萬佐幾乃可門良、伊呂門幾耳計利、伊呂門幾耳計利（上にいひつ）、

○韓神、（古事記を考るに須佐能男命の御子大年神娶神活須毘神之女伊怒比賣生子大國御魂神次韓神云云この韓神なるべし然らば加良乃加美と申べきをうたふ調べに依て乃を略けるならん【韓は借字か又元韓てふ所に祭りし故か何所に祭をも玄か云にも有べし】○こは今の平安の宮の宮內省に園神韓神とて二社坐と神名式にもみゆ、さて古事談に園韓神社者本自坐大內趾而遷都之時造宮之使等可移他云云于時託宣云猶坐此處奉護帝室仍坐宮內省內云云といへり祭は二月と十一月に有て上卿辨內侍まゐりもとより神祇官祭の事に預れり式西宮抄其外記錄どもに委し）

見志萬由不、（賦役令に安藝木綿東木綿と有棗は伊豆國

加茂郡の三嶋江より貢ぐ木綿ならん、さて木綿は穀の木の皮もてなして麻に似て麻より貴きものなり）

加太仁、止利加介、和禮、（木綿を神事に仕る人髮と繩とにする事式に見ゆ上つ代に眞榮葛を髮とし比加宜を繩とせしを後に木綿にかへしなりさてこゝは肩にとりかけといふからは髮にあらず木綿もて爲たる繩の事なり祝詞に忌部が弱肩に太襁取掛といへるにて知れたり且たすきは同じ神事に仕る人の中にも手にわざ有人のかくる事忌部の襁の如し、こゝは八ひらでを執といひかの釧目命の矛を取り手草を取るわざをぎをする故にひかげの襁をかけしといふを思へ【袖中抄顯昭が說範長卿說も此木綿を頭に掛る髮とのみ思ひて肩にとりかけと、云は必繩なる理りとわかねばいへる事皆ひがことどもなり】○此歌は本旋頭歌の體にして三の句云云和禮と有りけんを後に言五つ落しものなり依てこゝは其禮のまゝに和禮を上へ付て意得べし、今世歌方の人は、和禮加良加美とうたへどそはうたふ節によるのみ、）【旋頭歌萬葉に多かれど皆五七七の句を末とせり古今歌集も今玄か有を後世我其そこのと唱ふるはひがことなり物申我其そこに白くさけるは何の花ぞもと唱ふべきなり是を思ふにもし今の伶人のひがことに依てわれらかみとうたふにやともおほゆされど此神樂などの中にも言を下へつけてうたふ多ければ猶玄らべによるとするなり】

可良加見乃、加良乎支世武也、加良乎支、加良乎支世牟也、（自第二度加太仁止利加介より唱と注せり、此事は末にいふべし可良乎支を意得かねて何れの說にも、ひらでを置こととしいへる、近比古への假字少し玄れる人內侍所神樂府といふ物に加羅遠幾と書るをみて置は於幾の假字なれば遠は誤れりといへるはよくも考ぬ事もて强るなり、此古本惣てかな正しきに末の歌どもに四所ながら乎支と書たり乎遠は同じ初音の遠の假字なればかの神樂府も古き傳への殘れらん事古本と合せて玄らる、然れば必置ことにあらざるなり【又干荻の事といふ說あれどさらばとらんなどいふべしをきせんやといひ又座置などいふは右の如く假名遠へり】依て考るにこは韓俳優爲といふことのわざの言を略きいへるなるべし、さて俳優はかの岩門の前にて釧目命のしわざを本にてこゝは韓神の祭故に言を借てからわざをぎといひしか又公に御遊さまざま有て後續々異國の俳優

をもせさせ給ふ事續紀よりして多く見ゆ、それが類の事後世の神事の後にも有めり、からわざをぎは神事にいかゞともいふべけれど此神樂の末に、吉々利々千歲榮々てふは、から、天竺の言交へ唱ふるも有て中世よりさる例も多きなり、よし又此祭に韓わざはせでも世に有事なれば韓神てふ言に依てからをぎとはいふべき事なりかくて和ざ乎ぎのわざは和ざ歌謠のわにて正しからぬわざなり乎伎は和名抄に蚘蠖を乎妓無之と名付しは俳人の屈伸顚倒などのまねするよしなること假字も意も相かなへるにて玄らる且古事記と和名抄に岐とあれば今も濁るべし、【釧目命のわざをぎをみて八百萬の神笑ふと記にいふ新撰字鏡に可笑阿奈乎加之と有り令の雅樂寮に伎樂と云は俳優の類なり是をせしにや又和名抄の雜藝に弄搶弄丸（タヽトリ）其外多し其類か○神代記岩門の條に宜國造彼神象而奉招禱也古事記に其遠岐斯八尺勾瑑鏡と有も其事なり然れば乎きは其有樣を學び摸す事なり是より轉じて俳優蚘蠖をもいふなりけり】

末

也比良天乎、（八葉盤なり大嘗祭式に葉椀「久善豆覆似笠形」葉盤「比良豆似笠形」この葉盤にて槲葉をいく枚もよせて竹を針の如くしさして盤形に作りたる物なり、右には蓋とせしをいふのみ此葉盤に卽神の御食物をも盛ぬ今も山城の稻荷の社に玄かせり○八は物の多きをいへりされど此歌葉盤執持てといへば一つの葉盤を數々の槲葉もて作りて大きなるひらでとほめいふにぞ有べき、何ぞとなれば宮內省式に「供奉神事諸司行列」神御食の物を執て來る人多き中に采女八人「各取物有」一人執神八枚手箸筥と有は枚手の筥と箸とを兼たるなり【箸筥は添物なる事此所の次の文にて玄らる】是女の執物なれば八つと多くの葉盤に物盛しを筥に入てとるにあらず枚手は一つなる事他の采女の執物にむかへて玄らる）

天耳止利毛知天、和禮、（神に奉る時の枚手はつゝしみて持べし是は其枚手の殘れるなど有を手玉などにとりて、わざをぎするなるべし、鉾は人を治る物なるを釧目命の執て俳優せし類なり）

加良加見乃、加良乎支世武哉、加良乎支世牟也、（自第二度天仁止利毛知天より唱ふ件の歌用三度拍子と注せり上もこゝも右の歌二首終て又うたふと云且此二度目なるをば初句を弃も三度拍子小早く唱ふ是を後世の平言

に早韓神といひ又上をば延韓神次の度をば滴々にうたふといへりかくて今或本に右の次に早韓神と標して別に初句を除ける歌を二首擧たれど古本には擧ず、下の例に依に又本末とて擧べき事なれど早々より擧ぬにより て右の注も書しなるべければ更に補ひがたくて止ぬ【此歌本阿知女於々々々末於介とあり此左の注に取物は仁支天とあるは後世の事にて幣を持てまふか○神樂式といふ物にかなでは歌毎にありされど近代には、まはず只上拍子はから神と其駒とにかなづ歌の心を舞なり皇は仰て月をみる樣をす今夜の月も只こゝにましますてふ言を作なり今世と度々折々興あらんとする時は口べきなりといへるなり】此註元のまゝ

今本に或説とて左の二首有（此左の二首古本に無はよし有り古本この所に取物に藏司勸杯酒然後人長立座云云とて前張仕事方人を召試る次第の文左に擧るが如し又袖中抄に此本歌を神樂の大直日歌なりといへり是を對へ思に取物の歌をはりて勸盃の時右の三首はうたふにて神遊の外なれば古本には載ざるなりけり然れば今本に或説としてのみ書て擧しは他の或説さがひてわろし

本

和加介禮波、美也比母志良須、（一にみやひとゑらす）

知々加可多、波々加可多止毛、加美曾志留羅牟、

（われまだ若ければ宮風たるわざもゑらず父が方に似て拙きか母に似たるか只神ぞ知り給はんと云なり、こゝには此歌舞の拙きよしに取てうたふべし然れば宮人ゑらずと有はかなはず○みやびのびは夫利の約にてみやぶりみやび鄙ぶりひなび里ぶり里びなどいふみな聞ゆ）

末

美那比止乃、志天波佐加由留、（此志天はゑしと重ねたる言をゑてと誤しにて盤共に榮るといふか何ぞといはゞ志天は木綿垂なるをいを略きて志天とのみ云は後世の俗こそいへ其上志天に榮るてふ言も事もなし此歌こゝも末も字いと誤りしなり、）

於保奈保美、（保を乎の如くいふ於保奈保美は大直會にて公の神事終れる時に神に奉りしおろしものをもてそれに仕奉れる人々に宴を賜ふを云、さて齋の殿かなりしを常に直して集會よしにて奈保利阿比と云を其利阿の約良なれば奈保良比といへり此良比を約

れば利となるを轉じて奈保比とも奈保美ともいへり美の清と比の濁と通ふ例なり○大とは公の意にいふ紀の社又は私の神事にはたゝなほびといふなり右のこと古今集の注ともはすべて誤れり紀などの古言もてしれ）

以佐和加止毛仁、加美左加毛止仁、（此一句又いと誤りぬ、思ふに、以萬和加と毛毛と美左かえ牟かと有てともに我等も富榮ゆかむと云なるべし、然るをまとさ、もとに、ととか、えとも、むとと、かとに、を見誤りて今の如くは成しものなり、古の草の書は毛を歟と書くをにに誤りえを仁に誤るべし、又さかえゆかむのゆを略きてさかえかむといふは古歌の例なり）【天平神護元年十一月の紀の詔に今日大新嘗乃猶良比乃豐明聞行日仁在云云續日本後紀には大嘗祭の河原御禊にも直相の幄ともいへり皆其事の終の酒宴を云のみ豐明前會直相とも書り或人神直日大直日神は惡き事を直す神成に依て此語をいふは似たるに惑へる物なりかれは惡き神を直し是は神事を常さまになほす時集會を云にて言ひとしくて意異なり】

取物了藏司勸盃酌（此時右の二首をうたふ故に袖中抄に直會歌といひしなるべし神樂は取物を專らと奉ればそれ終りての勸杯なれば是も直會の類とするならん）然後人長立レ座庭火之前出來云可仕方之男召須然暫猶豫見廻隨時體先召上蔕大臣以下殿上人舞人陪從須盡數召之也然而隨當時之氣色或五六人以上七八人以下可召之歟則隨召參庭火之前人長仰云何天布方遠加仕徒留召人之中上蔕上卿大臣以下或揖人長歸座或下蔕中於散樂堪能之者人長不著座志天頻召返志天令盡其方事畢人長更向御前申云男共令立天各方試了今波前張可仕之狀申多利則自唯稱志天歸本座了（これは前張の初の次第なり）【裏書に或本文、取物了次人長申天云酒司二度杯給（次殿上乃頭以下可然人取杯各座留合杯了天人長申云可和舞男召須隨天各次第々々其之方仁仕留次男共乃方試了奴今前張可仕支狀止○上の取物下の前張も人長のかなづると注に見ゆ然ればこゝに和舞と云は前張の外に舞有故に試るか恐らくは和琴の誤ならん】

阿知女法、

本方　阿知女　百百於々於々百百志々志々　【是には志々々々てふ音を添

末方　阿知女　百百於々百百志々百百於々百百志々百百於々百百志々百百於々百百志々　いふは共に聲ならはしのみか】

本方　取合

末方　取合

大前張

○宮人、號狹伊張歌、（此本宮人の傍に朱もて大前張と注し又次の階香取の下に宮人より階香取までを大前張といひ薦枕より下を小前張といふてふ事を注せり、然れば是を大小と分け云ふ事古へは無かりしなり、今本に大字に標したるはわろしさてさいはりに衣はすらんてふ歌よりさいはりてふ名は出たりと誰もいへり、さらば其さいばりてふ歌を始めにうたひ初めしが漸に他歌もかりて歌の次まへ去りへに成にしより今は名のよしもおぼつかなく聞ゆるなるべし）

本

見也比止乃、於保與曾己呂毛、（大よそひごろもなるを、ひはいはでも有なりよそほしき事をよそ〳〵しきといふ類なり且大とは檢非違使隼人などの大衣といふとは異にて宮人の袖著襴著たる衣は唯のよりは大きにてうるはしければほめて云ならん）

比佐止保之、（襴著衣は膝の下に裔いと長ければ膝通しといふべし○此末は末方のうたふなり後の本ともにも同じく片歌づゝあり）

末

比佐止保之、（一歌の本末をわかちうたふには此五言を下にもみな重ねいへり七言を始にはうたはれぬ故なるべし）

支乃與呂之毛與、（其の大よそごろもは著るにさまも心もよろしといふなるべしよろしとは萬と、のひたるをいへばなり且或本に由支のと有はひがことなり其よし下にいふ毛與は助ることば）

於保與曾己呂毛、（上の言を二たびいふは古へ人の心ねもころにして且風流なり）

古語拾遺に右のごとくうたふは今の俗にて、美夜比登能、於保與須我良爾、伊佐登保志、由支能與呂志毛、於保與須我良爾てふ歌ぞといへるはかへりて理りなし公の事とても夜ひるを大ひるてふ言やはあるひさとほしてふ言も何ともなし雨よろしてふ言も有べからず、且雪はひるこそあめれ夜の雪いかでよろしきにやこの拾遺の作者古人といへど古歌古言をば意得ざりける事既に庭火の所にもいふがごとし又同じ人此歌を崇神天皇の天照太神の鏡劔を笠縫の邑に遷奉り給ふ其夜に宮人皆參りて宴する時の歌ぞといへるも其比の歌かゝる物と思ふにや此歌は、清見の宮などより古へのすがたにあらずよく上中下の世々の事を思ひ知たる人ぞ分べき

○木綿志天、（木綿も垂（シデ）も既に上にいひつ）

本

由不志天乃、（ゆふしでの神の云云とは必つゞかぬ事なりこはゆふしで留とありしを誤りたるものなり）

加美乃佐支多爾、（佐は加の誤りなり一本に多支田とあるも同じく誤れり加支田は神代紀に「一書」日神尊以天垣田爲御田、萬葉十三又神南備乃清三田屋乃垣津田乃池之堤之と有も同じく堤など有田を垣田と云なり古事記萬葉祝詞に青垣山と云は山は卽國の四方の垣なり田の四方の堤も田の垣なり此垣有は或は堰て水をたくはへ或は下樋して水を漏すなと心のまゝなれば良田なりかの素盞烏尊の川依田は水に漬り口鋭田は水をたゝへかたきにむかへて思へ○或人多支田は高田の轉とて神代紀の海神の敎へ申せし高田の言を引つ是は兄作高田汝可作洿田ともいひて雨多く旱多き時の爲にて片よればこゝに打まかせて高田をよしとなしがたし）

以奈乃保乃、（稻の穗なりさていねのといふを乃を略きいふ時こそ以奈穗といへのといふ時はいねのとあるべし是等うたふもの、誤りなりいねの妻をいなづま、舟の人をふなびとなど云をもて去れ）

末

伊奈乃保乃、毛呂保耳志天與、（もろほは眞穗といふに同じくて闕る事なくよくみのれるをもいふべけれどこは次の言に合て穗ことに足てもろ〳〵靡き垂よといふなり萬葉十に秋田之穗向之所依片依てふもむかへてみよ）

古禮留保毛奈久、（古禮留はのこれるの乃を略きたるなり上の諸穗といふより出たる言なり○後世の本に、これぞいふなし、とあるはことわりなし上にあでなど有ていふなしとては辭そなはらず）

○前張、（張は借字にて前芽子（ハリ）なり卽初はきの花を前と初と通はしいふは初穗其外の初物の貢を荷前（サキ）といふ類なり）【後世の記錄等に佐井波里と書はひがことなり

佐幾の義を伊に轉じいふは古も今も常に多きをいかで誤りけむ】

本

佐伊波里仁、（はぎを萬葉にはりともいへり、且紅の初花染とも若紫ともいひて初はなは色よければことにめづめり【萬葉に榛とも借て書しをよくも歌を考へぬ人是ははんの木の事ぞといへるは甚ひがごとなりたゞ秋はぎの事と知べし又是に草はぎ木萩の別あれどそれを分ちて字を用ゐしにはあらず】○摺衣の事はいふに及ばず）

拾遺神樂

古呂毛波所女无、（秋はぎにて摺れば文などに其色のそみ付物なればそめむともいへり萬葉に班衣を染むとよめるもまだらに摺をいへり、古へ物の文を染付る事はなくて文なすは皆摺のみなり後世意もて染に摺をかたくなにおもふ事なかれ）

安女不禮止、（雨降どもなり、摺たる文は雨露に移り易し、）

末

安女布禮止、宇徒呂比駕多之、（色の移り變り難きなり）布可久曾女天波、（萬葉十六に紅に、染而之衣、雨零而、爾保比波雖爲、移波米也毛、てふを強てかくよみうつせしならん、何ぞといはゞいか樣にふかく摺しむるとも秋はぎずりはぬれてうつろはじやは、深紅（コキ）などはぬれたる時色はにほひ摺とも卽うつろふものならず古歌はまこと有りこはならの末などの歌か）

本方安知女（於々々々志々々々）末方安知女（於々々々志々々々）裏書に以前宮人木綿志天前張此三首は各志門歌二返尋琴拍子打尻擧二返以三度拍子唱自末方籠出　件三首拍子同

○階香取、（尾長鳥を字を借て書り萬葉に此類多し）

本

之奈加留夜（留は里の誤なりされどいつよりうたひ違へけむ貞觀に撰れむにはなどかかくてあらん○玄長鳥ゐ奈野などつゞけし萬葉にいと多し、さて此鳥は和名抄に獵子鳥といへるにて雨のふりはじむる時山より群出で里の木村などに遊べり大きさひえ鳥の如くで頭黑く身はなだに尾長し故に今人尾長鳥といへり其尾を後尾とも後ともいひ其玄りを玄とのみもいふは後付を玄つき、水の玄ひく、なども後（シリ）の略きなり、【おのが前に書し冠辭考にくさ〳〵いひ玄が皆よろしからずたゞ

頭に書しこそよく侍りしを其時は心まどひして專らとせざりしなり】仍てかの尾長鳥後長鳥とはいふなりさて必群ひきゐて遊ぶ鳥なれば率てふ意にて猪奈につゞけ又あゝと鳴故に玄長鳥安房ともいひかけためり此冠辭を解かねて附會の說多し皆後世の意にていふにたらず）

爲奈乃見奈止仁、（ひきゐる事をゐといふ事は古事記萬葉皆爲のかなにて此所をも古へ皆猪名爲奈など書こと假字書異なかりし、今こゝも違はざるなりさてこの湊は猪名山猪名野など同じ名にて假字も同じければ攝津國豐島郡なるか萬葉七に大海にあらしな吹そ玄なが鳥ゐなの湊に船はつるまでといふ歌の次に名子江の濱の歌をつゞけしは攝津國にてはあるべければなり）【神名式に攝津國豐島郡に爲野都比古神社有和名抄には河邊郡に爲奈鄕ありさてゐ奈野は有高山によみ合せたれば山方にて海は遠かりなむ仍て河邊郡にゐなの湊はありとする人も有土人に問て定むべし】

安以曾、（歌の節に云辭なり今本にあひそとあるはわろしかくの如き辭に安比など書ものかは）

以留不禰乃、（入船なり今本につりふねと有はひがことなり古へつり船にはあま人こそのれこゝの歌海人のさまとはきこえず）

加千與久萬加世禰、（古へかぢと云は加伊に同じくて後世に櫓といふ物なり眞楫八十楫などいふにてしれ○萬加世禰は楫をよく取設けよなり此まうけを萬葉に萬介といへり介を延れば加世となりぬ○禰はいひ合ことばなり）

加太不久奈、不禰加太不久奈、（不禰の言今本には落たり必あるべきことぞ）

末

和加久佐乃、夜、（若草は夫婦にたとふと景行紀に注し又妻を妹と云は古へのならはしぞと雄略紀に注せり此意にて若草の妹ともつゞくめり○夜は與に通ふ辭なり）

以毛毛乃世太利、（今本乃里と有こは何れにても有べし又此下にやの辭あり是は古本の方落しにや）

安以曾、（既いひつ）

和禮毛乃利太利、夜、（古今集にわか草のつまもこもれり我もこもれりてふに似たり）

不禰加太不久奈、不禰加太不久奈、

裏書に於毛之呂支加波乃於止也、、、、、、、、爲也爲奈乃布志波良也安伊曾安見佐須人和加世乃支美波伊久良止利介介无、、、、或本有此歌但不注本末といへり是は次の歌の亂れ誤りし本にかく有を有かまゝに書つけしにて取にたらず今本こゝに井奈野てふ三字を標して本末の歌二首あるはわろし次に本末本末と四首有て上の本末二首と合せて六首の歌同じ

階香取なる事左の裏書に見ゆ

拾遺神樂

之奈加止留夜、（上にいひつ）

井奈乃不志波良、安以曾、（不志は柴の類の一つの木にて齒黑に用る空ふしは柴の葉に付てなれりその木の多く生立たるをふし原といふ【神代紀に青柴籬、後に淀のふし漬などいふは只柴の事なり、物は細くいふと大かたとあり】

止比天久留、（拾遺集には飛渡るゑきが羽音の面白きかなといへり）

之支加波於止波、於止於母之呂支、之支加波於止、波於止、（萬葉によめるゑぎは皆水にすむしぎなりこゝに云は山ゑぎか今昔物語にも山じきの事有るなり萬葉に「十九」見二飛翻翔日鳥一作歌とて春儲而物悲爾三更羽振鳴志藝誰田爾加須牟古今集にゑぎのはねがき百はがきてふはがきは羽の繁く打振ものなればいふ事此萬葉とこゝの羽音の面白きとをむかへ且紀にたちかきすといふ言に擊刀の字を用ゐしなどを合せてかきは打振をいふ事知るべし、さてかれが羽音も時にとりて面白くおもふこともあり萬葉一に旅にして物わびしきの鳴ころゑもきこえざりせばこひてゑなましとよめるも時につけたる興なりけん）

末

之奈加止留也、（上に出）

井奈乃不之者良、安以曾、阿美左須夜、（今本ともにかみさすと有はひがことなり古本ゑか有さて鳥網は竹してさし張おく故にさすといふ）

和加世乃支美者、（こゝは妹がことば、せとは夫をいふ）【勢子とは古へは人を崇み親みていふ言にて兄弟の人男を兄といひ女を妹といへり男とも互に我勢子とも我兄の君ともいひしこと紀萬葉に多し事につけて知分くべし】

以久良加止利介武、以久良加止利介武、（其あみにていくらのゑぎかとりけるらんと問ふなり是をか美さすと

誤りて髮の事などいふ說有は餘りしき事なり多く代を經てうつし〳〵せし書には字の誤有ものと思べし上のゑきの歌より下しでゑぎとる數とゑらるべき物を）

又本、（今本こゝには脇母古と標せるも後のわざにてわきものきは濁る言なるを脇母古と清る字を借たるも古へに違り）【和賀以毛古てふ言を賀伊の約藝なればわきもことといへり依てわきのきを濁るなり】

和支毛古仁夜、比止與者太不禮、安以曾、（一夜膚觸なり）

安也萬利仁之與利、（或說に只一夜のまゝにてえ逢事のかなはぬをあやまりしとはいふといへるはよし中々なるあひごとせしより心うかれてとりもとられずといふなり○仁之は去しの略にて過去し事に云古言の例なり今本にこゝの仁の言は落たるなり）

止利毛止良禮須、止利毛止良禮須夜、（右に以久良止利介武といへるこたへなり）

末

之加利止毛、（右の鳥もとられずてふをうけてさては有ともといふなり是は妹が又いふ○今本は毛を天にあやまる）

和加世乃支見波、安以曾、五門止利、六門止利、（鳥の數をいふ下皆同じ）

七門止利、八門止利、九古乃與十乎波止利、十乎波止利介武夜、（九古乃與の與は今の常にも七つ八つ九つといふをなゝよやよこゝのよともいふに同じく與はかのよび出す辭なり是をも直に夜の事といふはわろし此一つのみ夜のことをいふべきにあらねばなりゑかして惣てをいふ時は鳥の數をもて逢しをたとへしにもあるべし）

裏書に

件の歌宮人由不志天前張階香取以二此等一天號二前張止一至二階香取一世に絶る歌也雖然注申宮人由不志天前張以二三首一遠一各本末仁別天拍子波一首仁十也仁而本方留五末方仁五なり尻擧波三度拍子乎以卽此等乎號二大前張止一次以下號二小前張止一これに階香取波本三首末三首と有と右の歌の數かなへり、仍て井奈野暢世子の二ッの標は後世人のゑるせしものと知ければすてたり

○難波方（方は借字にて潟なり）

奈仁波加太、志保美知久禮波、安萬古呂毛、（因簑といはむとて雨衣といへり）

安萬古呂毛、多美乃乃志萬爾、（こは卽攝津國難波の田簑島にして祓などする所なり）

多徒多知王太留、（此今本古今集にもたづ鳴わたると有此言の例萬葉に皆鳴渡とあれば今は唱誤れるなりけり）

○此歌は萬葉六に赤人の若浦爾鹽滿來者潟乎無美葦邊乎指天多頭鳴渡てふを所をかへ三四の句に文をなしたるにて今京の始の比の歌なり○裏書に難波方不入此譜以他本所書入也と云り上の裏書に大前張小前張の歌の名を擧しにも難波方てふ名のなきは實に此譜に不入ものなり然に他本と云は今本などの事かおもふに後にくはゝりし成べければ除かんもよし）

小前張　法如例（小前張はこゝも朱もて書り）

○薦枕、

本

古毛萬久良、（武烈紀に擧慕廡矩羅拕箇幡志須擬萬葉七に薦枕相卷之兒毛此外いと多し蔣は古へ枕にせし事又高とつゞけしよしは冠辭考にいへり）

以也、（辭なり今本には也とのみあれど古本に良の下に拍子一ッ以也の下にも拍子を一ッ云るせしかば本以也と有しなり）

太加世乃與止仁、也、（和名抄に河內國茨田郡高瀨）

安以曾、太加仁戸比止曾、（誰その贄物を取人ぞと問なり）

之支門幾乃保留、（之ぎを後世も突網といふもてつきてとるなり乃保留は川邊の蘆などの中を突てのぼるなり）

安見於呂志、（こは魚をとる網なり）

佐天佐之乃保留、夜、（萬葉一に小網刺渡とも書て後世に有）

安以曾、太加仁戸比止曾、之支門幾乃保留、安見於呂志、

佐天佐之乃保留、（安以曾より下今本には落たり）

末

安女仁萬須、也、止與乎加比女乃、夜、（上にはへり）

安伊曾、曾乃仁戸比止曾、志支門支乃保留、安美於呂之、

佐之乃保留、

從此折

三度拍子

又本返

多可仁へ人曾、多可耳へ人曾、志支徒幾乃保留、安美於呂之、佐天佐志乃保留、

又末返

曾乃耳倍人曾、曾乃仁へ人曾、志支門支乃保留、安美於呂志、佐天佐之乃保留、

本方　安伊志々々々

末方　安以之々々々

【是より下篠浪までは本末ともに安伊之と有て殖槻より下は安以佐とあり其上の磯良が前にも安伊之と有を裏書安伊佐兩度と書たり然れば皆安伊佐なるを誤て安伊之など書か其人に問べし】

裏書云

件歌各一度唱後末籠出次本籠出如此本末共籠出なり自二度以來各從誰贊人唱數之從末折唱次本折唱也此歌以後至于千歲安以數三度云

又云此歌以後鷄安以志兩度

こゝに右の歌の折返の異ることさまゞ〳〵ゑるせれど皆歌人ならで用もなければ略けり

○志都夜乃小菅、

本

志門夜乃己須介、（萬葉に湊の蘆の中なるゑづ小菅といひしかばこゝも下小菅にて夜乃は助辭なり志門は下つにて蘆などの下に在小菅なり志づの身ゑづ心ゑづ鞍などのゑづ皆下の意のみ）

加萬毛天加良波、於比牟夜己須介、（此下今本ともに歌は落たるなり古へ有しかばこそ此下十一言古本に拍子など委しく付てあり）

於比牟夜己須介、（鎌もて苅たらば又其根より生むやいかゞと云なり）

末

安女奈留比波利、與利己夜、（與を一本於と有はよく聞えたり）

比波利、止見久佐、止見久左久天、（萬葉に鳥の枝くひ持てとよみ後の物語ふみに花の枝くひてとのみも書たれば今をよしとす一本に毛知天と有は中々たらず止見久佐は稻の名の如くとりなして詞花集又俊成九十賀にもよみたれど例の推はかりと聞ゆ今考るに古本の風俗歌の荒田ぶりに安良太仁於不留止見久佐乃波奈天仁門見禮天見也戸末井良牟と有ぞ是には侍るさて荒田に生ると云は春田に生る小草の事なり手に摘といへるもゑかなりひばり乃天にのぼるも春なり稻は秋の物なればいとよしなし風俗歌は古きものなるにゑかあれば外は

云にたらず）【相模家集に「み山なるとみ草の花つみにとてゆるきの袖をふりで、ぞこしと山にいへるはいかゞなれど是もつみにとてと有は右に似たり】

又本返

志門也乃古須介、加萬毛天可良波、於比无也己須介、於比武也、

又末返

安女奈留比波利、與利己與也比波利、止美久佐、止三久左久比天、

本方　安伊之々々々々

末方　安以之々々々々

○磯等前、（注に此歌貞觀神宴之時撰定歌也次之日依有忌諱停止として說あれど不祥といへり）

本

伊曾良加左支仁、（或說名所といへるはわろし東に磯所てふ所は萬葉又神名式などにもあれどよしなし此下の弓立歌に伊世之末乃と本にいひて末に以曾良加佐支仁といへればこゝも只磯の崎といふのみ）

太比門留安萬能、多比門留也安萬乃、（此所の注に籠ニ安字上ヲ上ハ籠ル安字の上太比門留なりと云り此注に籠と云は言を略きうたふ事なり然れば終の句も太比門留安萬乃と有しを擧てうたはぬ故三言のみ書なりけり）

末

和支毛己加、（上にいひつ）

太女止、太比門留安萬能、（こゝも次も一本に毛とあれど又の返しともに依に猶能なり）

太比門留也、太比門留安能、

又本返　折說

以曾良加左支仁、萬以曾良加佐支仁、（萬は眞上に添いふ事古言の例にて催馬樂にさら〻の濱にましら〻の濱にといふ類なり）

太比門留安萬能、多比門留、

又末返

和支毛己可多女止、萬支毛古加太女止、（眞我妹兒といふべきを眞の言を置故に和を略きたり例有事なり）【下の殖槻の歌に和禮乎支天と有は我乎於支天の於をば籠總角の本歌に曾乎毛不止と有も其乎於毛不の於を籠て上の乎をば其まゝいへる類前後に數々有り】

太比門留安萬能、太比門留安萬能、太比門留、太比門留安萬乃、

本方　安伊之々々々々

末方　安以志々々々々

裏書云云此歌以後迄至千歲安伊佐乎各兩度云

○篠波、（紀にも萬葉にも篠浪と云は近江國の志賀郡の中の大名なる事みゆ小波の事にあらぬよし委しく冠辭考にさるしつ依て地名の時は佐々を淸く唱ふる事なり濁れば小波の事となりて事別なり古きふみともに皆かく篠の字をのみ書しも此意なりけり）【紀に篠と有も同じ萬葉神樂浪など書はかり字のみ小波をば濁りて作作奈美と萬葉に書】

本

佐々奈見也、志加乃加良左幾也、見之禰門久乎見名乃、（御稻舂女なり見よりつゝく言便にていねをさね【晩稻を於志禰と云は曾以の約志なればなりされどもこはさからず○稻は莖ともに有をいへど又米としたるをも祝詞などには稻ともいへり、然ればこゝも米つく事とす】といひたり且この見は公へ米として貢るをつく故に御といふか猶只眞をみといふ例のごとくせむぞよき○女を乎美那と云は紵績女なり是を乎无那といふは言便のみ）

與佐々也、（好さ〳〵を略けり萬葉に久々を比佐々淺々を阿曾々と略きいふたぐひなり）

曾禮無加名、（一に加毛と有もひとし）

加禮毛加名、（一に毛、其女ともの皆よければ其をも彼をも妻にしてしかなとおもひ乞なり）

伊止己女仁、萬伊止己女仁世牟也、（古本伊止己世とある世は女の誤なり寢床妻に眞寢床妻に爲んといふなり此末歌に與女乎江須止天といへるは卽こゝの言なるをむかへ見よ是を從兄弟といへる說は歌の理も聞えず又女を兄と云も無きことなれば從ふべからず）【古へ女より男を兄といひ又男どもは人を崇み親みていひしかど女をさして兄と云し事ばかりにもなく古書みぬ人は古言をさらで後世古今集の注などに女をもわかせことといふなどいへるこそをこなれ其歌の意をもよく心得ぬ故ぞ】

末

安志波良田乃、（蘆さげき海邊の田をいふ）

以奈門支加仁乃也、（稻舂蟹なり和名抄に蟛蜞は海蓬稻舂蟹之類也といへり今濱邊の蘆原などには小蟹のはさみ手の異に長きが多く集りて一度に腕をそろへあげつ

おろしつするものありまことに稲つくが如し故にそを稲つきがにとはいふめり）

於乃禮佐戸、與女乎江須止天也、（與女は童女を大殿祭の詞出雲風土記にもよめとよみまた髪あげせぬほどの女をいふ萬葉にうなゐはなりといへるも是なりこゝも其如く若き女をほしむを云後世新婦をよめといふも十五六ばかりの童女をむかふればなりされどこゝは只婦を不得と云のみとすべし）

左々介天波於呂之也、於呂之天波佐々介也、（腕をさしあげてはおろしさしあげてはおろすといへり）

加比奈介乎須留也、（腕擧を爲にて右のさゝげつおろしつするをことはる言なりあを略くは肩擧を加多解、持擧を毛多解といふ類なり或人は是にかひ無てふ事をそへてよめるといへど添たるものと聞えず只其手をひまなく擧げおろすを身をもたゆるさまにみなせしなるべしさてこは右の稲つく女を得むとする男をそしりて女ども答へたる歌なり古今集に「あし引の山田のそほづおのれさへ われをほして ふうれ はしきこと催馬樂に「山しろのこまのわたりの 爪つくり われをほしてふ云云これらのたぐひなり）

又本返

右に同じ、

又末返

右に同じ、（末の佐々介也を是には佐々介天也と有り理りは是も聞ゆれど猶天は無ぞよき又是には加みなけと有みは比を書誤れるなり）

本方　安以志々々々

末方　安伊之々々々

裏書に又云捧者下有二説、

正説左々介天は於呂之毛於呂之天は左々介夕々々々中に夕上于々々六夕々々中夕々々夕々々上て々々六

林説左々介天は於呂之於呂之は左々介六于中に夕々々々上于々々六夕々々々夕々々上于々々六

○殖春、（殖槻てふ所なり今昔物語に大和國敷下郡に殖槻寺と云寺有といへり田中神社は貞觀の記に授大和國田中神從五位下と有是にて此歌に合せみれば同敷下郡なるべし然るを近世の人添下郡の郡山の東北に植槻八幡社又觀音堂又殖槻社も有同郡田中村といふに田中社も今在といへり然らば古への城下郡の後を今は添下郡へつけし故にやあらん）【今の郡の圖にては城下と添下の間へ平群郡の末少し交入て右二郡つゞかねど惣て郡堺古へと違る多ければ今を以て定かにいひがたし】

本

宇惠門支也、多名加乃毛利夜、毛利夜天不、（夜は言の助のみにて田中の杜といふといへるなり天不は萬葉の歌には知布と云て何々といふといふ辭なり今京このかた其知を豆に轉じて天不といへり）【登以の約知なれば知布といふこそ正しけれ】

加佐乃安左知可波良耳、（加左てふ所萬葉二に石上乙萬呂朝臣の笠の山とよみ又笠金村笠郎女などもこゝより出し氏なるべしさてこの歌のつゞけを思ふに笠てふ所もかの植槻などの内か又續きし所なるべし近世の人は城上郡に笠村てふとて右をもそこへ引ていへど添下と城上の間に山邊郡を隔たればいかゞあらん【此地の事をばくさ〴〵いふ説あれど多くは私の意にてよりがたし】○安左知可波良は地の名とは聞えず荒たる所のさまならん顯宗天皇紀の御詞に倭者彼彼茅原淺茅原弟日僕是なりとのたまひしも御父市邊押齒王大泊瀬王に殺され給ひて其御子たち難を避て播磨に僕と成ておはせし時なれば其御舊郷をゝかの給ふと聞ゆるなり）

末（是は一首の歌を本末に分てうたふ）

和禮乎支天、（我乎於支天てふ言なるを我乎の乎は本のまゝにて於支天の於を略きて五言にうたふなり次下に其乎於毛布てふを曾乎毛布といへる類なり【此於を略き我乎を本のまゝに書しは古き所なり後へは誤て物を置くに乎のかなを用うめればよくせずばひが意得有べし】さて笠の淺茅原に我を置てとつゞくにはあらで其笠てふ所の女のもとへ男の通ふを云ふ右の天不といへるは本妻のさる所を聞ていふ辭なるにてかくて我をおきては我を除きてといふなり）

不多門萬止留也、（我を除て又その笠なる女をも妻とするよと前妻かうらむなり）

止留也天不、（是も人のいへるを聞たるよしにててふといふ）

加左乃安左知可波良耳、【此天不より下を一證に、加美能幾能世曾は乃門へ、又一つは止利志宇多留奈也と有は何ともなし次の返しにも今の如くうたへば此説其はひがごとゝ聞ゆ】

又本返　奈保宇惠門幾

又末返　奈保多那可
又　奈保宇惠門幾
又　奈保多那可
又本
多那可能毛利也天不、加左乃安左知可波良耳、（上に同じ）
又末
不多門萬止留也天不、加左乃安左知可波良耳、（上に同じ）
本方　安以佐々々々
末方　安以佐々々々
○總角、（先、凡にていふ時は八歳より十五六の歳までは男女ともに髪ゆはでわら、けて有故にわらはとはいふ又男のわらは、みづらゆふとてひたひ髪を分て二所にゆふをあげまきともいふなり紀にひさごはなにすいとへるも是らのさまなるべし此事をから文字もて總角と書は牛角に譬ふと或人いへりもし鹿茸に似たる故か）
本
安介萬支乎、（右にいふが如しこゝは十四五にもなれるをいふべし）
和左多仁夜利天、（稲に早稲中稲晩稲あり其早稲作るべき春にても早稲田といへり是をうちかへしにやりたるをいふべし）
曾乎毛不止、（曾乎は其をなり於毛不の於を略きて毛といふは古言の常にて萬葉に多し）
曾乎毛不止、曾乎毛止、曾乎毛不止、
末
曾乎毛不止、名仁毛世須志天也、（也は辭のみ）
波留比須良、（須良はさながらてふ言の約まれるにてそのまゝといふに同じ）
波留比須良、波留比須良、波留比須良、（此一説あげまきをわさだにやりてはる日すら何も止里世須波比久良志門波留比久良志門と有といへり然れば一首の歌なるを末の言を畧きてうたふなりけりさて田舍の女のかのあげ卷を戀思ふとて春の長き日ぐらし何わざもせずいたづらにながめ暮しつと云なり【或説にあげ卷を田へやりしかど何もせであそびをるらんを思ふ意といへるはわろし】萬葉に春日尚田立羸公哀若草孋無公田立羸てふをとりなほして賤がうへに譬ふ歌と聞ゆ萬葉に石川郎女か玄がの海人にたとへてわがことをよめる類多なり）
又本返、
和左多耳也利天也、曾乎毛不止、曾乎毛不止、曾乎毛不止、曾乎毛不止、曾乎毛不止、
又末返、
奈耳世須志天也、波留比須良、春日須良、春日須良、春日須良、波留比須良、
本方　安以佐
末方　安以佐
○大宮、（大裏をいふ）
本
於保見也乃、千比佐古止禰利也、（御前に仕奉る童にて世に愛して在を云禁秘御抄に小舍人六人近代及十二人歟昔白張裝束也小舍人召加藏人下知有名薄歟てふは後に内豎の代にせしなどなるべしこゝに小舍人と云は殿上童てふ類にやとおぼゆ○舍人てふ言の事はすでにいひつ）
天々仁也波、天々仁也波、（乳兒に物いふが如く言を重ねて手々にといふなりされど一本に天良仁也と有は良を添いふ古言の例なれば一本を用うべし次皆同じ○下に波を添るは意なし古歌に也波とては波は助字のみなるも有）
多萬名良波、天々耳也、（萬葉に玉有者、手爾卷持而、衣有者、脱時毛無、また「同四」玉有者、手二母將卷乎、麝膽乃、世人有者、三卷難石てふたぐひ多し）
末
太萬奈良波、比留波天耳須惠、（一本止利と有もさる事ながら返しに依て須惠を用うれど纏といふべきをするといふは今京このかたの歌なり）
與留波佐禰女、天々仁也波、（今本にはさねてむてにやとあるは誤れりと見ゆ）
與留波禰女、天々仁也波、（前後の例によるに也の下に波を落せしと見ゆれば加へたり惣ての意は畫は掌に居てめで夜はいだきて禰ばやといふなり是は只愛しとおもふまゝにいひしなるべし）
又本返
千比佐古止禰利、天々耳也波、天々仁也波、太萬那良波、天々耳也波、（上に同じ）
又末返

太萬奈良波、比留波天耳須惠、與留波和加天々仁也波、
（和加の言是にのみ有るはいぶかし禰女を誤るか）
天々耳也波、天々耳也波、
本方　安伊佐々々々
末方　安以佐々々々
○湊田
本
美奈止多仁、久々比也門乎利也、（和名抄に鵠大鳥也日本紀私記久々比と云り古事記（垂仁）にも萬葉にも玄か訓、出雲國造神賀詞に白鵠といへるもともに同じくて後世白鳥と云は此鳥なり古事記と紀に鵠の事を白鳥とも有もておもへ）
止呂知名也、（鵠を取藉無也といふを留毛の約呂なれば止呂知といへり【或說に取知惠無とも取術無とも云るはひが事なり】是は萬葉「十三」花橘乎末枝爾、毛知引懸、仲枝爾、伊加流我懸、云云己之母乎、取久乎不知云云同集に「卷五」母智騰利乃、可々良波志母與などよめるをおもへ）
末
也門奈加良、毛乃毛須乎利也、（物思はずの於を略く例は上にもいへり何ごゝろなくてをるをいふ）
止呂知奈也、止呂知奈也、也門名加良、止呂知奈也、
又本　返、
久々比也門遠利也、止呂知奈也、（上に同じ）
又末　返、
毛乃毛波須遠利也、止呂知奈也、（上に同じ）
本方　安伊佐々々々、
末方　安以佐々々々、
○蟋蟀（萬葉の今本に初句に蟋蟀之と有をきりぐすのとよみ末の句に蟋蟀之鳴と有をきりぐすの鳴と訓しはひがごとなり此初句はこほろぎの末はこほろぎの鳴と訓べき事なり毛詩に蟋蟀を七月野に鳴八月在宇九月在戸十月蟋蟀入床下鳴と有におなじくこほろぎこそ今も玄かあれきりぐすてふ虫は夏より秋の中らまで野に鳴て終りぬ是を歌にあやなしてつゝりさせてふきりぐすなどよみたるをみだりに蟋蟀にあてゝ和名抄にも訓誤りたりこゝの歌は鳴ことをいはねば何をきりぐすといひしか知がたきに似たれどきりぐすに此二字書しは後の人のわざなり）【聲ある虫はころもて名とす今もきりぐすと鳴虫有り又きりぐすは晝鳴て夜はたま〳〵鳴を歌に專らに夜の虫の如くいふはあやのみ萬の物文と實とを知わくべきにこそ】

本
支利支利須乃、禰多佐宇禮太左、（禰たさは心萎痛（ナエイタキ）なり略きて左といふは見痛閉痛の如しきもさも辭なり此宇禮多さなと云も皆同じく其事の强きを痛と云さて心に物おもふを玄なべうらぶれと云、其玄なへ堪がたきを禰たきといひぬ奈要の約禰なればなり怨の字をあて、言の意をばゑる人なければいふなり）
美曾乃不仁、萬爲利支天、（御園生に參來てなり）
支乃禰乎保利波牟天、（木の根を堀喰むなり）
於佐萬佐、（歌のふしの辭）
門乃遠禮奴、（きりぐすに角はあらねど木の根をほるてふに依ていふのみ毛詩に誰かいふ雀に角なしと何によりてか我屋をうかつといへるをうらうへにして意得べしみなたとへごとにさる類ひ有なり）
於佐萬佐、於佐萬佐、門乃遠禮奴、（ひなの國より出て門部兵衞などにも成て仕奉しか猶よろしからん事計をして中々にわろき事に成し時などの譬事となるべし宮內內膳主殿掃部など御庭御園などのつかさの下もてもいふべけれど譬には定めなければなり）
末
於佐萬佐、禰多佐宇禮多佐、美曾乃不耳、萬爲利支天、幾能禰遠、本利波牟天、於佐萬佐、門乃遠禮奴、（後世の本に言いと少きは落し物なり本末の歌の例をもて玄るべし）
或說（左の本末の歌古本にもなしかの貞觀の撰の時除かれしを又かへられしときもあるか）
本
志多良、加萬宇止乃、（或說玄たらは所の名かまうとは高麗人なりといへるはさも有べし和名抄に參河國に設樂郡設樂「之多良」といひ今甲斐にも同じ玄たらてふ里有り然ればいづことはさしがたしさて古へは他國の人多くまうきたる諸の國におかれしかば直にその人ならでも子孫をもくだら人こま人などいひしなり）【或人上を玄たら加と云下をまうと、心得て玄たらかは所の名を云べしまうとは萬葉に臣女をまうとめと訓古今序に臣等をまうらといひ又人を罵てまうとたちといふといへるは餘りしきひがことなり萬葉のかの訓は誤なり古今序はまろらを誤又眞人は王孫のかばねにてあがめ云

にこそあれ物の本をゑらでうはべの才有人の云事は皆しかなり】

比止戸乃加里支奴、（單の狩衣なり古くは袷のかりぎぬも常なればひとへはひとへといふ）

奈止利禮曾、（禮は以禮の略なり一になとりれそと有は誤れり）

以止禰多之、（ほしたるを雨ふれど取入る事なかれといへり）

末

奈止利禮曾、古左女爾曾保奴良世、（小雨にそば〳〵ぬらせなりそぼは後世ゑほ〳〵ぬるゝといひ又ゑとゞにぬるゝとも皆韻の通ふまゝにいひてゑほるといふも同意なり此言を誤れる多し萬葉に「いや彦のおのれ神さび青雲の棚引日すら小雨曾保零其外古今集物語などにあるもみなおなじ）

與加禮須留、以止禰多之、（かのこまうどの或女の許に通ひ住るに今は他し心出來て夜かれがちなるがねたしかれがぬぎて置し狩衣をほしたるが雨ふりくれどな取入そと其女のいふなり）

これより上を小前張といふと或說ともにいへり古本には上に以下前張といふてふ說のみ有て是までてふ事はいはざれど此次々なるは琴の調などかけろふるよしいへれば別なるべし

○千歲法志加左乙門留聲、（體源抄「卷十一」には志かさへづりといふ秘事はきり〳〵すといふ辭の事なりと有を古本にはこゝに注せり何れか正しからんこゝにも上の如く安和女於介其外人長のわざ有故に法と志るせしにや）

本

千歲千歲千歲也千歲也、知止世乃千歲也、（かく樣にこの言とから音とをいふはいやしげなるわざをぎなどの言を用られしにや下にあかぼしの明星などいふみな是なり今京のはじめなどよりのこと、覺ゆ）【文撰よみとて音訓ならべいふ事有と思へる人あれどそはわらはべの爲にせし訓にこそあれかたとしていふべき事かは】

末

萬歲萬歲萬歲也、與呂門與乃萬歲也、

本

奈本千歲、（本を乎とあるは誤り志るければ改む）

末

奈本萬歲、（上に同じ）

又本返

千歲千歲千歲也、

又末返

萬歲萬歲萬歲也、與呂門與乃萬歲也、

○早歌（サウカ）、（十二）

本

伊門禮曾毛也、止々萬利、（今本に也はなくて下を止字止末利と有又一本には宇もなし此宇は上を引てうたふ聲なり何れにしても古本ぞたゞしくきこゆ）

末

加乃佐支古衣天、（彼崎越てなり是に依に上は何れの處ぞ留りはといふをいづぞと略けるなり）

本

美也萬乃古門々良、（美やまは眞山といふに同じ萬葉に三熊野とも眞熊野ともいへる類多きを思へさて山にして眞とはむるは大山奥山の事となりぬ然れどもみ山を直に深山と書く事古へはなしたゞ後世の俗なり）

末

久禮久禮古門々良、（たゞに葛なり）【或說につゞらはくる物なれば野くれ山くれといふ事といひつゞけたりと云ふは上のかのさきこゑてといふをこれと一つゞきと見しなり此歌は凡二つづゝ別なるをやよしや一つにみるとも山くれの事としては意むつかし只葛をくれとのみ見よ】

本

佐幾乃久比、止呂牟止、（鷲の頭取んとすればいと果して長くしてをかしと云か）

伊止波多奈加宇天、（波多は果してといふ言なる事萬葉前記に例を引ていへりから文の將の字を訓しはあたらぬ所多し）

本

安加々利不牟奈、志利名留古、（和名抄に蟬「阿加々利」手足折裂也○志利はうしろの方なり古はたゞに人をいふ）

末

和禮毛女波安利、佐支奈留古、（こは今の世の戯きものどもいふことなり）

本

止禰利古曾宇、志利己所宇、（今の諸本とねりこんぞ玄りこんぞとあり思ふに是は古本のうた曾宇の字誤て上下に成しなるべしされどさる誤なからうたふ例もあればあへてなほしがたし次も皆玄かり○止禰利は上にいひつ、玄り云云はあとうしろよりこんぞなり）

末

和禮毛古曾宇、志利古所宇、（我もとてはいさ、かむつかし、たとへば或人に會て舍人も後に來む我も其時來むぞといへるにや）

本

古能惠乃美加止仁、（近衞御門は陽明門也）

古志於門止、（今の本にはおといつと有、理はさる事ながらうたふにはおつといひよきならんさても聞ゆるなり○巾子は古は額と巾子とはなちて有、仍て落る事あるなり延喜市司式にも幞頭墮巾子墮とて巾子のみはなちてうる所有しをいと後にひとつには附しなり【上つ代にはたゞきぬもて頭をつゝみしを推古天皇紀に取すべて袋の如しといへり其後天武天皇の御時漆紗を用ゐしも猶さのみぬりかためしにはあらずと見ゆ】

末

加美乃禰乃奈介禮波、（髪の本根をゆひて其ゆひたる所をさし入て隱す巾子なるを、老ては髪の根無てたもたずして巾子の落るぞとことわりいふなり、今昔物語に清原元輔の祭の御使にて冠落し事いへるに巾子といはねば其比既にひたひとひとつに成しにや

本

乎美名古乃左衣波、（女子の財はなり）

末

志毛門支志波須乃加伊己本知、（一本に本を毛と有も異ならず○こは籾をつきて米とする時其臼よりこぼれたるを女子の得物とはすといふなり今も田舍にて常有事にてそれをばほまちの物と云り）【毛詩小雅大田に彼有二不穫穉一此有二不斂穧一彼有二遺秉一此有二滯穗一伊寡婦之利てふに似たりと淡輪常樹はいへりまことに似たる事なりされどこれにはかいこぼちといへれば物は別なり右によれるにはあらずくさ〳〵の說あれどとらず）

末

安不利止也、（雨のふり入る所に張出せる戸をいふべしと常樹が書けり）

比波利止、（日のさし入る所の障に張出せる戸なり上と

相互にして意得べし、今ひさしといふと大小の異のみにて意はひとし）

末

比波利止也、阿不利止、

本

由須利安介也、（一に也を與とす）

曾々利安介、（由須るとは大に搖なすをもいへどこはそそりともいふにならへばおもき物をいさゝかづゝゆりつゝ上に上るなりゆすりもそゝりも物を浮たゝすることなり）【人の多くてすり上らるゝ事といふは片よれり何にても有べし）

末

曾々利安介也、（又與）由須利安介、（後の本ともにはゆすりあげむすゝりあげむと有）

本

安知乃也萬世也萬、（彼山背山なり背はうしろにて背向（ソガヒ）といふに同じ、それはいひつゞくる言便にてそといふ、只はせといへり）【是は古本の一本は後に書入たり次の二度皆擧たる所に此歌こゝに有り無は落しものなり又後世の本にはとねりこんぞの次に是をのせつ】

末

世也萬乃安知乃古、（世山は右の如く其背山の又彼の方に居る女子を思ひていふなり又後の本には是もあちの世とあり然らば背山の又の彼の背といふ意なりことばをかさねいふさまを思ふに是は後の方によるべし）【成務天皇紀に山陽を影面山陰を背面と云しは意別にて、萬葉一、藤原の宮作の歌に、背ともの山の事有ぞ北の山をいふ】

本

多仁加良伊加波、乎加良以加牟、（人と我と道をたがへんといふなり此乎は峯なり紀、萬葉などに岳峯丘などを乎といふも是なり又山のなだれを尾といふ事も紀にあれど言は同くて意別なり）

末

乎加良伊加波、多仁可良伊可牟、（ゆくを伊久といふは平（ツヲ）の言なり故に物語文にはいへど雅言にいふ事なし）

本

古禮可良伊可波、加禮可良伊可牟、

末

可禮可良伊加波、古禮可良伊可牟、【此下古本にかくあ

り打かへしうたふなるべし】

本、所々利安計也、所々利安計、

末、由須利安計也、由利安計、

本、安知乃也萬世也萬　末、世也萬也萬（上二ツはことば少しことなり）

本、古乃惠乃　末、加美乃禰乃

本、由須利　末、須々利

本、太爾加良　末、乎加良

本、古禮加良　末、加禮加良

本、乎見名己乃　末、志毛門幾

本、安不利止　末、比波利止

本方、於介　安知女於々々々

末方、於介　同

本方、於介　了

○明星

本

吉々利々、（古へ重る言を書ときは古事記に許袁呂許袁呂といふ言を許々袁々呂々と書、登袁々登袁々といふ言を登々袁々々々と書が如く他にも例多し然ればこゝも吉利吉利といふを吉々利々と書しものなり【からぶりの手かく人はかしこの古へに書しものゝ重字もこゝにいふ如く書しといへり然れば古事記などの書樣古へのから文字によれるなりけり】なぞといはゞ延喜治部省式の祥瑞の中に吉利（鳥形獸頭）と見えて吉利は神異なる鳥の名にて千歳榮る瑞なればかくいへるなりけり、何れの說ども、誤れりかくてきつり〳〵といふべきをうたふ時はきり〳〵ともうたひけんきゝりゝと唱ふるは實のことはりをも重字の例をも誤りぬ）

千歳榮、（右にいへり）

白衆等、（もろ〳〵の人だちにまうすといふなり）

聽說晨朝清淨偈也、（こは法華懺法の晨朝の偈といふ物なりいかにひか意得して神の歌とはしけんよにおろかなるものゝわざなり）【古本に榮に永、衆に春、又壽、聽說に長節、晨朝清淨偈也に上々下と云字を傍に付せしは唱へを知らせたるなり】

安可保之波、明星波、（あか星は明らかなるほしをもいへどこれは曙にひかるほしをいふ事上下の言にて去らる）

久波也、古々那里也、（久波也は今の俗の人を呼にこりやといふに同じくて共に是者也といふを轉じ約たる平言のみ）

名仁志加毛、（何かなり去と毛は助辭なり）

古與比乃門支乃、多々古々仁萬須也、（曙に成て明星の西の天にきらめくに月も同じそらにすみていますをいかで月星のかく同じあたりに照ますといへりかく見ずは上の晨朝の言につゞくべからず）

太々古々仁萬須也、（萬須はおはしますなり）

末

白衆等、（上の二句を略きうたふも又例なり）

聽說晨朝、（下右に同じ）

本

白衆等、聽說晨朝清淨偈也、安可保志波、（本方是までうたふ）

末

明星波、

本、安加保志波　末、明星波

本、安加保志波　末、明星波

本、吉々利々千歳榮云々（右の始の如く全く有）

末、白衆等云云（右の如く上一句を略きて全く有）

○得錢子（ナツセンコ）、（錢は借字にて得選なり江次第に得選厨子所、女官於采女中選其人故得名といへり禁祕抄に得選三人也又髮上采女兼之行幸之時持大袋與內侍同車是不可然事第一也と有されども皆後の事なり得選てふ事古への名にあらず今京このかたといへど延喜式西宮抄などにもおぼえず然るを此歌に有からははやき事歟又かの得錢にはあらざるか疑しき事なり

本

得錢子加禰也名留也、志免由不比波乎、（得選ならば同じ采女町にても庭などひろくて寐屋をかこふかきも有べしさて是を或說に標結（シメユフヒバ）檜葉也といへり免と女は音ひとしければさ有べし檜葉をかきとせしはみえねど馬場の埒には檜枝を用といへば葉ながら常の籬にもすべし）

太禮加波太乎利志、（誰か手折しなりこは萬葉十四に古非思家婆、伎麻世和我勢古、伎都楊難、宇禮都美可良思、和禮多知麻多牟、てふ如く其籬のうれを摘折て人の越しあと有を人のとがめたるなり下の催馬樂に葦がきまがきかきわけててふこすとおひこすとおやにまうよこしけらしもといふが如し）【檜のそぎ板もてするを檜垣と云は常なり檜葉もてせむことはおぼつかなきに似たれど古へ柴かきてふ事も多ければ檜葉をせしにや○

萬葉七に「みなとのあしか末葉を誰か手折し吾せこが振る手を見むと吾ぞ手折し、てふ言は似たり○楊の繁くて越がてなれば其枝を折たるをつみからしといひしはこゝの心にひとし」

得錢子也、太太良古支比與也、（こは人も心得てといへど太は安の誤りにて安太良檜加支乎也といふなるべし與も乎の誤りと見ゆ清らにゆひし籬を折そこなひしを惜むべし）

太禮加波太乎利之得錢子、

末【古本に音を引ところはみな傍に其音を付く此歌にも多々良古支伊々々々比與也安々々々などある也此本末の注猶考べし】

和禮古曾波、見禮波也、宇禮太左兒、太乎利天古志加也、（手折たりしなり是も問人の卽得錢子が答ふべき事をくみていふなり然らでは此加也の言と下の言との意通らず是上の我といふも自らといはむが如しこしは過來し事故にいふのみさて其檜葉籬をうるさく思へばうれつみ折しのみ人の越しにはあらずととりなすなり）

得錢子也、多々良古支比與也、（上に云へり）

太乎利己之加也得錢子、

○木綿作

本

由不門久留、志名乃波良仁也、（玄なのはらを或說に信濃國の事とすれど信濃の國の原を玄なの原といはむや其上公は本よりにて他の神社の木綿も信濃國まで求めむ事いかに、もし其國の歌を是に取し物かと助くとも其國にて信濃原といはむや又凡にていは、木綿は安藝と伊豆と二國より出て他より出る事を聞ず麻は總の國より出て其中に信濃布は賤とすれば其國の麻はわろきをわざと求めむや然れば必其國をいふならぬなりさて或田舍人のいひしは玄なと云木の皮をも紙には作るとなり是を思ふに古へ木綿とせし木の皮を後世には紙とせざれば此紙にする玄なを古へ木綿とせし事も有故に木綿作る玄なの原といふならん其有所を原といふは松原檜原など云が如し【ゆふは穀木を用るぞ專らなから又他木をも用ればそれにつきてもいふべし】

安佐太門禰、安佐太門禰也、（或說麻を尋といへるもいかに麻は畑に作る物を分て神事に用るてふ事も古今になし且上に木綿作るとて麻を尋るてふも事違へり仍て思ふにこはあさり尋ね入りを略きうたふなるべし木綿は前に云二國より出るなれど神事には山のさか木日影などを求る如く山方に自ある木綿をあさり求めて手づから齋制りて用る上つ代のならひに依ていふならん又一つはあそへてふ言のあさたづねと成しが下にあそべあそべと多く云卽是にて其あそべを古き一本には皆あさたづね〳〵と有此違を思ひかへせば上のあさたづねも皆あそべ〳〵の轉か又あさたづねをあそべと轉じいへるか二つの間わきがたし依て二つの考をなしぬそが中に猶上の考に依らばや）

末

安佐太門禰、（是もあそべを延ていふなるべし）

萬志毛加美曾也、（或說に汝も神ぞといふかといへるに依べし或人是をおぼつかなみていとこと樣の事をいへれど古本には是を多く打返し見るに幾美毛加美曾と云も交てあれば他し說はかなはざめり古へは蛇狼などをすら神といひしからは神主などをば卽神ぞといふまじきかは）

阿所へ安所へ安所へ安所へ安所へ安所へ安所也、（此七つの安所べを一本には皆阿左太門禰と有、その意は右にいひつ且此あそべとは神樂の歌舞をいふ）

本

安佐太門禰、幾美毛加美曾、

末

萬志毛可見曾、

本

幾美毛可見曾、

末

萬志毛可見曾、

本

幾美毛可美所也、安所へ安所へ阿所へ阿曾へ阿曾へ阿曾へ

末

阿所へ阿曾へ、萬志毛可美所、安所へ安所へ安所へ安曾へ安曾へ安曾へ、

古本にいはく星已了搔返絲竹之天可仕朝倉支催堪能之歌人須先本方次末方次第歌之其詞云【此ごとくば星の次に朝倉をうたふにや、されども古今の諸本是を星にならべてなし、此次てはさまゝにて本毎に異なり何れがよけむ】

○朝倉、（注に此歌爲御前返歌是延喜二十一年勅定也、

神樂遊仕ル時、如榊音振唱）

本

阿佐久良也、（齊明天皇紀を見るに百濟乞申に依て新羅を征給ふ軍をつかはさる、爲に天皇筑紫に幸て朝倉橘廣庭宮に御坐此時斬除朝倉社木而作此宮と有る是なり朝倉は和名抄筑前國下座「下都安佐久良」上座「准上」と有所なり）【此朝倉を土左國の 土左郡の 朝倉郷ぞと云說は甚異なり古より阿波さぬき伊與の三國の南嶮き山を隔て土左は此三國へ通はざりしを奈良の御時申て始て阿波へ通事有しなり然ば齊明天皇土左御幸は必なき事なり其上新羅うち給ふ軍の爲に筑紫へ幸の次でに伊與の湯へ御舟を泊させられしを其路もなく筑紫を置てことなる方へ幸有べき事かは】

支乃萬呂止乃仁、（萬葉に「はたす、き男花逆葺黑木もて作れるやどは萬代までに、とよませ給ふは御なぐさめの爲に假に作れる御屋ながら卷一に金野の美草苅葺云々と行宮の事をよみしに合せて思ふに朝倉宮は行宮とはことにて年月おはしますべき料なれば同じ天皇飛鳥板蓋宮てふ如く屋も板もてふき柱梁戸牖なども全く木のまゝにて飾色とりもなく造られしを木の丸殿といふべし全剝を紀にはうつはぎと訓を平言に是をまろはぎと云も同じ理に落めり）

和禮乎禮波、（此歌を新古今集に天智天皇御製とするはえか傳へこしならんいまだ皇太子にて大御供を給ひし時なれば後を次で天皇とは書れしなり依て我居ばとのたまふべしされども或人こは直に此皇太子の御歌とは聞えず日本紀竟宴のさまに似たりといへる實に此皇太子の御歌は紀にも萬葉にも有にいと古へ體なりこは奈良の朝の歌ざまなり）

末

和禮乎禮波、奈乃利乎志門々、由久也太禮、（今本にもかく有はうたふ時略せしものぞ實は行は誰が子ぞといふ歌なり○奈乃利とは常の大内にては夜の侍宿する官人官位姓名を申て去を名謁といふ此如くするをいふべし是は假の御宿りといひ軍を催給ふ時にもあれば日の宿にも名謁有しにも有べし誰子ぞは只誰人ぞと云に同じ上にも出たり）

袖中抄のかへし物の條に、神樂譜云、朝聞吹反催馬樂拍子云云、或本云、朝くらや云云、此歌爲御前返歌、是延喜廿一年勅定也、神樂遊仕時榊歌體唱、又云、星巳畢搔反絲竹可仕朝倉支催堪能之歌人、顯昭云、朝倉うたふをばあさくらかへしと云或は吹返といひ或は搔返絲竹と云或催馬樂拍子といへり仍かへすとは云ふか、返すとは其歌を又とりかへすをこそいへ此返しは笛も琴も別にえらべ改むるなり催馬樂拍子といふにて知ぬ又古今返し物の歌と云は多くは催馬樂呂律歌なりさればかへすとは催馬樂拍子に吹なしひきなしてあさくらうたふなるべし）【或說朝倉は 皇居なりし故に御前返と名付給へるにやと云はよくなし既かへし物といふ名ははやくより有て其歌多したゞ此朝倉は延喜のかへし物と爲ませし故に此天皇の御定のかへし物ぞてふ意にてさはいひならひしなりけり】

裏書に或本云朝倉本面兩歌也、（右の朝倉今は本末に分てうたふ本は其一首を本方うたひ末方は此左歌をうたひしと云なり）

末

伊門己仁加、己萬乎門奈加牟、安佐比古加、佐寸也乎加へ能、太末佐々乃宇倍爾、【是は畫目の末方なるを又これにも用るはおぼつかなき事なり】

又說、本

安佐久良也、乎女能美那止仁、安比支世留、（袖中抄にも今と同じまた一にあびきせんはと有は意は聞えて言よからず又一本にあびきせばとあるは誤りなり下に通らず）

多萬乃女乃之仁、安比支安比仁計利、（先此歌は或男濱邊に出し時にうるはしき小女も濱遊びに出たるにあひて物らいひしをうれしむよしをあまが網手網は男も女のわらはもより合て曳くものなるにたとへたるなり○多萬はほめたる言又あまをたまと誤りしにもあるべし目刺は古今集にめざしぬらすな沖におれ波、催馬樂竹河にめさたゞへて狹衣にめざしなる髮といへる皆わらはのひたひかみの目のあたりへさかりて有をもていふされど今のあ引逢といへるはかのうなゐはなりといふ如くよろしきほどの女に逢しを暫めさしにたとへしのみ○安比支は上の言を重ねいふ古歌のすがたにて網曳逢なりたゞ逢と意得るはわろし○乎女の湊は筑前の朝倉郡に在べしさて後の本に此所を織面と書たるはいかなるよし有にや古本に乎女と書しからは織は於利の假字なればかなはず）

末

加門良支へ、和多留久女知乃、門支波志乃、古々呂毛之良須、以左加倍里奈牟、（うもれ木は中むしはむといふめれば久米路の橋は心してゆけとよめる卽同じ意にて此繼橋の木も古びておぼつかなければわたらで歸らんといふなり然るを後世の本に四の句を誤りてころもしとらずと有をそれにつきて注せしはいかにぞや此古本又六帖にもこゝろも去らずと有を見よさて此歌は男の女のもとへ忍びて行たるときによみたるならんかつぎ橋はと云もいと異ならず打橋は一木或は一板をわたすをその木のとゞかぬ所にては木を中にてやり違へて繼たるをいふのみよろしき橋も板はつげども端を合せて一すぢにみゆればいはず）【かつら木の久米の岩橋とて役小角が山神にいひてかけさせしを夜明てえ渡しはてずなど云は例の法師どものそら言なりくめ路の橋は木を渡せし事是らにても知べし然るをかのそら言をもて中務の明くるわびしきとよみしよりさることゝのみ人々心えるはをさなし】

○書目歌、【こは此歌に天てるやひるめの神といへるをもてかく名づけいへるのみよろしくいはむには大ひるめのみことを申奉る歌など有べきを言を略きて名にいふ平言故にかくなめげにては有なり○古今集にひるめのうたとて「さゝのくまひのくま川にこまとめて去ばし水かへかけをだにみんと云歌あるは古へ此ひるめのうたとて彼ひのくま川の歌をもうたひけん故に去か名付けてあげし物なり古今集にひるめの歌と有も此比留女の神てふ歌によりて申せる名なるを古今には此歌はとらでひのくま川の歌のみあればそれのみ見でうたがひてひるめとは大嘗會の時米ひる女のうたふ歌ぞと範長卿のいはれしと云はひが事なり、又かの歌は萬葉に「さひのくまひのくま河に駒とめて駒に水かへわれよそにみむと云歌をとなへ誤りしを其まゝ載せしはいかにぞや末はかげをだにといひかへもすべし初句はひがことなれば必佐檜隈と改むべかりしなり】

本

伊加波加利、與支和佐志天加、阿萬天留也、比留女乃加見乎、（萬葉二に人麻呂天照日女命天乎波所知食登神代紀に大日靈貴とありて天照大御神の御ことなり）志波志止々女牟、志波志止々女牟、（袖中抄に神樂には天照おほむ神をおろし奉れば神擧とて擧奉る歌も有さればいかなるわざしてかゝばし留めたてまつるべきとたふなりといへるはよし）

末

伊門古仁可、古萬遠門那加牟、安佐比古可、左須也乎可へ乃、多萬左々能宇惠耳、多萬左々乃宇へ耳、【古本五句の宇への假字を宇惠と書しは傳寫の誤ならん重ねたるにうへと有こそよろしけれ】（こは安佐比古云云の言を以て右の末の歌に用ゐしにて實は道行時の歌のみさて朝日子とは只朝日を申にて且山岡には朝日夕日の先照るものなれば萬葉に朝日照る佐太の岡邊古今集に夕付日刺也岡べなど其外にも此類にいへる多しかゝれば此歌もとは朝日影と有けんを朝彦とうたひ誤れるものなり、なぞといはゞ朝日子と言ふ古言もなく且日子は男神に申す例にて今日女（ヒルメ）の命に譬へ奉らんにもよろしからねばなりまた此歌を後の本袖中抄にもあさるさわべと有も誤り拾遺集に一二句を我駒はやくゆかなんまた四の句をやへさすをかと有もいと誤りて皆理りなし）

源氏河海抄に本、奈仁和佐乎和禮波志都々加安萬天留也比留女乃可美乎志波之止々女牟、末、以加爾之天何和佐志天加安萬天留也（上同）（神樂譜に在りといへれど【此なにわざ乎と云は求子の歌ともせり】事の樣言をかへてうたへるにもあらずたゞ上の歌をとなへ誤れるのみなれば擧るはよしなし只古本に無を正しとすべし又今の一本に或說とてなにわざをわれは去つるかてふ二句のみ有は右の神樂府の歌などを又誤或は亂れて此二句のみ殘りし物なり○今の本どもには歌の末の言を打かへしいへる言とも落たりその落たることばの轉じて右の神樂譜の或說とは成しにもあるべし）

○竈殿遊歌、（とのゝ言を略くは言多ければなり、へつひは今も同じ事なり此詞にへつひところといふを上下を略きいふにや此古本に戸門比と云も戸門以とかゝねばなり【此言ふといはゞ壁築など思ふべけれど古本にいとかゝず比と有からは去からず惣て古言は假字によりて意を去るべきなり】さて竈神は神名式に三座と有大膳殿には四座大炊には八座其外にも有て是は何の時何の司にての祭を專らとすとも知がたし歌の言ともに依に公の祭にはあるなり【體源抄に進曾利古謂之竈祭舞】○日吉社記に大竈社は奥津彦神竈殿社は奥津姫神にて大汝持孫大歳神の子といへり或說詞に座摩阿須波神古事記に大年神子にて庭津日神次阿須波神次波比岐

神と有萬葉二十上總歌に庭なかのあすはの神に小柴さし云云文德實錄に大炊寮は大八島竈神齋次武生比賣命庭火皇神この竈神卽阿須波神と同じく見ゆ）

本

止與戸門比、（とよはほめいふ言、へつひは上にいへり）

美安所比須良之毛、（此毛の辭あらば上の美の辭有るべからず仍て二つの中にては下の毛を除くべし後の本ともにも此毛はなし）

比左可太乃、（冠辭考に委し）

安萬乃可波良爾、（天の安川原に萬づの神をつどへ給ふといふよりかく神事の御遊びにおもひなぞらへて天の川原にとはいふなるべし）

比左乃己惠須留、（一本與之）

比左乃己惠須留、（比さの聲てふことは有べくもなし思ふに己止の字の草をひさに誤りしものなりけり又今の本ともには己止のこゑする、ひはのこゑする、とあれど古へより後までも神遊に琵琶を用る事なしとさてふ物もなし此二つはた必ひがことなり然れば此ひはもとさもともに己止を誤れるにて本は己止のこゑするを三つかさねうたひしなるべし此古本に二つかさねたり三ッも四ッもかさぬる例數へがたければなり）

末

比左可太乃、安萬能可波良仁、止與へ門比、阿曾比春良之毛、比左乃己惠須留、（一本與之）

比左乃己惠須留、（ひさはことならん事右の如し）

○酒殿歌、（造酒司式にいはく祭神九座二座「酒彌豆男神酒彌豆女神」並從五位上祭神四座「竈神」祭神三座「從五位上大邑刀目從五位下小邑刀目次邑刀目」この神たちを祭らるゝ時にうたふなるべし）【大嘗祭式に造酒兒一人「當郡大少領女未嫁」御酒波一人篩粉一人共作二人多明波波一人「以上並女」と有是をこゝの言合て見るに酒殿には專ら女を用ゐらるめり】

本

佐加止乃波、比呂志末比呂之、（眞廣にて眞はほむる辭にして且言の調へをもなせる古言の常なりこゝは家なればとて間と心得るは俗の意なり）

美加己之爾、（美加は甕にてこゝは酒釀るかめなりさて其甕の邊に在男のひそかに其甕越に女の手を取をいふ【或人祝詞に 甕腹滿並てと云を引てみかこしはみかの腰を云といへるはせばしごしといへど必しも上にもあらず又かならずしも腹をもいふべからず物を隔て及てするをばいづこもそれをこしと云めり】

和加氐奈止利曾、（我手をなとりそなり）

之加門介、（一本世）那久（一本之）爾（或古本之加波世奴和左、）（しがつげなくには玄か手をとるべくも契らなくにおもひよらずといふなり、又或本にてはかく齋ひ造れる神御酒のほとりにて有まじき事と云めり、こは餘にたゝことか、古へ酒かむに專ら女なれどそか中に男も在べき事なり）

末

佐加止乃波、介佐波奈波岐曾、（今朝は掃事なかれといへり）

止於敍字禰利女乃、（舍人女なり止乃下の字は聲を引所に皆付て書しをたゝ歌のみにはかゝねどたま〳〵殘れるも有事も上にもみえたり然るを今の本には上の止は落て宇ねりめと有よりくさ〴〵の考せる人あれどすべてあたらざるを、さてとねりとはとのゐする人を云仕る女をもひめとねと云是なりこゝは公の酒殿に侍る女なれはいへり）【とねりは古へ近習舍人も紀にいひ、とねとのみもいへりとねめす節會には侍從其外を召をもいひそれより轉じて仕る事有ものをば里長防長をすら里のとねといへり且龍田祭の祝詞に里乃刀禰男女ともあれば酒殿の女をも玄か云へき事疑なし】

毛比支須曾比支、（其掃時のさまを云）

計散波々支豆岐、（はさてきははきたりけりなり其豆は多里の約にて知と云を豆に轉せり幾は氣里を約めいふなり）

今本の或說（此或說の歌ども古本にはなし）

天乃原、振放見禮波、（振は打ふるといふ類にて心を用ゐずする事の上にいふ辭放見るは遠くさかり見るなり）

八重雲乃、久毛乃中奈留、雲乃奈加止美乃、（上は序のみ雲はかさねて三ついふさて雲の中とみのといふべきを今本中とのみ有はみの落たるなりされどうたふ時畧けるか）

中臣乃、天乃小菅乎割祓、（大祓詞に天津菅曾乎本打切末打斷云云これらを合て思ふに菅を割てそれを拂ものとして穢などを拂ふかたにせし物なり然るを祓柱の具に菅の無はこは中臣の人自ら爲物なればなるべし是に種々後人の說あれどみなよしなし【或說菅實の菅なり

といへど菅貫てふもの古へみえず中比に卜部などの持出せし事か】

祈里志古止波、今日乃日乃多女、（萬葉十七に造酒歌として奈加等美乃敷刀能里等其等伊比波良倍安賀布伊能知毛多我多米爾奈禮てふに似たるところもあり）

安那古那也、（一本也那安々那古良也にて今日の日もよろづの事などやかにと、のひたるをいふか猶考べし）

和加皇神乃、神魯伎乃、與左古、（左一本神ろぎ神すめろみにて皇祖の神を申せり與左古は萬葉五に余知古良等手多豆佐波利堤と云は好子等なり今も其天御神の末にて好子といふか又余左々の誤にて吉さよさといふにやあらん上の篠波にても乎美奈乃與佐々也といへり

又右の次に歌有、歌の意末方の歌とも聞えずされど右歌には侍り、其歌、

爾波止利八、加氣呂止奈幾奴奈里、（雞の鳴は加介引と聞ゆるなり仍てかれを加氣といへり凡の鳥の名は鳴音によるものおほし）

於支與和賀比登與門萬、（今諸本加止與と有は誤りなり）（キヨ一本）

人毛古曾志禮、（庭鳥鳴て夜の明るなり起て人のみぬ間にかへりねといふなり始めて一夜逢るを一夜妻といふさてこは萬葉十六に吾門爾千鳥數鳴起余々々我一夜妻人爾所知名てふにひとし○今本は此酒殿歌を神樂の語とするなり）【久太加氣と云は久太は百濟より來たるを云後世玄やむちやぼなど云皆出る所の名を負せし類なり加氣は聲もて名付し事此歌にて知べし○此千鳥は諸鳥にて夜明れは鳴ものなり】

○弓立、（ユミテ）（但神寶舉時此歌唱琴懸樣替かく注したればはやくより弓の歌にもか、上の採物に有る弓も卽神寶なるを同じ神樂に弓の神寶有は上なるは公の冬の御神樂ここは神社にて唱ふる神寶の弓の歌か、されど神寶は多きに弓の歌のみ有はいかに又神弓を取て舉給時うたへは例に平言にゆたてといふなるべし、又左の歌は弓のよしなし其次なるは靭をいへばはなれぬ事なり其物にたとえてよみし歌はまれなるが中に左の歌はゑかしながら餘にことそぎたりとおぼゆるをこのこゝろ或人のいへるは拾芥抄に是を湯立と書たるを正しとせむ儀式にも式にも神事に供湯と有、然れば末歌の由支止留も湯木の事なりとか、れは火もてわかせれば燒火の氣てふにかなへり、且神社に釜を多く並居え湯の玉の立はかり燒たるを神に奉り其湯釜の所に巫か立て篠もて湯を振散しなとするを田舍にては湯立の神事といへり、然れは立といふ言も有事なりいつれならん猶考べし

伊世之末乃也、安末乃止女良可、（海人之處女等かといふを乃乎の約のなれは乃止女とうたふべし又の古本にも今にも安末乃止禰良可と有既にいふ如くいさゝかも官職あるをこそ止禰とはいへ海邊にて火たくは鹽といさりなりこれらをするを止禰良といふべくもおぼえず依て古本を用う）【上つ代には海部てふ氏ありて其海邊を司とるをいふと見えたれど皆さる古への事ならねば此よしにあらず拾遺集に龍田山にひはきに逢て山のとねたちといへるは恐れてあかめいへるのみ】

太久保乃計、（燒火の氣なり）

於介於介、（上に出）

末

多久保乃計、以曾良加佐支仁、（磯の崎をかくいへる上にも有り）

加保利安不、（安比爾氣利てふをかく略たる上にも有り）

於介於介、（加乎利とは火の光日の氣などに薫といふも萬葉に朝日影爾保敝流てふに同しく餘光のかけろふをいふ、又萬葉にけふりといふべき所を火氣ともかき今昔物語に烟の薫りあひたる中をと有も煙のくゆる事なればこゝも烟事ともすべし【烟の類にては神代紀に唯有朝霧而薫滿之哉萬葉に伊勢能國波云云鹽氣能味香乎禮流國爾又鹽氣立荒磯なとよめり總て日氣の火と見ゆるをも煙霧などのくもり合ふをも花の香となく匂ふをもかをるといへりそれを物々に玄たかひて知分つは皇朝のならひなり玄かるを神代紀の薫の事を霧にも香有なりといへるこそひがことなれいつこの雲霧に香の有にや强たる說の限りなり只くもり成故にそれ吹はろふべき風の神をば生ませしをやひが說あればいふ】○此言は萬葉に皆乎のかなるをこゝに保と書るはいかにもし保を濁り唱へしか濁る時は乎に通ふ例なり此本すべて假字正しきにこゝのみ誤るべきにあらねば疑を殘せり）

本（古本今本ともにこゝに或說などもなくてかく本末を擧たるは例なく理りなしもしこゝに別の標字有しを落せるか思ふに上なるは湯立是は弓立の歌にて別には

あらずや）

於保支美乃、由支止留也末乃、和可佐久良、（或人由支は弓木なりといへど弓には梓槻檀などはすれど櫻を用ゐし事を見ずその意ならば由支は靭をいふならん櫻は堅くして破そこなはねは靭には用うべきが如し是には卜燒に朱櫻を用うる如く櫻を燒にしも有か何れもいま定だかならず）

於介於介、【清正歌集に「いつしかと植てみたれば若櫻さかずて春の過ぬべき哉】

末

和加佐久、良止利爾和禮由久、不禰加知左乎比止加世、（加知と棹さす人を借せなり）

於介於介

○葦駮（或本此有其駒而無葦駮之歌）

本

安之不知乃也、（和名抄に駱馬爾雅注云四骸皆白曰駱「阿之布知」骸謂膝以下也こゝに葦駮と有は借字なるべし下の句に虎毛とあればなり）

毛里乃、毛里乃之多奈留、和加古萬爲天古、（初のあしふちのやは隔て和加駒の言へつつく、もりは木繁く草も深き所なり然れは夏駒を飼ところとす六帖に小野小町「大荒城のもりの下草老ぬれは駒もすさめずかる人もなしともよみたり其もりに放飼わがこまをひきゐて來れといへり）【今本にはわかくさゐてこと有又一本にわかこさと有も共にわろし草ならはかりことは云べからず○今本どもには此歌寵殿歌の上に有今は古本によりぬ其裏書にこは風俗より取し物といへり然れは後に入し故に末に有べきなり】

安之不知乃、止良氣乃古滿、（身は虎毛にて足のみ白きをあしふちといふなりけり○神代紀にてもふちこまのふを濁り唱ふれど皇朝の言は始を濁ることなしがにがいろといふは只田舍の中にも賤のみいへばとるにたらず此ふちのふを濁るを疑ひしに陸奥の南部津輕出羽人の中にも海方の人は皆すみていへるを聞きてあきらめつ

末

曾乃古萬曾也、（其足駮の駒ぞなり）

和禮仁久佐古不、（駒か我に草を乞なり）

久佐波止利加波牟、美門波止利、（加波牟を畧）

久佐波止利加波武也、

注云此歌時人長立座天必可那天寸止云事奈之

○東遊歌（中に駿河歌の有に依て東遊の名はゑめすなりこゝの二歌と大ひれはゑらずもとめ子は宮風なるを同し處に遊ぶ故に東遊の標中の如く成つらん）

一歌

乎引乎引乎引乎引（此乎振拍子後可出者禮奈）乎、（已上四度乎振歌者皆同音、此乎々々々は發音なり其事既いひつ）者禮奈、（歌節の辭風俗に例有）

天乎止々乃部呂奈、（琴笛の手を調へよなと云なり）

宇太止々乃部呂奈、（歌を調よなり）

左加无乃禰、（盛に宜き音を調へよなり）

乎々々、（此乎振拍子後可出二歌衣音）乎、（後衣幷四度乎振皆同音）

二歌

衣引（發音なり）

和可世古加、（我兄子之なり是に二つ有一つは妻より夫をいふなり今一つは男ども相親みあかめていふなりこは男ども云ならん）

介左乃古止天者、（今朝の琴手なり○注に已上獨歌此後同音可禰安者禮但歌者不止可唱後詞

奈々門乎乃、也門乎乃古止乎、（七弦八弦の琴をなり七弦は後に在、八弦の琴は古事記の顯宗天皇始播磨におはしまして室賀し給ふ次に如調八弦琴所知賜天下云云ともあれば古への日本琴は八弦も有し成べし）

之良部太留古止也、奈乎可介也安、（小字引聲）末乃可門乃、（安は也の音餘りにて奈乎可計山のかつなり）

於介也、（小字引聲）（自可門乃至也調始歌人獨上音自餘同音皆低音）

○こゝの二句はこゝろ得ず）

乎乎乎、（已上乎振同音）

已上二曲唱各一度

○駿河歌、（同音唱拍子舞）（こはもと駿河風俗をとりしものなり）

也（發言）宇止者末介（駿河國有度郡の濱なり度の字古へ濁音に用ういまも濁るべし）

須留加奈留、宇止者末爾、宇知余須留奈美者、（打寄る波はなり）

奈々久左乃以毛、古止曾余之、古止古曾與之、（一段なり上の打寄る波はといふより續けば言こそよしは人言のみいひよせらるゝをいふべし萬葉に里人の言よせ妻とていまた我は定めぬを人言のゑかなるなり是よせと

いはでよしといふも同しきは妻よしこせぬなどいへる多ければなり○奈々久左は心得がたし妹か名か所など成べし）

奈々久左乃以毛者、古止古曾與之、（此次の言にてはことばのみこそよくして實にはあはずてふ意と聞ゆれどさては古のうちよする波者てふ言のより所なし依てこゝをも人こととのみこそよけれ今幸にあひしからは此時たにいさやねなむといふなるへし古への言にはかゝるも多し後世意にて急にのみ思ふことなかれ）

安倍留止支、以左左禰奈无也、（佐は發言のみ）

奈々久佐乃以毛、古止古曾與之、（二段なり）

安奈也須良介、（次の言に依にいとま有て安らけくあそぶさまなり安奈はあと歎く辭）

安那也須良也須良、安奈也須良介、禰利乃乎、（或說乎爲ヲ毛、と有は裳か衣なるべし）

古呂毛乃、（三段なり或說乃爲ノ毛と有聞えず○禰利乃乎は練糸の組をつけたる衣紐をいふか緒に練生なといふはなきを思ふに乎は毛の誤にてねりきぬの裳衣なるへし裳衣はすべて著衣をいふ古への言ならん）

曾天乎太禮天、安奈也須良介、（萬葉「袖たれていざわが園に鶯の木づたひちらす梅の花みむ、とよめるも暇有てゆくらかなるさまをうつし出せることなり今も是か如くやすらかなるなり）

千止里由惠爾、（故の假字古へ皆ゑかなり後世ゆへと書は誤りなり）

者末爾天々、（以泥天を泥天とのみいふ言萬葉に多し）

安曾布知止里由惠爾、安也毛奈支、（よしなくかひなきをあやなきと云）

古末門加宇禮爾、（小松か上らをうれともうらとも云）

安美奈者利曾、安美奈者利曾、（四段なりちとりのあそびなくをおもしろみて我は濱に出てあそぶをその鳥とらんとてあみ張ことなかれといふめり春日野はけふはな燒そなどいふたぐひなりけり）

以者太之太仁、（同國志太郡の今いふ瀨戸川の西の岸の村を志太村といふこゝなるべしされどいはたも所の大名などなるへし土人に問べし○本には之太江とあれど江にては言もつゝかす侍れば仁に改めつされど今はゑたえとうたふにや）

加左和須禮太利也、以者太之太仁、（江衣一本笠をわすれおきて來りしといふなり）

止乃者良毛、（殿腹は貴き臣達の女の腹に生れし公等をいふ皇女の御腹なるを宮腹といふか如し田舍にてかくいふは守又郡司の子をも崇みていふべし）

之留久毛可奈也、（こは女の歌なりわか思ふとのばらのいちしるくもあれなゑからば則奉りおきなむといふなり）

可左末門里可无、（於を畧く常の事なり）

可左末門里於加无也、（五段なり奉りを末門里といふこと萬葉に例有）

之良左良无、（六段なり是は上の答歌なり○志良受阿良无の受阿の約射なればつゞめていへり）

安世加、曾乃止乃者良、之良左良、（何そか其殿はらはゑらすあらん）

以者太奈留也、太部乃止乃者、（或は者爲ヲ乃と有は聞えず和名抄同國益頭郡に八田「也太」てふ鄕有是を本は八田部といひつらん志太と隣る鄕なれはかくも有べし和名抄に國府は安部郡に在といひ萬葉にも安部の市路なといふもあり然れば也太部の殿は郡家をいふなり）

千加支止奈利乎、千加支止奈里乎、（六段なりかの女の里より近き殿の殿ばらなれは知やすしといへり）

已上六段終更始待舞竟而止

○毛止女子歌、（毛止てふ女の名か是を標しいふよしはゑらず）

安者禮知波也不留、（波は和の如く不は濁る事紀と萬葉の假字に見ゆ是はいちはやぶるてふ言にて紀にはこれを殘賊荒暴横惡之神と字をあてゝたゝはしく荒ぶる神をいふことなるを今京よりは只神の冠辭とのみせりくはしくは冠辭考にいへり）

可毛乃也志呂乃比女已末門、（山城の賀茂の社に寛平の御時臨時祭はしめ給へるとて藤原とし行朝臣によませ給へる歌にて古今集の卷の終に載せたる歌なり○ひめこ松は住江の岸のひめ松ともいへり古き家の集なとに野べの姫松ともよみたれば女松にて木の赤きが其社に有し成へし）

安者禮比女古末門、與呂門與不止毛、以呂者加者安利、安者禮以呂者加者良之、（安波禮てふ言はあゝと歎くことばなればめづるにもよろこび悲しむにもいへりこゝはめづる餘りにいふなり○こはよろしく調ひたる歌なり）

右一曲二段終又始舞竟而後止

○於保比禮

於保比禮也、乎比禮乃也末波、（大比禮小比禮てふ山の名はきかず大比枝小比枝をうたひ誤れらんと或人いへり）

與利天己曾、與利天己曾、也末者余良奈禮也、止保女者安禮止イ波禮、（こは彼二山の近く寄てこそといへどよらぬがごとく吾遠妻も相よるよしなくあれと云なるべし萬葉十三に「長歌」靡得人雖踏如此依等人雖衝無意山之與礒山三野之山てふを思ひてよめるにや又同卷二に角の浦わに浦なしと人こそ見らめとて玉も沖つ藻かよりかくより依寢し妹とよみしも似たる意もあり

右はかの寛平の御時の歌をも用ゐしかばいさゝか後なりされど凡の假字古へにかなへり然ればいと後ならず延喜の末承平などの比までに出來し遊びには有なむ又此東遊を一の古本には催馬樂の次風俗の上に載せ一の古本には神樂歌よりもいと初に載せたり思ふにいと初めに載せしは後世の人時に用ゐらるゝにつけて先出せしなるべし末に載すべき物なり是には事の次てにこゝにゑるすのみ猶よく考て定めなむ

明和三年八月より始めて十月に書はてたりことし

七十のよはひなれば物わすれやすくして且事にうみがちなればはかゞしからずなむ

加茂眞淵

神遊考終

風俗歌考目次

乎津久波　二〇四八
小由流木　二〇四八
玉垂　二〇四八
鴛鴦　二〇四九
之太乃浦　二〇四九
君乎置天　二〇四九
越方　二〇五〇
小車　二〇五〇
陸奥　二〇五一
甲斐　二〇五一
常陸　二〇五一
筑波山　二〇五一
月面　二〇五二
大鳥　二〇五二
奈未不利　二〇五二
荒田　二〇五三
安豆未知　二〇五三
菅牟良　二〇五三
知々波々　二〇五三
我門　二〇五三
伊勢人　二〇五四
加比加禰　二〇五四
奈利高之　二〇五四
八乎止女　二〇五五
彼乃行　二〇五五

右數　二十餘五首

風俗歌考目次終

風俗歌考

○をつくば

をつくばをこゆるすり（すぐりの誤也）、ゝゝゝぎぬ、かへりきてや、たかこひすくや、ゝゝゝをつくばを、こゆるす（ぐり）、ゝゝゝぎぬ

常陸國筑山也、をつくばのをは發言、こゆるすりぎぬ、こはあやまれり、こゆは從此所（コユル）也、るは衍字、すの下にく字おぎなふべし、玄かれはこゆすぐりぎぬといひておだやか也、此所より過來ぬるとなり、尾句も右に玄かり、こゆすりぎぬとてはことわりもなく、たかこひすくやといはん料の序歌の本意もなき也、

意は戀のやりすごしにくきといふのみ、下序歌をかへしていへり、

昌保君曰たか戀すくやのくはるを通はして誰戀爲哉也

○こゆるぎ（こよろぎといふは古訓なり、こゆるぎといふは後の傳語なり、こよろぎは、さがみの國なり、）

こよ呂ぎ引の、い、ゝゝそたちならし、いそなら引し、ゝゝゝなつ引む、ゝゝゝゝめざ引しぬらすな、ぬらすな、ゝゝゝおきにを引れ、をれゝゝなみや、ぬろ〳〵引も、きゝゝゝみ引がめすべき、ゝゝゝめすべ（食べき也）きなをし（助辭也）、つ引みつみゝゝゝてはや、

こよろぎは。古今集東歌のさがみ歌に、「こよろぎの、いそたちならし、いそなつむ、めざしぬらすな、おきにをれ波、これなりいそたちならしは、磯なつむとてふみならすをいふ、なつむめざしは、磯菜つむ童女をいふ、わらはべの髪を肩だけに切てある也、其きれる髪にて、目をさすやうなれば、少し大人めきたる女童をいふべし、神樂歌に、玉のめざしそ逢きあひにけりとも有、おきにをれなみ、こは沖にて波は折れよ、玄かなくしては岸へ波打よせて、めざしをぬらす故、めざしをぬらすな、沖にて折よと波にいひつくるなり、波の立をることにはあらず、古今集も玄かり、ぬろ〳〵も、こはめざしの前の歌に答たるさまなり、意は、波にぬれても君の御食（ヰク）の料の菜をつまんとなり、

○玉だれ

たまだれの、かめを（ながめ一本）引なかにする（も一本）て、あるじはもや（もやはとば也）、さかなまぎ【まぎは求なり】に、ゝゝゝさかなとりに、ゝゝさかなとりに、こゆるぎのいその引引わかめかりにもかねもおなし言にて、先づ此歌にていへば、かすがのを燒ことなせそ、去年の古草に、あたらしき草の交り生ふるにてあるかにとなり、かにのかは、疑のか、にはねと通はしてねがふ意なり、此かにかねは、萬葉の歌に多く有、何れも玄かり、尾句のねは、一本にねと有しを、かたはらへ付しを下に書しものなり、】

○玄だの浦

玄だのうらを、あさこぐふね引さしよせろ、われさへのりてな、しだ（一本をなや）玄だのうらをみんゝゝゝや、玄だの浦は、萬葉十四に、「玄だのうらを、あさこぐ船は、よしなしに、こぐらめかもよ、なしこざるらめ、此玄だのうらもするがの國とすべし、さしよせろは、船を我方へさしよせよなり、さしよせろは助辭、今俗さういたせ、かういたせといふを、さうしろ、かうしろといふがごとし、われさへのさへは添る意なり、

○君をおきて

きみをおきて（一本先引）、あたし古こゝゝ呂をやよ、わがもたばや（わかもたば一本）、なよや（するのまつ一本）ゝゝやまゝゝゝなみもこえ、こえなてや（む也）、ゝゝなみもこえなん、（以下五字一本になし）

古今集みちのく歌に、「君をおきてあだし心を、我もたば、末の松山、なみもこえなん、是なり、（一本きみをきてと有はおをはぶきしなり）此方みやびて聞ゆ、あだし心は外心をいふ、意は、君をおきて他心（アダシゴヽロ）を我もたば、山上にある松に、波のこゆるならんとなり、こは無事のたとへにいへり、奥州に磯の松、中の松、末の松とて有、磯の松は海邊にあり、末の松は山中に有、波などのこすいはれなし、故に他心のなきたとへとす、

○をちかた

をちかたや、引かのかたや、あだちのはらに、ゝゝゝたたるかしらに、【昌保曰たゝるか玄らに此玄は衍字か又（別也）かに引る音をかたはらに付たるをしに作りつとみゆ】（別也）たゝるからに、うわるか、ゝゝらに、おのをに、ゝよすゝ、ゝさぬとしなくに、（別也）よせばよせ、引よせばよせ、よそふるひとの、ゝゝゝにくからなくに、

をちかたは遠方なり、かのかたは彼方なり、遠近といふが如し、あだちのはらは、みちのくに有べし、たゝるからにうわるからに、こはそのあだちの原に木のさかえある意なり、されども……に木言れなし、おのをには木のたちうわるおのれが岑とつゝけたる序なり、さておの乎は己が男（テ）なり、其男は我と譯あらんやうに人はいひよれど、我はその男と寐たることはなきとなり、よせばよせといふは、人はいかやうにもよせばよせよ、そのよそへらるゝおのをは、にくゝあらぬとなり、なくの約ぬなればなり、

○をくるま

をくるま、にしきのひもとかん、よひりをしのばせや、よやな、われしのゝゝはせこ、われしのゝゝはせ、そよまさに、ゝゝゝね引てぞゝゝしも、つきのおもを、さわたるくものゝゝまさやけくゝゝゝみゆ、こさやけくゝゝみゆ

をくるまのをは發言、にしきのには、すべて赤きをいふ、にぬりなどのごとし、玄きは、重る意にて、赤のうるはしく甚きをにしきといふ、よひりは、夜といふが如し、りはそへたる言なり、夜らなどのら同じ、よやなはうたのことば、今俗よんやなどうたひはやす意にいふは、此古語歟、そよまさには、夫よ正（マサ）しくなり、つきのおもゝゝゝ、月面の題ふたゝび出、

○みちのく

あはれ引や、ゝゝゝあむくまに、ゝゝゝきりたゝゝちゝゝ、わたり、あけぬとも、ゝゝゝせなをばやらじ、ゝゝゝてばすべゝゝなしや、

古今集歌みちのく歌に、「あふくまに、霧たちわたり、明ぬとも、きみをばやらじまてばすべなし、これなり、あはれやは、あゝとなげく辭なり、あむくまは、みちのくの地名なり、古へはあむといひけん、みちのくにあぶくま川といふ在これ成べし、霧たちわたりは、暮にてあれかしの意も有、意は、夜は明るとも霧などの立こめて、夜の如くゝらく成てあれかし、さなくては夫（セ）のかへりますや、又來ますん程を待が心くるしければ、いつまでもくらくてあれかしとねがふなり、せなをばやらじは、いせ物語に「くたかけのまだきに鳴てをなをやりつるといふが如し、

○甲斐　（朱書こゝに火の字を書たるは此所を火音、にうたふからに書る歟）

かひがねを、火さやにも見しがや、けゝらなく、けゝらなく、よこほりたてる、さやのなかやま、

古今集本歌の甲斐歌に、（おせる古今集くやる八雲御抄）「かひがねを、さやにもみしか、けゝらなく、よこほりふせる、さやの中山、かひがねは、甲斐の峯なり、さやにもみしかは、さやかにも見てしがもとねがふ意なり、けゝらなくは心無なり、よこほりたてるは、さやの中山の横たはり立るなり、こは甲斐の國の故郷の山を望みて、よめる成べし、

○常陸

つくばねの、このもか引のもに、引引かげはあれどや、引きみがみかけに、引ますかげもますかげもなしや、引引

古今集東歌のひたち歌に、「つくばねの、このもかのもにかげはあれど、君がみかげにますかげはなし、このもかのもは、此面彼面也、こゝかしこに木などの繁りてよき木かげあれども、君が御蔭に增ることなしとなり、こは君の德をいふなり、

○おなじく（一本は）

ひたちにも（一本は）たをこそつくれ、あだこゝろや、かぬとやきみが、やまをこえ、のをこえ、あまよゆきませる、

ひたちには田こそつくれば、あだといはん料の序なり、意は、他し心に兼ぬるか、君か山野をこえて、雨夜にさへゆきませるとなり、

○つくば山

つくばやま、はやましげ山、ゑげきをぞや、たかこもかよふな、ゑたにかよへ、わかつまはしたに、

はやまは筑波にむかひてひくき山をいふ、ゑげ山は木の茂立る山也、意は山のゑげみを誰も〳〵通へど、我夫は玄のびて通へとなり、【此たがこもかよふなは高く成べし、そのたかくはあらはれてといはんがごとし、よりてあらはれて通はゞ人も玄るべかれば、玄のび玄のびに通へといふなるべし、誰も〳〵通へどてふ意とは聞えず、又思ふに、たかは萬葉に遠きをたか來ぬなどいへば、遠き意もある歟、】

○月のおも

月のおもを、さわたるくもの、まさやけくみゆ、なはのつぶらえ、あきなれば、きりたちわたる、なはのつぶらえ

つきのおもゝは、上の小車の所にみゆ、なはのつふらえは、なまふりのところにみゆ、只秋霧のみたちて有とのみ、なはのつふらえ、なは、地名つぶらえは堀江などの如き名なるべし、【圓なるをつぶらといへば、つぶら江はまろきかたちの川と見ゆ、つぶさともつぶらかなどいふも圓なるかたちより出し意なり、】

○大鳥

おほとりのはねに、やれな、玄もせり、やれな、たれかさいふ、ちとりぞさいふ、かやくきぞさいふ、みとさぎぞ、みやこよりきてさいふ、

大鳥は和名抄に鶴（於保登里）と有、やれなは、歌のことば、下おなじ、かやくきは、和名抄、鷃（加衣久伎）、雀の如き小鳥とあり、かやくきのきは、グリの約キなれば、かやくゞり成を、約てくきといふ、萬葉に、もつの草ぐきといふと同じ、みどさきも同抄に、漢語抄云ツルサギ、ミトサギ、こはさいばら歌に、ちからなきかへる、ほねなきみゝずといへるたぐひにて、とりしめたる意味の深長成ことはなけれど、かへりてその體あやに聞あやしきなり、

○なまぶり

なはのお、つぅぶぅ、、良ぁ、、衣、、、乃引、はるなぁ、、れ、、、ばぁ、、、、かすぅ、、みぃ、、てぇ、、みぃ、、ゆぅる、なはのお、、つぅ、、ぶぅ、、らえ

なまぶり、こはなばぶりと唱へし、まは、半濁なれば、すべて通ふ例多し、ぶりは、國ぶり、ひなぶりなどのぶりとおなじ、奈波は遠江國に有といへど、不詳、萬葉三に「奈はのうらに鹽やくけむり夕されば、ゆき過かねて、山にたなびく、ゑかれば、此なはのつぶらえは、繩の浦の邊歟、

○荒田

あらたにおふるぅ、、とみくさぁ、、、のはぁ、、な、ぁ、、、てぇ、にぃ、つぅ、、、みれ、、、て、、、みやへぇ、引まゐらぁ引む、なかつぅ、、たえ、引

荒田は、初て田にひらくを云、又耕さざる以前をいふ歟、とみ草は、神樂歌にもみゆ、山にある一種の草なるべし、稻のこととするは一わたりのことなり、てにつみれてみやへまゐらんは、其花を手に摘入て宮中へ參らんとなり、なかつたえのえの字心えがたし

○東路

あづまぢに、かるぅ、、、かやぁ、、のお、、、よ、、こぉ、ほ、、、ちに、なさけぇ、、をぉ、、、かいかるぅ、かやぁ、の、お引、みねぇ、、はや、ぁ、、、ことも

やすらに、引かぁ、るぅ、、かぁ、やの、ゑさや、ぁ、、、かいかるぅ、かやぁ、の、

かるかやとて、一種の草竹有といふは非也、艸を苅といふほどの事也、

○菅むら

すがむらぁ、、のやはれこすぅ（辭也 發言也）、、がむ、、らのや、ぁ、むらぁ、のや、ぁ、すがむらぁ、のや、おひては、われこそ、かいからめ、

すがむら、こは山菅の群立多く生たる也、意は、幼女などを思ひかけて、その女の子人とおひなば、わがものにせんと也、萬葉に、みしま菅いまだなへ也、などいひて、菅を妹にたとふること例有、かいからめは、かいは撥にて辭なり、からめは苅也、

○ち、は、

ち、は、が、かどにうそぶい、まろこそたぁ、、てれ、てうどをひさげて、などかはや、たてり玄もせざらん、おのれかや、いどこめのかどに、てうどをひさげて、

意は、父母が門に、丸こそは調度を引さげて、其門に立り、などかいもの門にたゝぬことかは、我妻の門なればとなり、調度は、弓矢などをいふべし、丸はみづからくだりていふ言也、いどこめは、寢床女の義、萬葉に、いとこやの妻のみこと、よみつ、則妻の事をいふ、

○我門

わがかどのや、ゑだらこやなぎ、さはれ、え、、、とうとう、ゑだるこやなぎ、ゑだるかいては、ぁ、なよや、ゑだるこやなぎ、

わがかどの ゑだらこやなぎは、我門の垂る柳也、さはれは、うたふことば、とうとうも同じ、さいばらに、まろびあひけり、とうとう、かよりあひにけり、とうとう、かいてはなよや、こも歌のことばなり、いにしへ柳は齋ふ言にいひつと見ゆ、さいばらに、「おほちにそひこほれる青やぎが花や、青柳が花や、二段「あをやぎがしなひを見れども、今さかりなりや〳〵、これは青柳のうるはしきさまを、新京のゑきりに榮るにたとへたる齋ひ言なり、くにぞとみせんは、先專らとする處の國を擧、さて郡を擧、里を擧、我家迄も富せんとなり、さいばらに ゑら ゑては國もさかえんや、わいへらぞとみせんや、か、るさまに似たり

○伊勢比登

いせびとは、あやしきものをや、ぁ、、などてへは、をふね、、に、、のりぃ、てぇ、や、ぁ、なみのうへをこぐや、なぁ、、みのへをこぐや

今はなとまへばと有、此まはての誤成べし、などてへばなり、古今集に、かどさせりてへばとは、門させりといへばにて、などてへばは、何といへばなり、又などとへば歟、ゑかる時は、何といへばを略したる也、意は、伊勢の國人はあやしきことをする、なぜといへば、小舟にのりて大河のあらき波の上をこぐとなり

○かひがね

かひがね、、に、ゑろきはぁ、ゆぅ、きかぁ、や、いなをさの、かひのぉ、、けこ、、ろもや、さぁ、、らすてづくりや、さ、らすてづくり、

（萬葉十四に、「つくばねに雪かもふらる、いなをかも、かなしきころか、にぬほさるかも、此歌を轉じいふ歟、いなをさは、こはいなをかの義なり、否やさにはあらずといふことなり、け衣は、常の衣なり、今もけにもはれにもといふも常ざ、はれぎといふがごとし、てづくりは、萬葉にさらす手作り、、、和名抄に、白糸布、（テヅクリ）、調布を云て、（テヅクリ）、と訓は誤なり、和名抄に調布、（ツキヌノ）と有は、調布は貢の布をいふ、てづくりは、手作にて今の手織といふが如し、

○なりたかし

なりたかしぃ、や、なりたかしぃ、おほみやちかくてなりたかしぃ、あはれ、なりたかし、

なりたかしは、音高しとて、制する意なり、おほみやは、禁中なり、國にては行宮をいふべし、あはれ、、は、あ、音高しと制するなり、さて朱書は言落しなれば今おぎなふ、上のあづまぢは注を落せしなり、

○やをとめ

やをとめは、ぁ、、わがやをぉ、、とめぇ、、ぞ、たつやぁ、やをぉ、、とめ、ぇ、、たぁ、つやぁ、やをぉ、とめ、かみのます、ぅ、、たかまぁ、のぉ、、はぁ、らぁ、にぃ、、引たつやをぉ、、とめ、ぇ、、たつややをぁ、とめ、

やをとめは、八人の娘女なり、わがやをとめは、ゑたしみていふ言なり、

○かのゆく

かのゆくは、ぁ、かりかくぅ、、ぐひか、かりならば、ぁ、はれや、とうとう、

かりならば、なのりぞせまし、なほくゞひなりや、とうとう、

かのゆくは、かのもといふが如く、向て遠方をいふ、萬葉にかの見ゆるてふも遠く見ゆるといふことなり、かりは鴈なり、くゞひは鶴（クゞヒ）と有、意は、遠く飛ゆくは、鴈かくゞひかとなり、鴈ならば啼てたゞちに鴈と ゑるべけれども、音なければ、なほくゞひ成べしとなり、

鴈をかりといふは、鴈のこゑかり〳〵と聞ゆるからに、しか名けしこと、みゆ、蟬もせん〳〵と鳴故に、せみの名ありと眞淵はいへり、

右者縣居眞淵大人之註補しおかれしをまさやす君寫し給ふを我寫し終ぬなり

大宰府藤原美圖兄

風俗歌考終

歌體約言序

貫之が古今和歌の序に、和歌は人の心を種としてよろづの言葉とぞなれりけると書るにぞ、うたの源の理はつきてぞおぼえ侍る、されば古き世の歌は誠に心よりいでたると見えて、その時のありさまもいま見るやうにぞ覺ゆる、かつ世の盛なりけるほどは歌のさまもまた盛なりけるに、古今集えらばれし頃よりは、すこしくあさはかなるもいできにけり、後貫之もその源の理はゑり侍りけれども、世の勢につれてや、古今集にいれられし歌には、おのが心より出たるにしもあらぬと見ゆるもまじれり、それよりのち寛弘の頃よりは、まして世のなかみだれぬべき、きざしのいちゑるくゑられけるほどなれば、歌の姿にも衰ふる國の色見えて、心にもあらぬことをよみいだせし多し、たまさかには我よりいでたると見ゆるもあれど、心うすくあさはかなめり、後成定家といへる人のものせられし頃は、をさ〳〵世も亂れて、うたの心すがたもいよ〳〵あさましくぞなり行ける、その頃よりぞ歌の家などいへることだにいできて、いよ〳〵歌の道は衰へにける、その後世もます〳〵亂れてあさましかりけるに、我君の遠つ御おやの御神、世中を治めさせたまひて、四方の海波たゝず、民も戸ざしをわすれて、まことに世の勢も古にかへりけり、されどいかなるにか、歌のみ亂れたる世のまゝなる風なるぞなげかしき、ゑかれども治れる世につれて、自らこのすがたをまなぶ人もまゝ出來にけり、臣幼より、此道をこのむといへども、そのかみいまだ後のすがたを好みて、亡國の風をまぬかれず、たまさかに古の風をみることあれど、むつかしげにおそろしきさまにおぼえて、嘲り侍りき、やうやく壯年に及て、古への風のまこと有をゑりて、亡國風を捨て、これに心ざしつゝ、今に至て歌に治亂いきほひあることを詳にして、ます〳〵古の風を尊み侍る、然れども世中みなのちの風をもてあそぶ、ひとりこれにことなるは、また〳〵あやしきをこのむにあらず、彼後の風こそ古をかへて、人の耳を新にすめれば、これぞ此あやしきを好むてふものにして、君子のにくゐるわざなり、これもやんごとなくして、ひとり古の風をまなぶのみ、延享ひのえとらのとし九月のすゑにしるす、

參議從三位右衛門督源朝臣宗武

歌體約言

夫歌は人のこゝろをたねとして、よみいづるものなれば、我心につくろひたることなく、すらすらとよみいだすべし、玄かれば、すなほなる人は、歌のこゝろもすなほに、あるはかたくなに、あるはたはれたるは、うたにもその色のあらはるゝなり、人ごとにわがこゝろのうちのよしあしの、玄るくしらるゝなり、さてあしとおもはゞはづかしければ、心をあらためてよみかへぬべし、こと葉を脩めてその誠を立と、聖のの給ひけるも、かゝることなるべし、かくしてこそ人の心をすなほにするたよりともなるべけれ、後の風の歌はおのが心にもなき、あさましくたはれたること、あるは、むげにおろかなることなどを、めづらしきさまに、いひかなふるをむねとし侍るほどに、心をすなほにせざるのみか害をさへ得ぬべくなりゆくめり、さて古の風をよまん人は、古意をよくわきまふべし、まへにもいへるごとく、歌は心をもとゝして、そのまゝをよみいだすものなれば、詞おほからではよみ得ることかたし、玄かるに、のちの世のうた人は、耳にとほきふるき詞を、いやしげなりときらひてよまず、それ人のこと葉、世くだち行に玄たがひて、賤しくなりぬる事は、やまともろこしおなじことわりなるに、かへりて古の詞をいやしとすること、おほきにたがひたることなり、これたゞ古言を釋くことあたはざるものゝ、おのが才のみじかきをかくさんために、かくはいひいだせしなるべし、これにまよはされて、世の人つひに、古言をきらふ、玄かれども後の世のうた、古言にあらざるにはあらず、たとへば古言の三がひとつをもちうるがごとし、かるがゆゑに、心にうかみいづる事を、そのまゝにえいひがたければ、詞のために心をかへて、つひにうかびたることにいたる、古の風をよむとては、あながちにとほき古言をもちゐひんとするはあし、さらばつひにこと葉のために心をかふるにいたるべし、たゞ古のすがた後の風のわかれは、みだりにこと葉によしあしを制禁するものは後の風、古言をたふとみてたゞしく心をのぶるものを古の風といふべし、且古の風をよむときはおのづから古言に達す、古言に達する時は、我國の古の書を釋くにまで益あり、人麻呂赤人をば歌の聖なるよしは、中比よりもいひたて、今の人もよく知りてぞはべる、

扨その人達の讀みたる歌、みな古の風なるに、しかほめながらその風をまなばざるは、いかなる心にかあらん、かへりて中頃には、彼人達の歌をも、詞などあらためて、あらぬさまに玄なしたるおほし、かくむくつげなるわざは、中々歌よまぬ人にはおほきにおとりたるなめり、臣がまなぶところは、專人麻呂赤人の風情をたふとむ、且古の風はありのまゝに讀ものなれば、あるはよろこび、あるはかなしみ、あるはいましめ、或はたのしむなどのごときもあざやかにみえて、誠に天地をもうごかすべし、玉の臺のうへには、いやしき人のくるしき業をも玄ろしめしがたきに、うたてふものは下がしもの事業しげきをのべつるか、上のかみの寛なるおほむ心にもあはれと玄ろしめすべき業なりけらし、加茂眞淵がいひけらく、古歌に「くるしくもふり來る雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくにとよみたるは、誠に旅行人のあはれさ、うちきゝたるに、身にしむばかりおぼゆるに、後の世の人此歌をもて、「駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」とよみて侍るは、よき歌といふにつけて、そらぐしきやうにおぼゆと、實にさることにて、くるし氣には聞えて、かへりて佐野のわたりの雪の夕暮見まほしきまでにおぼゆる、されどなどさる人けとほき渡のゆきのくれおもしろきことやは侍るべき、かくくるしき事をもおもしろきやうに讀侍事、おほきなる人の害ともなり侍りぬべき、さてこそ罪なうして配所の月を見んなど、ひが〳〵しきこゝろも出來し人、おほくさへなれるなるべし、

歌體約言跋

掛まくもかしこき橿原の宮に初國ゑらし、天皇、日の入ほとり從出たゝして、日の出るかたをむけませしより、大御日嗣の彌益々にみさかりなる御代となん成にけるに、七十御嗣餘の頃ほひよりこのかた、やすからぬこと玄きりにおこりて、よろづのみちすたれにたるを、言まくもたふときふたらの宮にしづもります　大御神、日の出るかたに坐て、日の入きはみまつりごとせさせ給ひしより、今百年餘にして、千々のわざむかしのみさかりなる時のすがたにおもむけり、しかあるに貴賤心をのべてをさまれる御時のすがたを見るべき歌のみぞ、猶古にたちもかへらざりける、こゝに吾君のその大御神よりこゝのつぎ玄ろしめす御孫のふたばしらにあたらす御舍弟にまして、ひとりなげきおぼし給ふぞ有がたきや、故百のともしびも曇日に玄かず、らくの狂言も古言をもてあきらむるならひにしあれば、古のたゞしき風をあげて、後のうかへる心を論文つくらせ給ふことあり、僕眞淵かたじけなく是を見まつれば、うら〳〵にねもごろなることは、春の日のごとく、おごそかに明なるべき所は夏の日なして、高にも低にも、なほきにもまがれるにも、てらしいたりたまはぬ隈回なむなき、歌の心にしかしもつばら〳〵なることは、いにしへ百石木にその名聞えて、博士たちの文にすら見え來ぬことにして、玄かもいにしへのみちにかなはせたまふは、日々に新なりとこそあがめまつらめ、かつこの御事も日の出るかたよりむかしにかへさしめたまへば、日の入邊かけていゆきみちぬべきをりなむきたれるなるべし、いかで獨おむかせ給ふとや申さんとまをしまつるに、この日いかなる日に玄て、大殿にめしてかの御文のするに申せしこと、すなはち書てたてまつれと仰ごとたまはすれば、一たびは鵜自物うな根突てかたじけなくかしこまり、ひとたびは布多良の山の御德の玄からしめ給ふときいたりけりと、大空をあふぎ、拍子をうちてよろこぼひ、賤しくことなきをもてわすれて、かしこみながらまをしまつる、

臣加茂眞淵謹言

歌體約言終

國歌論臆說序

金吾君秋の初のころ在滿に歌の道のことを書てまゐらせよと侍りしに在滿曰いと若かりし時春滿に養はれて侍れども有職の事をもはらとし侍れば歌のことはよくもあげつろはずかつ〳〵聞つるもはたいかゞなどおもふも侍ればなどこたへまゐらするに尙その春滿がむねをばおきていかにもみづからおもはん所をと宣ふにいなみがたくや有けん三日ばかりのほどに國歌八論を書てまゐらせけるを其後に君も又八論餘言十帖を作りてやつがりに見せ給ひておもふ所を書てまゐらすべきよし宣ふけり是もまた程なくまゐらすべきよしあるにわづらはしき事侍りて六日ばかりに書て十一月四日にまゐらせ侍る

加茂眞淵

國歌論臆說　凡十帖

加茂眞淵述

【眞淵云此說々いとまだしかりけり今考て歌意文意書意語意國意といふ五意を書たりこれに書しはいまだ此國の意にとほらで侍るをりにてあらぬ事のみなりいかでやりすてられよかし○仲舒云八論餘言拾遺といふ書あるは此書の草稿なり末はあやまちをたゞすの論とのみ書きさして其詞はなし清水濱臣の跋ありてほうごの中よりえたるよし、るしたり】

歌の源の論

此歌天地ひらけはじまりにける時にいで來にけりと古今和歌集の序に書けることは古事記にいさなぎのみこと先のたまはく「あなにやしえをとめを」いさなみのみこと後にのたまはく「あなにやしえをとこを」とある二神の御こととばをもていふなるべし古事記にてはうたひ給ふともみえぬを日本書紀の一書に先言後言の四字を先唱曰後和曰と書き本文にも先唱曰と書れたり唱和の字はから國のいとふるき文にあるが中に易といへるふみに陽唱陰和とあるやこゝにはかなふらんされども樂記に一唱三嘆と

あるはもはら詠歌の事なりそれより後晋の陸機か連珠に高唱など侍るも詩詠のことに侍れば日本紀撰者はうたひたまふが如くおもひ給ひけん貫之もそれにしたがひつらんかし僕今考へ見るに古事記に神武天皇いすけよりひめの命を見給ふとき大久目の命と相うたひ給へる歌どもの句もすくなく五つ七つのことばもさだまらざるに同紀の垂仁天皇の所に「はしきやしわきへのかたゆくもゐたちくも」といふ歌に此は片歌なりとあるを見れば此三句などある類なりかた歌といひ詞もかざらず思ふ所をたゞちにうたひ出したれば歌の始めはことのみじかくぞありつらん片うたといふことは五句の歌あるが上にての名なるべけれども名は後にて事は先なるも考るべからずされば二神のおほみことをも猶うたのおこりなりといはんかしさてひそかにうかゞひまつるに神代の六くさの御歌は「八雲たついづも八重垣」と冠り詞をおかれ「あな玉はやみたにふたわたらす」など物にたとへ「濱つ千鳥よ」となひやかにそへられ「おきつ鳥かもつく島」と御口なれにたるさまし給ふに神武の卷よりつぎ〳〵のまきにもいたくふるめきにたる歌どもの侍ればうたがひなきにしも侍らねど神代の御事はなゞに敬ふべきなればあげつろはんもかしこければかしこくてやみぬ人の世となりて五句の歌の始て見えたるは神武紀に「えみしをひとりも、なひとひとはいへどもたむかひもせず」といふなり又三十一字の人の世にはじめてみえしは古事記に同じ天皇の御うたに「あしはらのしげこきをやにすがだゝみいやさや玄きてわがふたりねし」といふなりされどもこれよりさきにことを諷たる長歌など多きをおもへばいとはやくのかみ世より侍りけんを多くはつたはらぬなるべしさて其はじめはおもふ心ざしばかりを短くうたひたるをうたふ物から助辭發語のおのづから出來それより冠辭いはゆる序歌などいふ長き發語も出來てことながくは成ぬらんかの序歌といふをみれば志は只一言にのみあるなり且うたふ物なればかくしもふるき歌も今打いひたるにもはらしのばしくてたゞごとゝはきこえざるなりさておのが心をやるのみかは人をさとしなどしてはやくより用ある物になん

歌をもてあそぶの論

夫歌は心におもふ事をうたひ出すなり或は獨もあるは人にむかひても其心のまめにもやさしくもあはれにもあらんに詞なびやかに聲もことにしたがひてたゞしくもおもしろくもかなしくもあらんはおのが心のゆくのみかは聞人の心もなぐさめるわざなりおよそ人の物よくいひことわりのいやちこなるにはあを人くさのなびくものながらとみに屈してなびくものはとみにうらかへらずしもあらず故に大なる政はおのづから行なはれん事をなすならしもろこしの聖の世をまつりこつにことわりおきての及ばぬ事しもあるをはかりて歌をもとゝして樂てふ物を作り給ひ家に用ひ國に用ゐ此風をもて民のふりをうつし心をやはらげしめぬかし其かみは只志をいふのみなるをむかしのから人のつねとして道ある心をのべたるも侍らんを聖のとりて教とし給ふなるべしやまとにはまのあたりに教とすべき古歌のあらぬにやとりえらみて教ふることはあらねども神武の御時の久目歌などいふを中ごろの世までは樂府とせられし事日本紀にみえて今とよのあかりに此歌をうたふときは猶たばかりの大さちひさゝ及び歌の聲のふとさほそさ是いにしへののこれるのりなりとあるあたりは季札といへる人魯の國に往て周の樂みたらん樣おぼえられていと〳〵たふとくぞ侍る天武の御時世を治めんにはゐやとうたまひをならべてこそとて五節の舞を造り給ひ其後聖武の御時此事もはら興させ給ひて久しく傳りつるに末の世にいたりてかゝる事たゞたえにたえにければましてよのつねの歌はうたふにしもあらねども猶すがたゆるやかに心のまめにもやさしくもあはれにもいひ出たるは心にしみて覺えぬるは又上一人よりはじめていとやんごとなきあたりは世の中のわざをも海山のありさまをもつねにしも見聞給ふことなく身を浦波にしほくみたまはねば人の情をもしろしめしがたかるべしからのふみに詩は志をいふまた志のゆく所などいふ如く歌も又しかり是をもて人のへつらひなき志のほどをもしろしめさばさてのみもめでたきわざなり又世の中にある人をしみほしみの心こそうたてさりがたけれさる心すくなからん教のふみも多かれどそれきく人もいとしもすくなくなれることなし唯歌てふものそこよなきや餘りにすける人は家をもたからをも打捨てよのほかにはひかくれて心しづかにもてあそぶものさへ出來めりそれはいとすくいたる事ながら多くの人の中にては露ばかりの費なるべし高きもいやしきもいとまのあらんをりはふるき歌のごとくわづらはしからずいひ出つゝたのしめる時し侍らばまのあたり教ねどもをしみほしみのあらそひおのづから少く成もてゆかんかし南風をうたひて天の下をまつろへ給ひ

堂をくだらずして單父を治めつらんもことならめや此御世久しく治まれるまゝに人の心すなほになりもてゆけばにやいにしへにかへりて安らかなる歌の詞をこのむものもより〳〵に出來て此心をもてあそぶに隣なきにしもあらずまして今のことなきあたりに此風を用ゐ給はゞ誰かはなびかざらんいでや用ゐんとならば敎ともなれる古のから歌の心もてやまと歌をもよまんぞめでたき事なるべきしかれどもから歌は一句にてもやまと歌の一首より多の心をふくまるゝ物なれば安かりぬべしやまとにも長歌こそあがりたる世よりおもふばかり物をよそへなどもして侍るなりみじか歌もより〳〵にはさる心も侍るめれどなべての人の耳には聞知べくてことわりもかなひすがたの調も人なつくべからんはつねにしも有がたかるべしたゞをりにふれてはかなき月花のけしき又はおもふ心のほどをいひ出んにおのづからもはた設てもある心をもよまんはわづらはしからざらんかげにまのあたり敎ふまじきはやまと歌の劣れるなるべしされどもから國の人の樣をおし考ふるにことがらの厚き國にし侍ればいとよくいとあしき事あり物にめで物にそむくもしたがひて甚しければをしへとする事も一ふしふかくぞ侍るらんやまと人はよしあしもきはことならずよろづなだらかなればさる歌のやはらかなる心になづくめるをおもふにさるべきにて此あめつちのなすことなれば國ぶりにとりてはいたく劣れりともいふべからずやあらんさても猶此風の行なはればおのづから人のなびくべきにて大なる敎なるべくめでたきもてあそびぐさなるべし

詞をえらむの論

歌はうたふことのたえにたれど詞みやびかにゆるやかなれば打いひたるにも心ゆく物なりさるは詞とつゞけがらとにあなれば詞をえらまんとするに世によりてよしとおもふらんを又ある時はあしと聞えんなどさまざまにて一すぢにはいひがたし藤原奈良などの御時にて見るに打いひたるに詞ゆるやかにことわり明らかなるあり又をさな子の片ことめきたるもありつゞけがらにもさのごとくきはことにわかれたるは論に及ばず今在滿のあげつろひに出たるを以て額田王の「あきの野の美草かりふきやどれりしうちのみやこの借五百磯所念」といふ萬葉の歌にておもふに後の集にもむねの句を「をばなかりふき」となほして入られたるは例のひが事なり「やどれりし」を今ならば「やどりつる」とよまんと侍る說はげに「やどれりし」と侍るはふと聞ては迂遠にもおもはるれど八論餘言の御論の上にてよくおもへば「やどりつる」といはんはいとうすく「やどれりし」と有はゆたかに厚くこそ侍れ又此終の句を「かりいほしそおもふ」とよみ來たれるは九文字あるが耳にもたゝずゆるやかに聞ゆるなりしかれどもいにしへはさはよまぬにやとおもふは五百と書たるは外にも「五百入爲而」とあるを「いほりして」とよめる例にて是もいほとよむべきを同集卷の十五の長歌に「波都乎花可里保爾布伎豆」とよみ卷の十に「秋田刈借廬之宿」(宿こゝにてはやどりと讀むべし)と有を後撰集に「かりほのいほの」とて入られ古今集の歌に「山田守秋のかりほに(ほをよむことをのごとし)おく露は」と侍るも借廬といふ事なれば句中にありて字のあまれるをば語を略して唱ふるならひにて古くはかりほとよみたるなるべし萬葉には何々爾有と書ても何々なるとよむべき類多ければ五百とあるもほとのみもよむべく且かりのりにいの音のこもれば上略してほとよむの類もまた多し又おもふといふ落句は同集の歌の落句に「伊弊乎之曾於毛布」「應逝衣念」また「吾家之於母保由」(吾家はわきへとよむ例なり)「京師之於毛保由」など假字かきにしたるも多しまた「容儀志所念」「益々所念」かく字義にて書るをも印本におもふと訓たれど集中に所の字をそといふかなに用ゐしにやとおもふ所も一つ二つは侍れどそれも猶別の訓あるべきにやとうたがひ有所なり故に多にしたがひて所念と書しをばおもほゆとよむべきなりされども「京師しおもほゆ」「わきへしおもほゆ」とあるよりも「みやこしぞおもふ」「わきへしぞおもふ」とあるはのびやかにてよくもあらんとおもふに同集の歌の發句に「毛能毛布」とよみ日本紀に聖德太子の御歌に「伊比爾恵豆」と二所まで見えたるは後の心にては「物おもふ」といひ「飯にうゑて」とよませたまはゞ聞よからましとおもふにかく略語の多きを見れば今よりおしはかりがたき事も侍れば例をもてことゞくくわいためおきて心によろしと思ふ詞を用べきにやされどもすがた(イまた)心を得て後はたとへ古歌に見えぬ詞にてもなどかよまざらん鎌倉右大臣の「もの、ふの矢なみつくろふこての上にあられたはしるなすの篠原」とよみ給ふ第二句などは耳なれても侍らねど此歌によくかなひて悲壯なる體身もふるはるるばかりなり又同じ右大臣「箱根路をわが越來れば伊豆の海や沖の小島に波のよるみゆ」とよみ給ふは萬葉に「相坂をわが越來れば淡海のうみ白

ゆふ花に波たちわたる」とある歌の體にて心も歌のたけも劣ることなくけしきなどは古歌よりも増りて聞ゆるなり定家卿「駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」是は萬葉に「くるしくもふりくる雨かみわかさきさの、わたりに家もあらなくに」といふ歌にもとづかれたるに古歌はいかにも苦しかるべく聞ゆるを雪の夕暮の歌はすぐれてよろしといふにとりてはさうぐ（そらぐ〳〵イ）しき心ちのするなり又古今集に「ほからほから散ぞめでたき」など云を今はよむまじきとやいふらんよくつづけ得ば耳たゝぬ樣もなどかなからん後の人は詞をのみ論て心を論ふことなきまゝにくらべくるしくのみなり行なり「うつるもくもる露のそこなる」など樣の詞は此時新句にて名を得ることなればかたみにいどみていかで〳〵と案じ出されつらめば古へとは雲とひぢとのたがひになりもて來にけりよく心みればあきがたき心ちこそすれ歌よまん人は心すべき事なり

詞をさくるの論

いはゆる制のことばなどいふ類はなどかはとりてよまんそれが中に雨の夕ぐれ雪のゆふ暮還の玄ら雲などいふは其時にさる歌をすぐれたりとするに一句に新句の侍らねば此句をだにとて制せらるるなるべしかゝる詞をさへさけもてゆかば後には何事をかいはん又いつの頃よりかてにをはの傳といふことの侍りて大方の人はさけていふまじきよしをいへりかつ〳〵其傳を聞侍りしにいにしへのてにをはにはあらで後の歌を證して傳ふるなりそのうちに「見わたせば」といふはたはやすくはおきがたきよしいへど古歌には只見わたすことのみにて二つ物なくてはなどいふは後のさたなり「詠れば」といふ詞は心におもふ事のある時默然と物のまもらるゝをいふなり遠望の事などゝおもふは誤りなりちかくは古今集の序に「秋萩の下葉をながめ」といふにてもしらるべし又結句に「かな」といふことをもみだりにおくまじとす凡「かな」はいにしへ「かも」といふに同じ然ども「かも」又「かな」と同じきと疑の「かも」と二つあり「も」は共に助語なり萬葉の印本に「欲得」と書たる所を「かな」と訓せしはあし是はいはゆる願のかなながら古くはそれをも「かも」と假字書したる所多きなりさて嘆ずることに用るのみ「つゝ」といふ詞は萬葉に乍の字を用ひて則「ながら」の心もあり又ことの重りたるにいふもありたとへば道を行にそのほとりの物を見つゝ行といふも見ながら行といふも同じことゝなれるなり此外かぎりなくさる事の侍るなれどたゞ古歌を心得ておかんのみさればども初學の人の心得ずしてひたすらよむをうるさがりての事なるべし外にはさくべき故をしらず

あやまちをたゞすの論

國歌八論のむねしかりそれが中に「づゝ」といふ詞は露にぬれつゝといふ心なればあけられし（イきらけし）歌にとりては難ずべき事とも覺え侍らず又詞をあやまつのみならず古歌の詞をなほして新集に入らるゝことこそ大なるひがことなれ八論餘言に出させたまへる赤人の富士の山の歌をなほせし事を出させ給へば更に猶こまかなる事をもいはばやとてくりごとするなり凡「たへ」といふは絹布の事なるを萬葉に「白妙」と書し所のあるは假借の文字なり古書に「和細布」を「にぎたへ」「麁布」を「あらたへ」とよめること數しらず白といふは絹布ともにもとより白ければいふのみ白肢白雪の白のごとしかつ冠辭も古よりいひなれ來るまゝに漸に略して用ふる事あり已に冠辭ならで白布の如くといふ心にも用ひ只白き事にも用ふる樣になりにたれど妙なりといふ心に用ひし事は侍らぬなり其もとを考へぬ人は白く妙なることゝおもひてましろなるを白妙にとはなほせしなるべし且「麁布」を「あらたへ」とよむにあらくてたへなりといはん理りもなきをや又「あらたへの藤江の浦」といふ人丸の歌を後に「しろたへの」と誦したがへて萬葉に侍れども共に藤布の義につゞけたれば同事なり又藤はふぢ富士はふじの假字にて「白細布のふじ」とはつゞくまじき事なり打むかひたる景をたゞにのべ出して一（イなし）ことのかくれたる所もなくて妙なる感あるはかゝる歌のつねなるをいかに心得てなほされけん此外にも後の集になほして入られたるは多は理りの聞えずなり侍るなり今もいにしへにかへさまほしく侍るをいにしへを今にならはするはいかになさけなき心にやしかるに賴政卿は古歌の心をやしられけん「あふみ路やうち出の濱に駒とめてひらの高ねの花を見るかな」とぞよまれける

大宮人の歌をほしいまゝにする論

此御世の久しく治れるにしたがひて萬の道のむかしにかへるが中に猶やまとの學びのみは行はれずぞあなるされども律令格式などは時世のうつりぬれば昔を今にともおもふべからずたゞ歌の道のみまのあたり用なきことなれば中々むかしへにもかへりぬべきものか太平にも似ず屈

し窮りたるすがたなり國歌八論にくはしければあだし事はもだし侍りぬ

歌を學ぶの論

凡聖にあらざるよりは物みなかねたる人なしかたみに得たる所得ぬ所のさちあれば古へはさちをかふるをあしとせるならしされども後の世にはさま〴〵の家のことわざ出來て家のわざは捨べからねばそれを專らとして得ざる事をもより〳〵にはなすめりそれが中にも君おみのわかちあるべきにて臣は其一つふたつの得たることだにあらば用ふるにたりぬべし君は下を惠むをわざとす君もしかたよならばかたへの人は時めきかたへの人はなげくべしされば小道になづむまじく小道をもすづべからず今八論餘言の御あげつろひをうかゞふに人の君たらんあたりはなべてかくこそあらまほしくいともかしこき御ことなめりそれが中にひが心におもふにくすしの道はまのあたり人をたすくることにて學ばずば有べからねども人の君は是はた捨給ふまじきにてみづからなし給ふべきにあらず大かたの民もはたしかり歌は用なきに似たれども心をやり人をなごしひろくは政のたすけともなるべくばたれかはよまざらんいはんや上このめば下はたこのむ上いにしへの心詞を用ひば下はたいにしへにかへるべし文にあらざれば德遠からずと聖ものたまひけん今歌を用ひて人の君のいつくしみをひろくほどこさんに其詞にあやまちあらばめはやき山かつの侍りてうたがふ事あらんか心いきほひなきものすら得たる道あればもゝたり千たりもみちびくならひなればやんごとなきあたりの一聲は千聲に傳ふる山彦もや侍らん故にひとりをつゝしむてふことはかゝることまでも有べきにやされども人の君は物になづむべからずいにしへの詞をことゞゝに明らめんには大道にさまたげ有にちかし已に歌の心をしろしめすが上は詞は大かたにてこまかなることは臣を用ひたゞさしめたまはん物が又いやしきものはしからず只此風になびきておのが思ひのなぐさむなれば心をしいたさば詞には露のたがひ有ともさるやさしき心をこそあはれとはすべきなれ人はことわりにしたがふ物なれば歌もことわりを先とすべしそれが中にも又ことわりは本よりにてことわりの上にしてことわりにかゝはらず心たかくやさしきことをもいひ侍り又誰かいひ出しけんことにや歌はおさなかれといふ事の侍るはげにもしかりたとへば我にいとめでたしと思ふ物あらんに人のしひてこはゞ理りなきなめりと思はんもやむことなくて贈り物するともそれによりてこゝろのへだてなん出來べきなりさるにいとをさなき心にさまではおもふらんよとて心よりあはれがりて贈りぬかしいにしへの歌はこれらの心ぞ多きなりまれ〳〵に後の歌にことわりをいふも侍れども心ひきくやさしき所も侍らぬなどは撿非違使のゆるぎいでゝ物たゞすらん樣になん侍るされど餘りに和らかならんとて手弱女の病あつしきに物いひたらん樣にきえ入りて聞ゆるも侍るなり

歌の道盛なる世とすたれたる世を辨ふるの論

八論餘言の御論いやちこなり中にも歌合てふ事のいで來つるより歌の道を失へるよしのたまふは此こといで來しよりいくそばくの世をかへつらんかくまでめでたき論をうけ給はり侍らば人の思ひあきらむべき事なりさるは撰集などを見ればいとつとめたるに似て心ぐるしかれどふるき世の家集などを見れば安らかにいひ出たるが中にておのづからよろしきをえらみ出せりとおぼゆるも多ければしかしながら古今集のころはしたはしくぞ覺え侍るなり又歌のひじりといふ事はから國に詩聖といふ事の侍るに習ひてつらゆきはかゝれけん人麻呂赤人は萬葉のことばがきにも見えていにしへよりさばかりの歌よみも聞えず此人々により世にもこのみよむ事にもなりて侍らば此道に崇ふことばなるべし實はかの御論にもるゝことなく承りぬ

あたらしき物の名を歌によむ論

今の物の名などよむやうはいにしへを守るがごとくして古に背くと侍る八論餘言の御論いやちこなりつたなき心にもとよりおもへらくいにしへにも一字二字の題にてよむ事は侍れども後の世には歌はたゞ文字の題にてよむべきことのやうになりぬさる歌の心のみかは詞書をだにえよく書侍らぬやうにそれよりぞなりにけるなりさて名所に月花よみよまざる所の事はいにしへさる古歌などあるよりのこと名所なれば題にむかひてはしばらくさも侍りなんさらぬ調度など又は行いたりたる所の名のいと聞あしからぬをばいむべきにあらずゆゑなき所の名もよくつづけなましかばかへりて便なることゝこそいふべけれ

歌をたしなむの論

能因法師がみちのくへ下りふし柴の加賀の人にめかれたるなどの事をいつの比よりかやさしき事にいふ人の侍るらん伽羅木をぬすむはぬすみにあらずなどいふ類にてやうもこそあれうたてしき事なりげにかくまであぢきなき

事になりもて來らばかへす〳〵も歌をあらそひいどむよりのつひえなりけり

一本 此御あげつろひを一度も聞ん人は始て歌の意を知べし此御事をひそかにうかゞひ見まつりてあやしの心にもなにはのよしあし思ひわくべくはは〻かりの關の思ひとゞむることなくまをすべきのむねを荷田在滿のつたへいふなり故にかたじけなくうかゞひ見まつるにこれよりさきに此ことなくこれより後にまさらんこゝろはあらじとなん覺え侍るそれが中にひがこゝろにやどせることのさだめがたくてかつ〳〵もまをさんはおそり思へどあなかしこのこひたらんもまめならぬわざにやとあしつゞのひとへ心に書て奉るなり

此御あげつろひをといふより下の詞ははじめ書しを奉る時に用ありてもらしつ

延享甲子季夏

加茂眞淵

右國歌論臆說岡部三思自筆之以書頓書寫校合畢（眞淵）

寛職可愛者焉

霞染齋印

國歌論臆說終

再奉答　金吾君

加茂眞淵

國歌剩言の御論に神代の事はすべてなぞらへいへるが多ければそれをよくわきまへずしてはいふべからずかの二神の御歌もまことにのたまひしにもうたひたまひしにもあらぬを後の人のかく御詞をつくりてなぞらへいへるならしされればこれをもて歌のはじめとはいふべからずこれこのことくはしくいはんはたはやすきやうなればのせずとの給ふまことに文字の傳りてよりあらんことをおろおろも書おくべき代はいと後の事にて人の世といへどそのはじめたる御代〳〵のことはかたり傳ふるのみながらそは同じ人のことわざにしあればたがはざることも多かりなん神代といふも名のことなるのみにて同じく人の上なるべきも傳ふる所ことに侍ればかしこけれどおぼつかなくのみたれも〳〵おもひ侍るめれどいと〳〵そのかみよりいたゞきまつり來たりてさるべき故こそは侍らめはつ國しらす天皇よりこのかた此御事をのたまひ擧つゝかくまでたえさせ給はぬ御するなればふるき史にまかせてしるしとせんぞ民を敎ふる大なる道にや侍らましもろこしとてもいとあがりたる代の事はまことゝしも覺えぬことのみ多きを信じていにしへを好むと聖もものたまひしは人をみちびかん爲にこそ侍らめ且二神の國のみはしらを二たび改めめぐり給ひてとなへ給ひし事をしるせしにも同じく「あなにやし」てふ御詞なる樣を思ふにうたひ給ふとせるもいとそのかみより傳れらんとおもへばかの六首の御歌の詞のとゝのほれるよりも中々似つかはしくなん覺え侍る

歌をもてあそぶの御論にまことにももとより敎となりぬべき古歌もあれどとり選みて敎とすることをいまだせざればなりとのたまふ僕まのあたりに敎とすべき歌のあらぬにやと申侍りしは古の人の歌なむ時につけておもふ志をうたひ出すにおのづから人の哀とおもひ且此風によりておのづから世は治るべく一首の上にて敎とならんはいと少くから歌のごとくまのあたりに其心にあらはれもし侍らざる心をまへにも末にも申つればこゝにはことすくなからんとて除り詞たらはすそ侍りし又とりえらみて敎とせる人のあらぬは御論のごとくながら歌は敎ならんとてよめるはいと少なかるべきを時によりて人の心に感じとる物なればもとよりとりわきてさる心を選ばんの心

はなくたゞあるかぎり歌なるものをいにしへの人も集めおかれしのみならしされども御論のごとくいと流れて歌の趣にも人の害にもなるべきをばしるしおかんはあしき事なり又人萬呂の「見れどあかぬよしの、川の」とよまれたる歌に「とこなめのたゆることなく」といふあたりすべらぎのつくづくと唱へさせ給はゞかぎりあるいのちにてかぎりなき物をしたひ給ふことよなど御心を興じ給ふことも侍りなん此御時しきりに御幸のありつればいさめ奉りし臣もありし事史にも見ゆればげにも諷人のつねなれば人まろもさる心にてよまれけんや愚なる心にはいまださだかにさとり得侍らず詩經などに何心有とも見えぬ詩をも時を刺るなど古き注に書るをおもへば後に誦詠せん人の感ずる所によるべし亦同じ人近江の荒都をよめる長歌にかし原よりはじめてやまとに都し給ふをいかさまにおぼしめしてか此近江にはうつらせ給ひけんといふ心をのべてさてほどなくあれにけるありさまをよみたるもさのみ後の帝の御ためにもとてよまれしとは覺えねども後の帝此歌を誦し給ひなば御心し給はん爲にもなりぬべし又同じ萬葉の末に山村といふ所に御幸し給ひて御うたに「足引の山行しかば山人のわれに得しめし山つとぞこれ」とよませ給ふに舍人親王の御こたへ歌「足引の山にゆきけん山人の情もしらず山人やたれ」と侍るはもしはさるまじき御幸の侍りしをいさめ奉り給ふにやされどもいさめ給ふならば餘り打つけにてかへりて叡慮をなだめたまはんことははかりがたくなん亦同集の挽歌或は防人の歌などにたが耳にもあはれす、まる、ぞ多き父母妻子をおきておほやけのみことをかしこみ別れををしみ或は道のま、に死親族を喩し貧窮をよめるたぐひすべらぎ誦し給ひなば御あはれみの御心まさらせたまひなん此外さるたすけとなりぬべきはくさ〳〵多かれど設て敎にとてよみけんはことにかつ〳〵なるべし其もとをよくおもへばから人のいにしへの詩もさる物こそ少なからんを後におもひはかりて注せしを見ればさもやとおもひよらるるも多しそれが中にあらはに敎なるべく聞ゆるも侍るはかの國のつねとこそ覺え侍れ

又久目歌といへるもさせる敎となりぬべき事とも覺えず昔漢高祖卽位の初沛宮に過りて大風の歌を作り給ひしを惠帝の時より歌兒百二十人を定めて沛中の原廟にして是を歌ひ舞はしめしが文景の比ほひよりはたゞ禮官にして肆習しむるのみなりしわが國の久目歌も共によりて起る

所かの大風の歌のたぐひなるべければ雅樂と同じくいふべき事にあらずとのたまふ僕もとよりおもへらく一首の詞の敎ともなるべきはめでたき事ながら詩歌ともに一首の詞のみを專とせず此風のおのづから世を治むるわざにて侍るとぞひとへにおもひとりて侍り宋儒などの毛詩を論ぜしにはことに侍れば末に更にひがおもひを申侍る故にこゝにもらしつ又御論のごとく久目歌は大風の歌のたぐひにも侍りなん且雅樂はその音調を始て大風のくらぶべくも侍らざらんされどもわが國人はわが國の歌にこそやはらぐめればかのたぐひなからん雅樂よりもわが國のふるき歌ふるきしらべこそたふとみなづくべくなん又かの季札が樂を論ぜしも音聲をもて國の治亂をいへり今久目歌の音調しるべからねどもはつ國しらせるすべらぎの御ありさまをむかしより歌ひまふはおのづからかく久しく治るべき音調こそ有つらめ淫聲亡國の音はあらじをとこそ覺え侍れかの大風の歌も淫亡の音聲有まじけれどもかれは雅樂になづくべき同じ國なれば大風なくても侍りけん且まのあたり敎となる調のあらずともかの祖功をあらはすたぐひにて此民の永くいたゞきまつれる心よりきかんには久目歌ぞこよなきわざにぞ侍らんかの雅樂のたふとからんも此國人のたふとみ侍らねばこゝには益ある事少くなん又催馬樂ごときの戲たる後の事だに今の歌などにはいと似なく侍るをそのかみのことゞもの殘りて歌舞などし侍らば今の世の淫聲戲言は貴きあたりまでは聞えあがらじをと覺え侍れば猶いにしへのしたはしくぞ侍る

又天武天皇のみよしのにおはしませし時神女の舞たるを見たまひしより五節の舞は起りたりと聞に楚襄王の雲となり雨となるといひけん神女にあひ給ひしむかしも思ひ出られて大嘗の祭などにはもてはなれたるなりもろこしの聖の魯といふ國に仕へましませし時齊の國より女樂を贈りしを魯の君のうけたまひしに聖の魯の國をはなれ給ひしなどを思ふにかの五節の舞の絶しこそいと幸に覺ゆるとのたまふ僕おもへらくかの樂記に鄭衞などの樂は淫溺の音故に祭祀には用ひざるよし侍るがごとく淫聲の樂はいづこにも祭祀には用ひまじきなりさるにもと五節の舞のおこれること本朝月令にみゆるよしいへども月令の全き書を見ざればそはおきぬ風土記または滑行の異見封事に淨見原天皇よしのにて琴ひかせ給ふに天乙女くだりてから玉をたもとにまかしといふ歌うたひて五ひら袖を

ひるがへしまひつるより五節といふよし見えたり是中比和來りていへる語に樂有五節杜預注に五聲の節なりといの人かの高唐の神女の事を此五節の歌につけそへていふへり凡一樂に五たびのふしあるをいふを此國にては一樂なるを其後目をそなへ事を明らめて書よむ人のあらねばの名によべりさて其ふしごとに袖かへすことのありこそまして歌學者流などは信じ來れるなり今此御論をきかんせめ五たび袖かへせしより五節といふと侍るは本末の心ものはじめておどろきてうたがひを起すべし凡五節の舞得たがひなりかゝればかの天女のことはとらずたゞ此歌の事は續日本紀に天平十五年五月皇太子五節をまひ給ひは此樂造らせ給ふ時の樂府のうちにぞ侍らん且萬葉集に し時の詔に淨見原の天皇天が下を和らげて動なく靜にあ山上憶良大夫の長歌に「をとこともをとこさひすとつるらしめんには禮と樂と二つならべてし平けく長く有べし きたち腰にとりはき乙女とも乙女さひすとから玉をたもと神ながらもおもほしめして此舞を始給ひつくり給ひき とにまかし」とよめる少し後の人の作ながら此對句によと聞しめして天地とゝもに絶ることなく彌つぎに受たまるにも玉もてよそふはむかしの女のつねなればひとへに はり行なはんものとして此太子に舞はしめ給ふなどありて乙女のことはあらず猶そのはじめは吉野のことにより天女をのみさすにあらず良少將の「天津風雲のかよひ路」て淨御原の天皇のおこさせ給ふらんといふ人も侍らんかとよまれしはいとゞしく天になぞらふる大内にての事なしからずかの歌にいへる「から玉」は韓錦から紅などの ればこゝに論なしさて天平十五年には皇太子の舞給ひけ類にてから國より渡れるがよろしければほめたる詞なる ればもとより少女にまはしめ給ふ事にもや有を天女しもから玉をよしとしてまかん事おぼつかなし且 つらん然れどもかの齊よりおくりけんはさもこそ淫樂に「乙女さび」のさは發語びはぶりの二語をつゞめたるに 侍りけめ此國のなだらかなる風にして女樂とてもそのかて乙女ぶりの義なりされば此玉まかすは天乙女ふりなら みは淫樂にはあらぬにやその上淨御原の御時から國の聖ざらんか其上天なる人も和歌をよむにや笑ふにたへたる のふみの有樣既にしろしめす故に禮樂をもてこそとて始事なり又五節の文字は左氏傳に晉平公病あるとき秦の醫 めたまひ造給ひつれば齊の女樂のこともしろしめすべく

侍ればおこれるおもむきによるべく覺え侍り

又歌は人のをしみほしみを少くする物にてそれが甚しきは故なく家たからをも捨て世の外にすみて心しづかにもてあそぶものもいでくるは過いたることながらそれはた代々にさる人の多からねば害ならぬよしを申せしに御論に歌の道を好みてさる人の出くべきにはそれはわざを好みて心をしらざるよりなり一人もさる人の出來なば一人のみにても有べきかは歌の道さかんならば必さる者は出くべからず又をしみほしみは家をおもひ寶をおもふにかぎれる物か又しづかなる所にかくれてわがまゝにあらんとほしみたる心よりなすしの給ふ僕申せしは歌このみてさるひがめる心あるべからねども欲を少くせるの餘りを申にぞ侍るよく物を心得たらん人はいかでさること侍らんされどもからにもやまとにもよく心得たる民はまれにぞ侍らんかの瞽叟といへるは堯の民にて舜の父なり四極にはなたれしが一人は舜の民にて禹の父とこそ聞ゆれば只大かたの人の上の德になびき侍ればその外あしき心有人もおされて治るにぞ侍るべき又閑かなるを好むも欲ながら凡そ人に欲なき事あらざるが中に大小の欲あり且人の害ある欲と害ならぬ欲あり大なる欲にむかへては家たからを捨てしも世の外にすまんなどは世に大なる害なしまたそれにならひてさる心の出らん人はいにしへにも今にもいくばくも侍らず中々にあらそひむさぼれる人の心にたゆみも出來べき事と覺え侍り凡聖賢の書は其道德義理明らかにてたゞおほよその人の教なるものなり書に見えたるごとくに全く治りたる世はから國の聖の世といふにもあらねば民の大なる害なき時をば太平といふべくぞ侍るらんしかれどもこれらは大かたの民のうへを申にて侍り國君は物の中さたをこゝろえ給ひて民を道引給ふべきなれば少しのたがひあらんも世のうれひなるべきとぞ覺え侍る

又御論にあげさせ給ふ「君が代もわが代もしれや」といふ歌中大兄の御歌ならば御論のごとく侍るべし荷田春滿申て侍りしは此歌のさきにも中皇命（此三字をなかうしのみこと、訓し來れどもいかでさよまん事ともおもはれず）遣二間人連老一獻歌とて侍る長歌並反歌の心詞も此君が代もといふより以下三首は有馬の皇子の牟漏の湯あみにおはしけるにかの皇女もともなひ給ふ時の御歌にもやあらんなど侍りし僕おもへらくたとひ此中皇命間人皇女といふ事はおしはかりの說に侍るとも女の歌なるべき

ことはすべて歌さまをおすにたがはずぞ侍るべき且歌の詞によるに中皇命一人おはせしにはあらざるべしまた次下に中大兄の御歌とて載たるは其歌ざまいとことにてまことに男みこの御歌とぞ聞え侍る亦額田王の春秋を判せられし歌は春は物みなのびさかえ秋はおとろふれば春をたのしみ秋をかなしむは人の常なるを春に増りて秋をよしとよまれしは人の情にたがひてぞ聞ゆ僕も春をおきて秋をこのむらん人をいかなる心にかとうたがひ侍れどあまきをきらひ辛きをこのむ人もあるめれば人の心かばかりのたがひは多かりなんさて此王の御歌はかへりてやさしくよませ給ふとぞ覺え侍る凡櫻のさかん比は彌生の名も侍りて草木しげりゆくめれども野山の分かたきばかりにあらぬを古歌には春はいとしげきことにいへば深窓のうちにませる御心にて此しげからん比の山の櫻入ても見がだかるべくおぼし秋はた紅葉の比は猶草木皆かれうするにも侍らねどうらがれなどいへば分よかるべき事とおぼすよりかくはおもひなしてことわり給ふならんかし歌は人情をいひ出す物なれば凡のことわりにはたがふもあれど其一人の上にてみればかへりてまことにさりけりと思ひやられてなつかしきも侍り

又「大船をこきのすさみにいそにふれ」といふ歌御論のごと侍るべしすべて巧に慮ふかゝらんとするに流れて中中まこと、しも思はれぬ歌のみぞ後には多かりされども戀の歌は時にとりてさるを實情なるもまれには侍りもしなんを身にかへて花をたしみ心いられてほと、ぎすをまつ心などよむはふかゝらんとしてあさくこそ侍れ花鳥をも折にふれては「ちらであれかし」とわりなくしたひ「はやもなかなん」と下またるゝほどの心をのどやかにおもしろくつゞけたらんぞよく侍るべき

又「駒とめて袖打拂ふかげもなし」といふ歌につきて此けしきのおもしろきにやんごとなきあたりにはかへりて民をうらやみ給ふ御心出來てあはれみ給ふ御心もゆるみてんかし」と聞えて（イなし）物ごとに御心つけ給ひて世をおぼすなるはいとかたじけなき御事に承りぬいで敎とせんとてえらまんにはかくまでも先み心くばりぬべき事にこそまたたゞによまんはさりとておもしろくあるかぎりよみ出すやはあるべきこれは勿論のことにての給ふなるべし此外古のも後のもかつ〳〵引出て心のながれざる所を論せさせ給ふは皆めでたく承りぬ

又からやまとの國ぶりのあつさうすさを比とよはひとを

ゲニモ

梅柳ヲ先ヘオモシロシ、

もてさとし給ふいやちこなり僕申せしは通じかたきことの侍りしなり今御論につきて猶おもひ侍るは木もていはばから人は梅のごとしやまと人は柳のごとし梅はかきくらしふる雪の中よりえならずかをり出つゝ實を結ぶにいたりて殊に用あるものになん只枝のさまこはくずねびたれば風雪にもたはまぬもの、折れやすきは北方の强などいはんにちかし柳は花も實もあらねばさせる用をなさず只のどやかなる春風になびけるほど上蔦めきたるすがた花に劣らず風雪になびきやすき物から中々をるべくも侍らぬは南方の强にやたとへましまたからのすべらぎは天か下を惠み給ふべきをそこなひ給ふはすべらぎにましまさねばかはりてよく治めんとてほかの人の立給ふよしのたまふは周武王の事をやおほすらんひが心には武王のことはたおぼつかなく侍れど代々のかしこき人も定めたる聖の王なればさても侍るべし其後なるは世の爲てふ名をかれどもまことにみづからほしみて打かちたるものと覺え侍りそれはたいかにほしむとも得べからぬうへなき位となりては天のなせるさちといふべければまた雪の中より咲出る花の如くぞ侍らましわが國のある樣また御論のごとくなるべし且おほんたから柳のごとくなびきつたへ來てまれ〳〵風雪のあらましきをりあるにもひたすらにをれうせず終に同しおほん筋になびきまつろふめるは誠に人の國にても君子國とほむる物なりけり前に申のこし侍る毛詩を僕ひが心におもひ侍る樣は凡上古の詩はをりにつけつゝおもへるこゝろざしをいひ出せしかば實情ならぬはなかるべしさてこれに器音を加へて人の樂しみもてあそびとせりたゞに樂みもてあそびといふは何ぞや喪あるときは禁ずればなりさて君子のもてあそぶには其音をえらむべしさかして後祭祀に用ることはいますが如く鬼神を樂ましめまつるに且其祖功を稱せるを先とす故に是にはいよ〳〵音をも詞をもえらむべし又君子もおほかたの時にはかの國風のさま〴〵なるをも用ふべしいかにとなればおのづから用ある事なればなり用あるとは君子政をなし給ふに人情をしらではなしがたし大かたのやんごとなき人是にわたり給ひがたし況や上一人の御事をや國風人情のさま〴〵なるも鳥獸草木の名もしらるゝ物は詩なり又樂記の注に利欲を少くすといふしかのみならず理にいひつのれらんあらそひを和ぐるも詩にしくものなしまたみづからいひ出すのみならず或は賦し或は引て人の心を興し事の樣を徵せるなどかぎりなきことなりさて

宋儒にいたりて專ら理をもてこれをときひとへに勸善懲惡の爲とす凡理は天下の通理ながらはた理のみにて天下の治まるにあらず詩は人のまことをのべ出すにそのおもふごとくの實情みな理あらんやたゞ理は理にしてそれが上に堪がたきおもひをいふを和の語にわりなきねがひといふたとへば花を強てまち月をいたくをしむがごとくはかなきことすら時にふれてはさる事侍りまして身の存亡にかゝれらんことをやそのわりなき心をもたゞにいはゞたれかみなあはれとせん詞やさしく聲あはれにうたはんなん理の外にて人情の感ずるものなり故に三百篇に鄭衞を捨ず靜女桑中をも删給はざるならしそれが中に祖功を稱し且樂終り三老五更の樂語せるものは敎とし勸懲とす詩また風刺せる物なれば相次で勸懲の爲とならぬには侍らねども專と思へる注などは偏にて詩の用かへりてすくなく六藝各其旨ある事もわかちがたく三百篇も通せざるなり又上世詩を論せるは聲音のみなるを宋儒は詞をもていふ既に古調の傳らざればやむ事を得ず詞による歟故に上世用る心とはたがひの出來べきなり亦古注にはあまりに稱美してまことにも覺えられぬ事も侍り新注は理にかかはりてことになづむ故に不通說どもも多く詩の趣をそこなへり孟子荀子の善惡の論などの理をもておすも其おもひよりたる筋になづみていひつのれるものは外よりすき見すればいかにぞやおもはる、事も侍れば詩書は義の府といひけん樣にとる所のさまゞにてあながちに理をもちておすべからずとこそ覺え侍れ朱子の注の如きはいたらぬ心にて論ずべき事多かれど其詩句の論は用なければもだし侍り僕儒を學ぶ事なくしてひとへ心に先儒をたふとまぬ樣に申は罪多かなれど幸に詩の實情なるをいふ時だにとて思ふ心をのべ侍るも又たやすきやうにてかしこくなん

延享のもとつとしの十月

再奉答終

にひまなび

古への歌は調を專とせり、うたふ物なればなり、【歌の事をまづいふは我國ぶりなれば入るにたやすく且歌を得ざれば皇朝の學萬にかなはざればなり其よしは下にいふ】其調の大よそは、のどにも、あきらにも、さやにも、をくらにも、おのが玄し得たるまに〳〵なる物の、つらぬくに、高く直き心をもてす、且其高き中にみやびあり、直き中に雄々しき心はあるなり、【直きといふ中に邪にむかふと思ふ心の强く雄々しきと心に思ふ事をすさびいふとの三つありそは事に從ひてとるべし其中に古人は思ふ事ひがわざにても隱さず歌によめる此直きにぞ歌はあはれと覺ゆることあるなり】何ぞといへば、萬の物の父母なる天地は、春夏秋冬をなしぬ、そが中に生るゝものの、こをわかち得るからに、うたひいづる歌の調も玄かなり、又春と夏と交り、秋と冬とまじれるがごと、彼是をかねたるもありて、種々なれど、各それにつけつゝよろしき調はあるめり、玄かれば古への事を玄る上に、今其調の狀を見るに、大和國は丈夫國にして、古へは女もますらをに習へり、故に萬葉集の歌は、凡丈夫の手振なり、山背國はたをやめ國にして、丈夫もたをやめを習ひぬ、かれ古今歌集の歌は、專たをやめの姿なり、仍てかの古今歌集に、六人の歌を判るに、のどかにさやかなるを、姿を得たりとし、强くかたきを、鄙びたりといへるは、其國其時の姿を姿として、廣く古へを顧ざる物なり、物は四つの時のさま〳〵あるなるを、玄かのみ判たば、只春の長閑なるをのみとりて、夏冬をすて、たをやめぶりによりて、丈夫ずさみをいむに似たり、【歌の調てふ物はこゝにいふ如く樣々なれど各其かたきにつきてよきあしきあり凡を云はゞ共に打唱ふに滯なくて何となく心高く聞ゆるを專とす新學の程には調などには心もよらず一ふしある所にのみ目のつくものなり其ふしある所をばおきて何となくつゞけし心に心をよせて見よ古人はそこに心を用ひしなり此事を思ひて古歌を見ば久しからず思ひ得べし】抑上つ御代〳〵、其大和國に宮敷きまし、時は顯には建けき御威稜をもて、內には寬き和をなして、天の下をまつろへまし、からに、いや榮に榮えまし、民もひたぶるに上を貴みて、おのれも直く傳はれりしを、山背の國に遷しまし、ゆ、かしこき御威稜のやゝ劣りに劣り給ひ、民も彼につき是におもねりて、心邪に

なりゆきにしは、何ぞの故と思ふらむや、其ますらをの道を用ゐ給はず、手弱女の姿をうるはしむ國振となり、それが上に唐の國ぶり行はれて、民上をかしこまず、よこす心の出來し故ぞ、然れば、春の長閑に、夏のかしこく、秋のいちはやく、冬の潜まれる、種々なくては、萬たらはざるなり、古今歌集いでてよりは、やはらびたるを歌といふと覺えて、雄々しく強きをいやしとするは、甚じきひが事なり、是等の心を去らむには、萬葉集を常に見よ、且我歌もそれに似ばやと思ひて、年月によむほどに、其調も心も、心にそみぬべし、さるが中に萬葉は撰める卷は少なくて、多くは家々の歌集なれば、あしき歌あしき言もあり、【古の歌集てふにあだし人々の歌を專集めに其中にわがをも書き交へたり是を去らぬ人たとへば人麻呂の家集に出てふ歌を皆人麿の歌と思ひ誤りぬ其集の中に名を擧げぬ他人の歌にこそあれ】いで今模としまねばむには、よきをとるべし、其よきを撰むは難かれど、既にいへる調を思ひてとるべし、又本はいとめでたくて、末のあしきもあり、そは本を學びて末を捨つべし、【末を捨つとは其の如く短歌によみうつさぬをいふ其言短歌にはあしけれど長歌にはよろしきもあり又古言は歌にはよろしからぬあるも去りおくからに古意を明らむる事あり】是をよくとれるは、鎌倉のおほまうち君なり、其歌どもを多く見て思へ、【鎌倉公の家集には初と中と末とを交へ載たり其始なるはいふに足らず中頃の内にはとりとらぬわかちあるべし末に心を得給へるにこそ類なきはあれ】去かすがに、又古今歌集を見るべし、こは凡女の姿なる中に、よみ人去らえぬ歌には、奈良の朝の歌もあり、且そを後の言して唱へかへたるもあり、今の都なるも、始三嗣ばかりの御代は、萬いにしへの手振ありて、うたも半は古へをかねたり、よりて此集には、よみ人去らずてふにこそ勝れたる歌は多けれ、それより後なる中には、こまかに巧みて心深げなるを去るべし、もと撰める物といへど、古へにかへらむとする時は、などか更に撰のあらざらむ、かく心得たる後には、後撰、拾遺の歌集、古今六帖、古き物語ぶみらをも見よ、かくて立かへり、古事記、日本紀をよみ、續日本紀の宣命、延喜式の祝詞の卷などをよく見ば、歌のみかは、おのづから古きさまの文をもつゞらるべきなり、【萬葉をよみうつさむよしは後世古歌をとるべき事をいふ如きさくき定は皆用ゐずいかにも心にまかせてよみ移すべし其外後世いふ所のせき定ども

は皆古なき事なり心せばくては古の風雅に移りがたしされど又古は古の定ありて漫にいふ事にあらぬよしは古歌を年月に見る中にみづから知らるべし】

○女の歌はしも、古へはよろづの事丈夫にならはひしかば、萬葉の女歌は、男歌にいとも異ならず、そが中によく唱へ見れば、おのづからやはらびたる事あるは、もとより去かあるべきなり、（大伴坂上郎女のを、しく石川郎女の艶びやかなるはおきて總てをいふ）男は荒魂、女は和魂を得て生るればなり、去かはあれど此國の女は、他國に異なれば、其高く直き心を萬葉に得て、艶へる姿を、古今歌集の如くよむ時は、まことに女のよろしき歌とすべし、其姿も、又今の京の始つ方なるによるべきなり、かくて古今歌集をのみまねぶ人あれど、彼には心さし巧にすぎたる多ければ、下れる世人のくせにて、其言せばく巧めるに心よりて、高く直き大和魂を忘るめり、よりてそれが下に降ちに降ちつゝ、終に心くるほしく、言さくき手ぶりとなむなりぬる、此あはひを思へ、たゞに古今歌集をまねべる人、今に至りて幾十人かありけむを、一人だにそれに似たる歌よみなければ、後にたちて學ぶはかひもなし、上より下さばなどか得ざらむ、こは大方の女の上をいへり、こゝに皇朝の古への、女の手振をいはむ、かけまくも畏き、伊邪那美の大御神は、男の御神と並びて、國つち萬の物を造り始め給ひ、後に事あるに及びては、よもつ軍を起して、男の御神に向ひてことわりをたてまし、天照大御神も、事ある時は、大御身に矢串をおばし、大御手に弓とりまし、丈夫なすをたけびをなして、あしき大神をやはし給ひ、平けき時は、凡のまがごとをば、見直し聞直しまして、遂に天つ日嗣の、千五百秋のみのりを定め給ひ、御孫命の御女木花之開耶姫の命は、うつ室に火を放ちて、明らけき心をあかし、五十狹茅天皇の皇后は、火のほのもえくる、稲城の内を出でまさずして、義を立て給ひ、息長足姫命は、三つのから國をしもまつろへ給ひ、廣野姫皇后は、御軍を助けまして、御功をたて給ひ、橘姫命は、皇子にかはりて、海に入り、山邊皇女の御夫と同じく罪なはれ給ひしなど、又平けき時、幡梭皇后は、善言もて健き天皇の御怒を和し、重日足姫天皇は、御自祈りて雨をふらせ給ひしなど、かくやむごとなきにすら、たてたる御勢去かおはし、かば、臣民には、夫は雄軍をひきゐれば、妻は雌軍を率ゐて敵に向ひ、女にして其國を去りて、人の犯を入れ

ず、此外ことわりをたて、赤き心をあらはせしなど數へもあへむや、末の世にも、女にして家をたて、ひなつ女にして仇を討しなど、少なからず、かゝれば此大和魂は、女も何かおとれるや、ましてものゝふといはるゝものゝ妻、常に忘るまじき事なり、皇朝の古へ萬に母を本として貴めり、兒をひたすより始めて、其功父にまされればなり、【から國も上つ世はこゝに均しかりしを周といふ代より萬を強ひ改めて父を尊しとすこは人の理といふものにて天地の心にあらず故に理は理の如くして世の治らざるなり】さかありて、平けき時には、にきびて事をとるを專とすべく、天地の父母の、なしのまに〳〵、女は姿のあらびぬものにしあれば、いひ出づる言葉も和びたる事、などかなからむ、さはあれど、後の世には、すべてぬえ草のさなひうらぶるを、わざのごと思ひ誤り、それが上も、所せくならはするまゝに、はてはくね〳〵しくさへ成ゆきぬるは、本の大和魂を我も忘れゆきしなり、今萬葉集を學びて、其心をさり古今歌集をかねて其姿を得ば、誰かいしくなきものとせむ、古への歌は萬の人の眞心なり、其眞心をいふ故由をさる時は、何かさく物あらむ、敎の道もあれど、常にしも習はしがたければ、時過ぎて忘れやすきを、歌は暇ある時に、自らよむ物からに、敎へずして直く眞心になりぬめり、【歌を業の如く思へるは後の世のひが心得なり、歌はたとひたはれかましき男女の相聞を聞きても聞く人の心に深くあはれとは思はれてみづからのたはれ心は起らず是ぞ唐國の面をよくして內きたなきとは異にしてうらうへなき皇朝の古のならはしなればなり】是ぞ此かしこき神皇の道なりける、

○後の世人、萬葉をかつ〳〵見て、えも心得ぬまゝに、こはふりにしものにして、今にかなはずといふよ、やまとも唐も、古へこそ萬によろしければ、古事をこそ尊めれ、何處にか古へをすてゝ、下れる世ぶりにつけてふ敎のあらむや、そはおのれがえ知らぬ事を、かざらむとて、うつけ人を欺くなり、凡古き史によりて、古き代々はさるれど、其史には、古の事或はもれ、或は傳へ違ひ、或は書く人の補ひ、或はから文の體に書きしかば、古への言をまどはれなどして、ひたぶるにうけ難きことあるを、古歌てふもの、ことを、よく正し唱ふる時は、千年前なる、黑人、人麿など、目のあたりにありて、よめるを聞くに均しくて、古への直に さらるゝものは古への歌なり、且古へ人の歌は、時に さたがひて、思ふ事を隱さずよめれば、其人々の心あらはなり、さる歌を、いくちゞも常に唱ふるまゝに、古への心はさかなりてふ事を、よく さりえらる、且言もから文ざまに書きし史などは、左も訓右もよまるゝ所多有を、歌はいさゝけの言も違ひては、歌をなさねば、かれを問ひ是を考へて、よく唱へ得る時は、古言定れり、然れば、古言をよく さるべきものも、古き歌なり、天の下には事多かれど、心と詞の外なし、此二つをよく さりて後こそ、上つ世々の人の上をもよく さるべく、古き史をも其言を誤らず、其意をさとりつべけれ、又後世の人、萬葉は歌なり、歌は女の弄ぶ戲の事ぞと思ひ誤れるまゝに、古歌を心得ず、古書を さらず、なまじひに唐書を見て、こゝの神代の事をいはむとするさかしら人多し、よりて其いふ事、虛理にして、皇朝の古への道に叶へるは惣てなし、【後世神代の事を さらまくする人は古歌古言を學ばず中々に唐ことを見學びて空言もてみだりなる考をなし又歌文を好む人も古の歌文を知らず流れ下れると家々に私せる歌ともを誠とする故に誤れること限なし又古の事を好む人々書の誠僞あることを知らで僞のふみにまどはされて誤る事限なし此意を深く思ひたらむ人こそ多からね】先古への歌をまねびて、古へ風の歌をよみ、次に古への文を學びて、古へ風の文をつらね、次に古事記をよく讀み、次に日本紀をよくよみ、續日本紀ゆ下御代つぎの文らをよみ、式、儀式など、或は諸の記錄をも見、（西宮、北山、江家次第等までに至る）かなに書けるものをも見て、古事古言の殘れるをとり、古への琴笛、衣の類、器などの事をも考へ、其外くさ〴〵の事どもは、右の史等を見思ふ間に さらるべし、【衣の類と器物はさせる學の方にあらねど今の世中見る物聞く物皆鄙しければ心の風流ゆかむよしなし故家の調度も古を好む時は必おのづからみやびかになれりまして衣の類はおのが着ずといへども其事を さる時は心ひなびざるなり是より前に古事記日本紀の神代の卷をもまた、び見つゝ其言をよくよみえて後に意をとくに至るを云ふなり惣の書を始より意を得むとする時は私の後世意となりぬ訓をよく〳〵 さりて後に古言に從ひて意をいふ時は古にかなへり後人は其本の言をば傍にして空に考へたる意を見る故にかなへる事なきなり】かく皇朝の古へを盡して後に、神代の事をばうかゞひつべし、さてこそ天地にあひて御代を治めませし、古への神皇の道をも知り得べきなれ、

○古言は必考へて解くべきなれど、是を解くこと甚かたし、先、五十音をよく考るべし、そは後世絶えて知る人なければ、其言のわかち、用ふるさまなど、我語意てふ物を、書きたるを見ておもへ、此五十音の事、他の國の悉曇韻經などいふをもて、皇朝の言の音をもいふ人あるは、皆我國を考らぬ故なり、【五十音の延約或は喉音舌音などの事は知らぬ人なし只皇朝の言にもちゐて種々の例ある事をば強て知る人なきなり其音の別のみいひて用ひし例を知らでは其言に用なしそを知らぬ人漫に唐天竺のみをもて其言をもいひはかる故にたがふ事多きなり】我國の言は、いと異なりと思ひえむことは、古へ風の歌文などを心得む人考るべし、【いさ、か古言を好めばやがて古言を解なむとしていまだしき心もて考へいふ人あり其據など右にも左にもあるものにて我は考へ得つと思ふべけれど皆ひがごとのみぞありける仍りて強ひて解く事を恐れて學びもて後に事にふれて思ひよれる事をいふ時は當る事あるべしまづは百を解て一つ二つのみならではかなはずと思ひたれ】さて古への假字をよく覺えよ、假字は言の本にて、假字によりて言を解くものなれば、是をさだかに覺ゆるを專のこと、す、其假字は、古事記、日本紀、萬葉、其外の古の書どもよりして、和名抄まで皆同じければ、それらをよく見る時は定まれり、【和名抄は誤れる事多けれど假字は誤らざるなり惣て萬葉などにも今本には疑はしき假字もあれど古例をおして見ればもはら後世書手の誤なり】それ少しすぎて、拾遺歌集などには誤あり、其頃より皇朝の學のふつに絶えし故なり、後世人、他國の字音にいへることをもて、皇朝の假字を思へるは、すべて誤れり、【皇朝は言葉を本にて意はそれにつけて別つ例なり唐國は音を本にて字を一つ一つに作りて目考るしとせり然れば事の本甚異なりかくて皇朝には唐文字を借りて其言の考るしとするのみなり天竺は天竺唐は唐大和は大和各別なりと思ひてあれ其中にこゝと天竺にはうはべ似たる如き事もあれど深く心うる時は均しからず】

○令律をも學ぶべし、こは唐國の唐の令律を以て、皇朝のならはしを兼ねてたてられしものにて、專は我國の意にあらずといへども、大寶令は近江大津朝の令を本とせられしと聞ゆれば、是も久しき世の定なり、考らでは中頃の世を意得るよしなし、かく嚴に細かに、唐風を用ゐられしより、おもてはよろしきに似て、うらあしくなり

ぬ、よりて遂に大御威稜もうすく成ま考しなり、上つ代を考たふもの、同じく是をよしとはせねど、はた後の史などを見むに、此學せではあるべからず、

○後の世に、歌の體、十を擧げたるもの、中に、器量體とて、古今歌集にある、「梅の花それとも見えず久かたの天ぎる雪のなべてふれゝば、てふを擧げつるは、其頃までも尙歌の傳ばかりは殘りけり、こは奈良人の歌にて、人麿の歌の心も調もえたる歌なり、【此歌の古注に人麿がなりといへるはひが事なりされど人麿の歌の體には侍り後世の集ともに人麿の歌とて入りしは多くはひが事なり此人は只萬葉にてみるべし且人麿は長歌を專とし赤人は短歌を得たるなりこゝにいふも是によれり春かけてふ言は用ゐ誤られしかどこゝには一首の心と調とを云花山の御撰なといふは甚しきひがごとぞよく見ば必考からぬこと見ゆべし】此いさゝか細なる事をいはずして調の高きに、丈夫の高く廣き心あらはれたり、同じ集におもしろく聞ゆる梅の歌多かるを、そは小き心をひそめて、作れるものなる事を、是をも悟りて、奈良の朝までの人の心の高きを思へ、鎌倉の大まうち君の歌をもむかへ見よ、人麿の歌は、勢はみ空ゆく龍の如く、言は、海潮の涌くが如し、調は、葛城の襲津彦眞弓をひきならさむが如し、赤人の歌の詞は、吉野川なすさやに、心は富士のねのごと、よそりなく高し、人麿とは、天地の違あれど、共に古のすぐれたる歌とせり、これより前に、此人人より勝れたる言もあれど、詠み人の名の聞えぬは、ここにいはず、

○鎌倉の大まうち君の歌は、今の京この方の一人なり、其體古へにかなひたれば、たま〳〵古今歌集の言を、交へ用ゐ給ひしすら、似つかず聞ゆるにつけて、本の心も調も、勝れて高き事考られたり、さて此公、「箱根路を我こえくれば、「もの、ふの矢並つくろふなどの、世に勝れたる多かるは、更にもいはず、こともなく聞ゆるに、「此ねぬる朝けの風に薫るなり軒端の梅の春の初花、「玉もかる井手の柵(シガラミ)はるかけて咲くや河邊の山吹の花、などの本のいひなし、且常あることをわざといはれつる、末の調の心高きを見よ、又梅開厭雨てふ題にて、「我宿の梅の花さけり春雨はいたくな降りそちらまくもをし、とよまれしを思ふに、其頃京に歌よむ人、みなさき心もて巧にくるしくぞ在らむ、いで古へ風よみてみせむよとて、天の下の歌よみを見下したる心もおのづから見ゆ、此

雄々しき心をもたらぬ人、少しもさきだてる人の巧なる歌を聞きては、そむき難く離れ得ぬは、いしくなき心なる事を思へ、世の常のわざこそあれ、學の道に上下はなし、只よき人の、よしとよく見て、よしといはむを待つべけれど、後世さる人しあらねば、古へ人を友とするに玄く事なし、なま〳〵なる人のほめむに、よきはなしと思へ、

○古今歌集は、專は女ぶりなれど、さすがに古歌も多かれば、上にいへる如き、心高く雄々しきも交り、總ての撰も、さる方に心高きなり、後撰集は、古今集に劣れること、同じ日に論ふべくもあらず、古歌をとりしにも、誤れる多し、拾遺集は、何處のかたへの人か、書き集めつらむ、殊に萬葉を讀み誤り、古きよみ人を違へなどせし事、數へがたし、【此二集に人丸などいひて歌あれと多くは讀み誤りて入たり人丸の歌は萬葉にて見よ】されど此二集に、今京此方、延喜の頃までの後につけて、よき歌もあれば、たま〳〵は見るべし、古今六帖、はた萬葉をよみ誤れる多かれど、後の歌にやさしげなるもあり、題などは六帖ぞよき、中に雜々の思てふ條に書ける題の言葉ども、面玄ろし、後世人は、文字題にてよむからに、歌の姿かたくなしくひくし、同じ言をも、假字に書きたる時は、よむ歌もおのづからゆたかにみやびて出でくめり、又端の詞は、古今歌集、いと〳〵心して書きしものなり、其詞と歌と、相てらして、ことわりあるさまなど、よく見心えて、扨詞おもしろく、短かくて、玄かもことわり聞ゆるを、旨とすべし、同じ事をも、書きながせば、拙く長きを、言を上下にして書き、又は歌にある事を、詞には略きなどせし味を心えよ、是も文の一つなり、【萬葉の如く端詞を文章にてかゝば歌も玄か書くべし歌をば後世ぶりの草に書きて題のみ文章の意にかくこと見くるし夫萬葉に詠〻天詠〻花などかけるは歌によりて後に書きし物なり後には文章の題を設けてよむからに古の雅意は失せて細かに狹き俗情をせめてよむなればいよ〳〵いやしくなりぬ止む事なくば同じ事も假字にてかきたれされども心に思ふこと目に見耳にきくものは皆歌の題となりぬ其時歌をばよみて後に其ありし事を端に書く時は歌おのづからゆたかなり其事を先かきて後歌よむ事は古人はなかりき】凡文は、事の多きをばつゞめていひとり、事もなきをば、かざり廣めぬる二つにあり、此つゞめかざる事、上つ代ぞ妙なる、中つ代には劣れり、

下つ代には惣てひがことあり、此境を心得べし、端の詞には、飾をなさず、いかにつゞめても、玄かも理(コトハリ)ある程を、はかりて書くものなり、仍りてうち見るには、事もなげなれど、いと書きがたきものぞ、

○長歌こそ多くつゞけならふべきなれ、こは古事記、日本紀にも多かれど、種々の體をあげたるは、萬葉なり、其くさ〴〵を見て、まねぶべし、【古今歌集の長歌はいと弱くして作りさまもいまたしければとらずまして其後なるはいふにも足らず】短歌は只心高く、調ゆたけきを貴めば、言も撰ばではかなはず、長歌は樣々なる中に、強く、古く、雅びたるをよしとす、よりて言も、それにつけたる用ひ、短歌には、鄙びて聞ゆるも是に用ひて、中々に古く面白きあり、さて古へは、思ふ事多き時は、長歌をよめり、又短歌も數多くいで、心をはたせしもあり、後の人多くの事を、短歌一つにいひ入るめれば、ちいさき袋に、物多くこめたらむ如くして、心いやしく、玄らべ歌の如くもあらずなりゆきぬ、

○序歌てふ體をも、よみ習ふべし、本にくさ〴〵の事をあげ、末には只一つ心をいふなれば、卽古への意なり、旋頭歌の句は、五七七を本とし、五七七を末とする事、萬葉に、百あまりあるをもて玄れ、古今集にて今唱ふるは、ひがことぞ、其歌は「遠方人に、物まうす我」を本とし、「其そこに云云」を末とす、「見れどあかぬはな」といふまでを本、「まひなしに云々」を末とすると、右に同じ、

○文には殊に男女の體あり、先、男の雅文かく事、古き學なくてはかなはず、それも古事記、日本紀、萬葉、宣命、祝詞、其外古き書をよむ事、歌にいへるに異ならず、其中に、古事記は全く皇朝の文なり、日本紀も本は玄かあるを、多くの古書をもて奈良朝にて撰びぬる時、唐ざまに字を植ゑしかば、古へのよみは失へり、今は三つが一つばかりぞ殘りぬる。其外は、後人字を追ひてよめる物なれば、古書のみにあらず、顯神明憑談を、歌牟鵝可梨、また美飲喫哉を、干魔羅儛、烏野羅甫柯夏佞也などの如くよまでは、古へのよみに非ずと玄るべし、【斯の如く古言は今と異にて思ひとり難きが如くなれど萬葉をよく知りて古言の意を得る時は思の外によみも心得もせらるゝなり學ばずして今はえ玄るべからぬ事と思へるはおのが賤しき心を心として物をうとむなり】古への宣命、祝詞などは、全古への文なり、其體を見て何事にもうつし書くべし、又萬葉の長歌をむかへて、古言を知り、

且人麿其外の長歌の巧、或はのべつゞめたる言の體など、文に異ならず、下りては、伊勢物語など、假字文の中に、古文に用うべき言を、廣く撰てとるべし、是等を漫りにとらば、古今まじはりて、拙くいやしくなりなむ、それはたとりなしによりて、古文になれることもあれど、そは得て後みづから考る事なり、又田舍人の言にこそ古言は殘りたれ、よく撰みなば、文の半ばかりは、此言にていはるべし、後世は源氏物語の言などをもて、書く人あれど、かれは女文なり、物語文なり、古き雅文には叶はず、此別ちをよく思ひ考れ、【物語は物語の體にて雅文にとるべき言はいと稀なり】古今歌集の序は、皇朝の歌の古意をば、深くもたどらず、本の意唐の四六の文體と、凡の唐文の意をかり、言は其頃の歌によみならへる、女ぶりの言を用ゐて書きしものにて、後につけては、めでたく書きしところもあり、又ひがことも數多なり、よりてこは古へ文のさまにはあらず、同じ人のかきつれど、土佐日記は、かの序よりまされり、かれは强ひてかき、是はあることをたゞに書きしなればなり、抑文には、いとくさ〴〵の體あり、古事記より祝詞までをよく見ば、みづから考らるべし、女の文は、是もきとせしこと書かむには、さる方に古き文もて、女ぶりに書きぬべし、其いりたゝむ始には、女は源氏物語などをまねばゝ、おのづから書き得べし、されど、是にとゞまれりと思ふ事なかれ、後に古きさまにのぼるべき心考らひしてまねばゞ、終に宜しくなり行なむ、遠き國の人の、此道考たふなれば、考らせまく思へど、つばらなるよしは、えつくさず、此心をもて文どもを見、歌文をもなして、さて問はむまに〳〵こたへなば、おもひいたる人もありなむとてなり、すべて古き文は、考るべしてあり、そを心えむ事は、みづからする事と、先は思ひをり、考かはあれど、世中は道考るべてふ事も、あるならひにて、ひとりゆき難きを思ひひらかむとて、問ふと心うべし、さては、文をよむに心からならずして、至りやすし、【後世人は其時の師の傳をのみ守りて物をよく古にたくらべずかゝる人は心を人に預くるが如しそも新學の間こそあれすこし物心えて後はみづからの心をおこして古言にて理りをたて後みだりにかたくなにせずさるべき人にもとひて善惡を正すべし考かする事あまたになりてこそみづからよき事をもいひいて思ひもうべきなれ】

明和二年七月十六日に

賀茂眞淵

考るしぬ

物みなは新しきよしといへるを學の道こそふりぬるよきとて吾師賀茂の大人の教へさとし給へる書の卷卷多かるが中ににひまなびといふ一とぢのあなるを難波人の世に廣くなしおきねと催さるゝによりてこたみ板に彫らしむることにはなりにたり誠やこの學のみ盛にさかえて是ばかりの物すら人みなのもてはやせる事となりぬるはよろこばしく嬉しくて

さく花のめでのさかりとふることは
ひらけみちぬよ時のゆければ

從四位下　荒木田神主久老

にひまなび終

歌意考

あはれ〳〵、上つ代には、人の心ひたぶるに、直くなむありける、心しひたぶるなれば、なすわざも少なく、事し少なければ、いふ言の葉も、さはならざりけり、さかありて、心に思ふ事ある時は、言にあげて歌ふ、こを歌といふめり、かく歌ふも、ひたぶるに一つ心にうたひ、言葉もなほき常の詞もてつゞくれば、續くともおもはでつゞき、と、のふともなくて、調はりけり、かく云つ、、歌はたゞ、一つ心をいひいづるものにしありければ、古へは、こと、詠むてふ人も、よまぬてふ人さへあらざりき、遠つ神あが、

すめらぎの、おほみ繼々、限なく、千いほ代を云ろしをすあまりには、言佐敵ぐから、日の入る國人の、心詞しも、こきませに來まじはりつ、、物さはにのみ、なりもてゆければ、こ、に直かりつる人の心も、くま出る風の、よこしまにわたり、いふ言の葉も、ちまたの塵のみだれゆきて、數云らず、くさ〴〵になむなりにたる、故いと末の世となりにては、歌の心詞も、常の心詞しも、異なるものとなりて、歌としいへば、然るべき心をまげ、言葉をもとめとり、ふりぬる跡をおひて、我心を心ともせず、よむなりけり、それはた塵のすわれる鏡の、影のくもらぬなく、芥にまじれる花の、云べのけがしからぬあらざるが如、さしも曇り穢れにし後の人の心もて、とめ撰びて、いひつゞけしが、きたなからじやは、云からば打なきて、やみぬべきにやといふに、云かはあらず、抑いしこり登邊の作れる鏡のかたも、五十猛のみことの生せし木の花も、今しも傳はれるをば、忘らえおき、塵芥にもなるればなれて、けがしとも云らずありつつ、思ひおこす心のなきになむありける、いでや天地のかはらふことなきまに〳〵、鳥もけものも草も木も、いにしへのごとならぬしなきを思へば、人のかぎりしもなぞや、いにしへ今とことなるべき、人てふものは、うたてさかしら心もて、かたみにあらそふ程に、おのづからよこしまにならひきて、世中もうつらふめり、そを一度わろしと思はむ人、なぞやよき方に、うつろひかへらざらむ、云か心をおこして、いにしへの八咫鏡に、朝なさな向ひ、かげ高き千本の花に、ひとしくまじりつ、、そのかた其色に、似てしがもとこひつ、、歌をも文をもとりなして見よ、もとの身の、昔人に同じき人にしある

からは、云かならふ程に、心はとぎ出たる鏡なし、詞はやぶ原を過ぎて、くまなき山の花とこそなりなめ、萬の事の古へにかへらふをば、ぬしかはりゆく唐國にしもめづるてふを、同じ天つ日嗣云ろしをす、此み國にして、みたかき御世ぶりにかへらで、山川のくだれる、時をのみ盛なりし、すめ大みおやのすめろぎの定めまし、天雲のまもるべきや、歌はその時のすがたによりて、よむことぞなどいふものは、わたくしの心の甚しきにぞありける、かくしもくだちぬといへど、かしこきあが遠つ御神の國の手ぶりは、猶も云るくて、古しへを忍ぶる人も、はた少なからず、されども大空の高き世の文を見るに、高山のさかしく道もたえ、青海原のかしこくして奥かも云らず、春の月の中空の霞にへだて、秋の風のよその木の葉もふきまじへつらむと、おぼゆることあり、くだれる世人は、その霞にまよひてあらぬ方にいたり、或はことさへぐよその國の風にさそはれて、もとだちを忘るゝたぐひぞさはなる、こゝに古への歌こそ、千とせのさいつ人の、よめりける心詞も、月日と共に、またく變らで、花紅葉なす、昔今同じきものはあめれ、こむらさき名高く聞えたる、藤原、寧樂などのみやぶりに心をやりて、山がつの橡あやしの色を忘れつゝ、年月に我もよむ程こそあれ、おのづから我心肝にそみとほりなむ、さる時ぞ、いにしへ人の心なほく、詞みやびかに、いさゝかなるけがらはしき塵もゐず、高くはたをゝしき心ならひも、思ひとりぬべし、かくて後に、萬の古き文どもをも見むに、終には深き山をこえて里に出で、遠き海をわたりて國にいたらんが如く、世の中てふものは、物なく事なく、いたづらなる心をもさとらへ、まうけず、つくらず、云ひず、をしへず、天地にかなひて、まつりごちませしいにしへの安國の、やすらけき上つ大道の、神のみ代をも云り明らめてむものは、いにしへ人の歌なるかも、おのがよむ歌なるかも、おのれいと若かりける時、母とじの、前に古き人の書けるものどものあるが中に、かぐ山を「いにしへの、事は云らぬを、われみても、久しくなりぬ、あめの香具山、」子のもろこしへ行くを其は、「旅人の、やどりせむ野に、霜ふらば、吾子はぐくめ、あまの鶴群、」つまのいせのみゆきの大御供なるを、「長らふる、つまふく風の寒き夜に、わがせの君は、ひとりかぬらむ、」つくしよりのぼるとき女に別るとて、「ますらをと、思へるわれや、水ぐきの、水城のうへに、泪のごはむ、」題云ら

ず、「玄たにのみ、戀れば、くるし、紅の、末摘花の、色に出ぬべし、」ものがたり、「ある時は、ありのすさみに、語らはで、戀しきものと、別れてぞ玄る、」たび、「名ぐはしき、いなみの海の、おきつ波、千重にかくりぬ、やまと玄まねはは、」「あはぢの、ぬしまが崎の、濱風に、妹がむすびし、ひもふきかへす、」などいと多かり、こをうちよむに、刀自のたまへらく、近頃そこたちの、手ならふとて、いひあへる歌どもは、わがえよまぬおろかさには、何ぞの心なるらむもわかぬに、此いにしへなるは、さこそとは玄られて、心にも玄み、となふるにもやすらけく、みやびかに聞ゆるは、いかなるべきこと、か聞きつやと、おのれもこのとはするにつけては、げにと思はずしもあらねど、くだれる世ながら、名高き人たちのひねり出し給へるなるからは、さるよしこそあらめと思ひて、もだしをる程に、父のさしのぞきて、たれもさこそ思へ、いで物ならふ人は、いにしへにかべりつゝ、まねぶぞと、かしこき人たちも、教へおかれつれなどぞありし、俄に心ゆくとしもあらねど、うけたまはりぬとてさりにき、とてもかくても、其道に入り給はざりけるけにやあらむなど覺えて過にたれど、さすがに親の言なれば、まして身まかり給ひては、文み歌よむごとに思ひ出られて、古き萬のふみの心を、人にもとひ、おちなき心にも心をやりて見るに、おのづからいにしへこそと、誠に思ひなりつゝ、年月にさるかたになむ、入りたちたれ、玄かありて思へば、先にたちたる、さかしら人にあともはれて、遠くわろき道にまどひつる哉、玄らぬどちも、心靜にとめゆかば、中々によき道にもゆきなまし、歌よまぬ人こそ、なほき古しへ歌と、くるしげなる後のをしも、わいだめぬるものなれと、今ぞまよはし神の、はなれたらむ心地しける、

ものゝはじめ、わろく入りたちにしこそくるしけれ、萬よこしまにもならへば、心となるものにて、もとの大和魂を失へりければ、たま〳〵よき筋のことはきけども、なほく清き千代の古道には、行立がてになむある、こを譬へば、高き山にのぼるが如し、もと繁き山ぐちをおしわけて、木の根巖がねいゆきさぐくみ、汗も玄とゞに、いきも喘ぎつゝ、からくして峯にいたりぬ、かく至りては、仰ぎて向ひてし山々をも見くだしゆきて、見ぬ國の奥がも見明らめられつゝ、今こそ心の雲霧もはるけく、世にひろくくらからざめりとおぼゆ、さてしもあらぬは人の心にて、いでや雲風にもなどかのらざらむと思ひすまるれば、をどりがり、とびがり、ならはすに、あやしきわざしもならはゞ、ならひつとおぼえて、似なくほこらしく、獨ゐまひをしつゝ、經るなりけり、玄かある程に、ある時、ゆくりなく雲に飛ばむも、くだらずやはあらむ、風にのらむも、行方こそ極あなれ、あやしのわざやてふ心の出來ぬれば、いつとなくその高嶺をも下りまかりて、もとの麓にかへりぬめり、さて靜心になりては、あやしき心すさみにもありつる哉と、思ひなれば、萬ゆめのさめたらむ曉の如ぞおぼえける、此時に至りて、又ふるきふみを見、歌をもとなへこゝろみれば、かのあやしくすゝめるみだりわざはなくて、たゞこの麓へ歸り下りたる心にぞありける、玄かしてこそ、いにしへ人の心は、よく貴かりけるものと思ひ玄らえぬれ、かくてかけまくもかしこき、吾

皇神の道の、一の筋を崇むにつけて、千五百代もやすらに治れる、いにしへの心をも、心に深くえつべし、ついでには、言さへぐ國々の、上つ代のさまをよく玄れる人に向ふにも、なほき筋のたがはぬも多かりけり、然はあれど、かくする程に、殘の齡なくなりゆくこそあやなけれ、いかで若き時より、みづから心ざもを定めて、只古きふみ古き歌をとなへて、我もさるかたによみもかきもせよ、身もいたづかで、ならひ得つべし、思ひ得つべし、萬葉集は、今二十卷あめれど、かの橘の諸兄のおほまうちぎみの撰び給ひけむは、たゞ一つの卷、二つの卷こそ、定かにそれと見ゆれ、それはた字の違ひ、よみのあやまれるなむ多き、又十まり一つ二つ三つ四つの卷も、右につぎて、えらび給へるにやとおぼしきことあり、何ぞといはゞ、一の卷二の卷は、凡よみ人玄られて、且宮ぶりなり、十一、十二、十三は、皆よめる人玄らえぬ古き歌の、はた都人のなり、是を古歌集ともいへることあれば、こと人の集めつらむとも思へど、猶一つ二つの卷の、よみ人玄らえしのみを、撰むべくもあらずと思ふことあり、さらば十三と有るこそ、いと古き歌にて、古しへのみやびごと玄るく、はた長き歌多ければ、是を三の卷とし、十一、十二を四五とし、さて十四は東國にて、多くの國ぶりなり、から國のいにしへの歌にも、國ぶりを集めしにもより、もとよりも歌は人の心をのぶるものにて、それにつけて、いとやむごとなきあたりに、をす國人の心をも玄らするものなれば、なぞや大宮風のみをいは

む、か、るからに、あづま歌をも、末につけて、撰びつべし、今の二十の卷なるあづま歌は、大伴の家持ぬしのとりあつめしもの、この十四の卷なるは、それより古きあづま歌にて、かならず上につゞきて、撰びそへられしものと見ゆ、又三の卷よりは、多くは家持ぬしの歌集(ウタヅシ)なり、五は山上憶良の集、七と十とはことのさまひとしくて、又たれその人の家に書きつめしもの、かくさまゞ〳〵なれば、よくえらびと、のへたる卷は少なし、よりてたはれたるも、はたよく本末のと、のほらぬも、又本はよろしくて末の詞のわろきもあり、玄かれば今かたとして取らんには、更にえらびてとるべし、そのえらび、はたかたければ、誰かは是にあたらむ、たゞ詞のとゞこほらず、ことわり明らけく、みやびてやさしとおぼゆる心詞なるをとるべし、少しも聞にく、くるしげなるをば、まづはあしとおもひたれ、四千(ヨチヂ)まり三百(モ)ばかりの歌なるが中に、そのなだらかなるをのみとらむも少なからぬなり、この事をよく心得ずて、二十卷共にみな同じと思ひ、萬葉風とて、後にかなはずなどいふなり、右の如く心得て、玄かもと、のひたる姿心をよくとりたるは、鎌倉の大まうち君なり、ことの中にも、はじめと中と末と見ゆ、末によくとり得られたるをもて思ひ合すべし、されど女の歌には心すべし、古今歌集の中に、よみ人玄らずてふ歌こそ、萬葉につゞきたる、奈良人より、今の京の始までのあり、これをかの延喜の頃の歌と、よくとなへくらべ見るに、かれはことひろく、心みやびかにゆたけくして、萬葉につげるもの、、玄かもなだらかにほひやかなれば、まことに女の歌とすべし、いにしへは、ますらをは、たけくを、しきをむねとすれば、歌も玄かり、さるを古今歌集の頃となりては、男も女ぶりによみしかば、男女のわかちなくなりぬ、さらば女は、たゞ古今歌集にてたりなむといふべけれど、そは今少しくだち行きたる世にて人の心に巧(タクミ)おほく、ことにまことはうせて、歌をわざとしたれば、おのづからよろしからず、心にむづかしきことあり、いにしへ人の直くして心高くみやびたるを、萬葉に得て、後に古今歌集へ下りてまねぶべし、此ことわりを忘れて、代々の人、古今歌集を事のもととしてまねぶからに、一人として古今歌集に似たる歌よみ得し人も聞えず、はたその古今歌集のこゝろをも、深くきとれる人なし、物は末より上を見れば、雲霞隔たりて明らかならず、其上へのぼらむはしをだに得ば、いち

はやく高くのぼりて、上を明らめて、後に末を見よ、既にいひし如く、高山より世間を見わたさむ如く、一目に見ゆべし、もの、こゝろも、下なる人、上なる人の心ははかりがたく、上なる人、下の人の心ははかりやすきが如し、よりてまなびは、上より下すをよしとすること、から國人も玄かいへりき、

明和のはじめつかた賀茂の眞淵が、老の筆にまかせてかけるなり、

此一冊は師の自の手してかゝれしを寫しおきつるなりある人のもたるは初めは是に同じくて末に事多くそはりて紙のひらも多くいと異なり今熟考見るに其異なる條々は「にひ學」にいはれしおもむきにいかばかりも違はねば後にのぞかれしものなるべし故その異本は捨てゝこゝにあげず

高山に登りて短山を見る時は峯のたをり谷の隈々も見明らむべく短山より高山を見放けむにはおほゝしくまさやかならじをや爰に我師縣居の大人の五の意とて古こと學をあならひ給へる文ありそれが中なるこの歌の意は草案のまにま傳へてあかぬ心地すめれどいにしへの歌の直くあつきと後の歌のせばく苦しきとのけぢめをあげつらひひたぶるに古へによるべき由を諭しおかれしは高きに昇らむ山口とむる桑ともなるべきを近き年頃この學する徒も歌は後をよしとすとふ世にへつらへる敎にひかされて古風はいよいよすたれ行くがうれはしくあたらしくて猶あやにくに師の敎を世に知らせまほしくて此一冊を板に彫せることにはなりにたり

寛政十二年ふみ月

従四位下　荒木田神主久老

歌意考終

語意考序

いでや世にはまさなきもの、ありて何がしの書たるくれがしのあらはしたるとよき人の名をしぬすまひて人あざむくいつはりぶみの多かるを此語意といふ書はしもときごとのよきあしきは見む人の心なればいか、あらむ縣居老翁のなることはさだかなる物ぞよ此をぢはわがまなびのおや此ふみは五の意と五ものせられたる一になも有ける年ごろはうつしまきにて傳はれりけるをみさとの書あき人西むらの何がしはかの家にこひえて此ころ板にゑりてすりまきになしたるいかでおのがはしがきをら一くだりくはへてとこひねがまにまかきてあたふかくいふは

本居宣長

いづこを波かとも玄らえぬ大うみの原をこぐふねも先つふな人の傳へのまに〳〵まかぢとるからにおもふみなとにはつといへりあがすめらみ國の古ことを解なきある傳へをうしなひしゆあらしま風にあへるふねの行方も玄らずなんなりにし玄か有中に山代の稲荷はふりが家に傳へし百たらずいつらのこゑのあといさ、か有をとりて荷田東萬呂のうし千よろづの古言をか、なへるによりて世人のいまたこ、ろ得ざりしことを得てこととふ人に傳へしをおのれもいさ、けばかり聞つこをたぎしとして終にいよ、玄ほの八百道行まどはさらんことを加へんとす猶をちなきかこはしも思ひかねがたきことさはなりこれがうへをまた〳〵せんことはすみのえの大神のさち〳〵

明和六年二月　　加茂眞淵か玄るす

語意考

ひとつ

これの日いづる國はいつらのこゑのまに〳〵ことをなしてよろづの事をくちづからいひ傳へるくになりそれの日さかる國はよろづの事にかたを書て玄るしとする國なりかれの日のいる國はいつらばかりのこゑにかたを書てよろづの事にわたし用る國なり玄かあればこの國にのみかたを用ざるを疑ふ人あるはいまだ玄かりけりなぞといはゞ日さかる國人は巧みなることを好むより言もおのづから一こゑのうちに多きことわりのこもれゝばかたなくばことゆかじされども千よろづの音にかたを作れるはうたてあり日の入國はこまやかなる思ひかねを好むからにことも音も隨てさはなればこもかたを用うめりされどもたゞいつらばかりの音のかたもてよろづにうつしやるべくせしはこまやけく思ひ兼たる也【天竺にはたとへば加行のみにも加、我、伎也、加牟、我牟、伎也牟、の六つ有て合て三十音也次にかくの如くの音を合せれば甚多し此國には淸音五十の外に濁音二十有のみにて甚言少し其少きを以て千萬の言にたらはぬ事なきは妙ならずや】これの日出る國はしも人の心なほかれば事少く言も玄たがひてすくなし事も言も少なかれば惑ふとなく忘る、時なし故天つちのおのづからなるいつらの音のみにしてたれりなそも人の作れるかたを待てものをなさめや玄かあるを此いつらの音をつらねいふは日の入國にならへりといふ人有こそうこなれ此國の古しへ人こと、はざらんやことふは天地のち、は、の敎なりかれ玄らす此いつらの音もあるめり且玄か思ふ人は時代をも思はずおのが國のふることをも玄らで他國の事をなま〳〵に聞ていへるなりかの日の入國にならひしは小治田の宮に始りてうつしき人くさならふ後の世なりそれゆ前日放る國の事の成りし輕島の宮ゆ上つ代こそものら神ならひてふとのりとごとうたへるうた打いへることばもみさかりに此いつらのこゑなりけるをおきて人の心うつろひてことばもつたなく成にし後もていふべきかはなほ上つ代の事をば玄らべぬ人のためにいはんむかしべ人日の入國にい行てそこの音そこの字を傳へこし事をはやき時に解玄るせしふみの有を見今もそを傳へ玄れりちふ人に問さくるに堅なる音のおこれることたてよこの音の通ふ事らいさ、かの事をいふのみなりそも〳〵此國の上つ代より用來りて定め有

ことばの分ちは横の音にこそあれ其一つはことはじむる（言初）こゑ（音）二つはことうごかぬこゑ（言體）三つはこと動くこゑ（言用）四つはことおふする（令言）こゑ五つはことたすくる（助言）こゑなりこを分ちゑる時こそこゝの言は明らかなれゑかあれば是ぞ此ことばの國の天地（アメツチ）の神祖（カミロギ）の教へ給ひしことにして他國（ヒトクニ）にはあらぬ言のためしなることを知べし【後より考當れば其通音轉音延音約言さま〳〵にて中には甚むつかしく通はしたるもあれば其本はおのづからゑかいひしものなり是卽此國の天地の言のかなふなれば人の國の事を借しにあらぬ事をゑるべしその通音らの數々の事は下につぶさにするを見よ】かゝれば此いつらの音をあつめなせしもうつしき人草ならふ中つ代のわざならずいともたふとき神ならふ代に天御孫命（アメミマノミコト）の御代の千五百代にもかはらぬことばの國のもとをゑめさへ賜ひしものになもある故（カレ）いにしへより言靈の幸（サチ）いふ國（コトタマ）ととなふなり

ふたつ

日放國日の入國はたゞ音もていひ此國は言を專らとして音は次とす【我國に音と云は字音の事にあらず言に平上去の三のこゑ有をいふ】そをいかなりといふにわが國に生る、兒（コ）あ、の音を出せるゆいくばくもへずして言を聞得二とせばかりのほどにはものいふめりさてその言を國ところのまに〳〵ならひて遂に其地（クニ）の音をなせり故（カレ）音は言より末とするなり是ぞ是言の國のゑるしなりける【こは始終音もていふ國の事にあらず此ことばの國にていふなり】然るを今の世人から字の音をなま〳〵に聞ならひてそを以てこゝの言をも音をもこゝろ得んとすればあらぬ事と成ぬ此國上つ代はもとよりにてかのから國の字を借てものを書ゑるす時と成にても其字の音にかゝはらぬ事は古事記に字比地邇上（ツヒチニノカミ）神次妹須比地邇去（イモスヒヂニノカミ）神と有て始は上聲（ノボルコエ）を注（シルシ）次は去聲を注（サルシ）したれどかける字をば異にせざり又阿那邇夜志愛上（アナニヤシエテ）袁登古（ヲトコ）袁ちふ袁登古の袁は去聲なるをこゝには上聲に唱ふれども字はことにせず此外言便によりて音はことになる多かれど本の言の假字（カナ）をかふることなきは紀などの訓（シル）を注せし字又常いふ言を以ても思ひしれたとへば加茂も平（タヒラケキコエヤマ）聲也萬も平聲なり然るに加茂山といふ時は去聲に唱ふれど字はかへざるが如し又萬葉に載し東歌（アヅマウタ）は皆東音（アヅマコエ）にてよみ出せしを其かける假字は京歌（ヒト）にかくにたがふことなし他國にても一字の音と連聲（フラスル）はことなれど音に依て字はかへざりと見ゆるを只その一字の音を守てこゝの假字を誤る人あるはいふにもたらず古事

記日本紀萬葉その外の古書の假字均しくして新撰字鏡和名抄までに惣てことならずその和名抄より後は漸にひがこと出來て遂にみだりに成にしを古書（キ）をかへり見る人なければ正す人もなし又はじめてから字の書（フミ）のこゝにわたりしは後に有とはことなりしにて有べし【此國にはから字はかりの物なれば心をも用ゐずしてひとしく傳へてかへざるなり】その初めなるをばこゝには用初てより後なるとはことなりけんすべてさる類多ければなりからにては字の音などはその書ことに異にして定めがたきをこゝには初めなるまゝに傳へてかへざるこそよけれかくてそのから字の始て成りし輕島明宮ゆ和名抄を書し承平の御時までは四十六の御代にて六百七十年ばかりなり其間世の中の事はいさゝか移りかはる事有ども猶上ッ代を傳へて盛なる代に皆同じ音同じ假字なるからは後の代に萬づの事失はれて古意古言（キ）も知ぬ人のいへるを用ゐんものかはたゞにふるき世ふるきふみふるきあとによりて心得べからずや【此國には其假字一度定まりしなりそのかはらぬにつけて言の意もひとしくして明らけし此言の意上つ代々にかはらぬ事を解得ざる人から字の意による故にみだりになりぬ其言いかに轉たるも猶かなの本に依て明らめらる、事の妙なる味をふかく心得る人の少なき】

みつ

言の音の事は右にいへる如く此國にては言書て後に音は分るめれど是また人のなせるものならずそのつちの音なりけりかくてうちつ國は音正しくして明らけし四方の國はおの〳〵ことにしてかけたる事多し知かはあれどその音の正しき國人と音わろき國人と相語ふ時も言し違はざれば互に聞えてたらはぬ事なくたゞその言を誤る時は聞えずとせり故音はいかにも有べく猶正しきをよしとすとも四方の國人はえよくいはねばかひなしそも君が御たからにして同じく仕へまつるからは音などいさゝかなる事につけていやしむべからずかゝれば音はいふにたらぬ事なり知かはあれども古きふみはやまとの京に出來しにてその音も知たがひて解しらずば有べからぬ事多かりたとへばかけまくもかしこかれと意計弘（オケヲ）計のみこは御はらからにて同じ大殿におはしませしに意（オ）と弘（ヲ）のこえ均しくはいかにまどはしからんさらば御名にもかくは申奉るべきやまぎれなく分れしものなりかゝれば、五十聯（イツラ）音の中の袁於衣惠以爲（ヲエイヰ）の音も意も明らかに別（コト）にしてかくあらでは此國の言をなさゞるが故に相似たるをもならべ載しなり

けりそのおの〳〵分ち有よしは下に出るを見よ且右の御名を分つに意は平聲にて於保の略計は和計の略にて大別のみこちふ事弘は去聲にて小の意なれば小別のみこちふ事なり卽御兄を意保御弟を弘と申分奉れりかゝるを吉野の明義とかいふ人假字を破りし事有は古へをも考らぬ私ごとなりたゞ古言は古き書の假字をつゝしみ守り隨ひて意をもとくにとし經なばえならぬ味も出來て貴くおぼゆべし打思ふとはことなるものぞ

よつ

ある人のいへらくこゝは言の國にしあれば他の國の字を用ゐざりし代をめづる事一わたりはさるいはれ聞えたりけれ然らば其天竺の四十餘も用ずして言をよく傳て天皇萬代を嗣給ふ皇朝こそ天下に勝れたれ是をよくも考へずみだりに異國を信じて我古意を學ぶ人なきは悲しむべしから國にては只老子のみぞ眞の書なるそれに幼を崇む老是に次壯は惡とす今三國を考るに我朝は日出の國にて人幼に當故諸眞にして世治天竺は日沒の國にて人老に當故に人心精くして賢しからは日中の國にして人壯に心惡故世不治滅主て己立遂に他にうばはる然れば萬我朝をこそ崇むべけれ彼老子既此國の古へのならはしの如きを願へり然れば天の下に此國の古へばかりよろしきはなかりさゝに守りて違ふ事なしかゝらば何の字をか用ゐん何のさとしをかなし給はん他の國人の心に八十枉つ事を隱し言に百のよき事を飾れるとはことなるなりかゝるにから國ぶりのわたり來て時にめづらしみ此天地と大らかなる神ならひをば常有こと、思ひ息ひかれがかたにせばくことわり巧めるを俄にめで、去かならひ初つるなりそもそもさがなき他國とむつびそめつるつひえこそ甚しけれ

【から國の字棄ちふ書に 用有字とて三萬三千を出せり天竺の悉曇は四十餘の字もて釋迦の五十餘卷をも書り此字の多が宜か少きがよろしきか天下は事少くて治るこそよ

けり時有てから文を傳へばかの孝子にてこそあらめ武王主を滅して後掟てし道を傳へしより此國に邪心多くなりこしなり】

五十聯（伊門良乃古惠と訓）

阿伊宇延袁	本音	
加幾久計己	清濁二音	
佐志須世曾	同	
多知門天登	同	
奈仁奴禰乃	清音	
波比不反保	清濁二音	
麻美武米毛	清音	
也伊由衣與	同	
良利留例呂	半濁	
和爲宇惠於	清音	

右の堅の音に喉舌牙齒唇の分ち○阿行は聲を引ども他へ轉ることなし加行より下の音は聲を引に皆各阿行の本音へかへれり故に阿行を母とし他を皆子とすることなり○阿を延て伊加二音と成よりすべて延れば數百の音となりそを又末ゆ約めのぼれば遂に阿一つにつゞまれる事らあまたの事あれど今は世人皆知て理りも明らかなれば更にいはず是には阿行より始て世にいひならはぬ事をいさゝか擧て次に專ら横韻に此國の言を用る例有ことを明せり

○阿伊宇延袁は同行と和行とはいさゝか通はしいふ言あれど加行より下の八行に通ふことなし

○阿の同行にて通ふは宇都々と乎都々（現なり）乎曾と宇曾（萬葉にからすとふおほ乎曾どり乎曾ろと君かなといふは嘘てふ事なり）以奴と惠奴（犬なり）乎佐藝と宇佐藝 萬葉

○阿行と和行の相通ふは阿禮と和禮（吾）阿多里と和多里（邊なり）伊伎と於伎（息）乎留と爲流などなり

○阿行と和行と隔違に通ふは阿毛と於毛（母をいふ）阿謝萬志と於曾萬志阿多期と於多藝登乎々と多和々乎乃々久と和奈々久の類なり

○伊伊爲○延延惠○袁於これらの音近かれど阿行は右にいふ如く中の八行へ通はねば阿行の伊は除きて也行の伊もて試るに

○毛伊はもゆもよと動き於伊は於ゆ於よと動き久伊は久由久也無と動き阿延(老)は阿由阿也可留と動き多延(悔)は多由多也須と動く類數へがたければ中下に伊といふ言皆也行の伊にて阿行の伊にあらず

○右に阿行と和行の通へるをも擧しかど皆通ふにあらず必相通はぬ事多し和行にて專ら通ふは宇惠は宇々宇和ると動き須惠は須宇須和ると動き佐惠々々は佐和々々と動き（物のさわぐなり）古惠(コヒ)は古和と動く類なりかくて始の袁と末の於と通ひし事は古書に惣てなく言の理(コトワリ)も別なり然るを此伊爲延惠遠於は後世人まどへり古書をよく見て古人の分ち用しを知へしこゝに擧るにいとまなし

○阿と於は言の下にいふ事なし

○良利留禮呂は言の上にいふ事なし

○言の始めを濁る事なし

たとへば佐謝(小波)那美の佐を畧きてさ波といふ時はさを濁るべけれど此謝ことばの上になる時は濁らず加婆禰は阿我婆倍奈(名)てふ言なるを阿を畧きいふには我(ガ)を清り【我と婆は常に通ふ】陀爾(ダニ)てふ辭は多陀爾(直)の畧なれどもこは言の下にのみつきて上にいはねば嫌ひなし

○横韻の事右に初體用令助の五つを分ち玄るせしことわり

○加左多奈波麻也良和を初(ハジ)めの音と名づくたとへばゆかんこさんかたんなどの類ひ其事を始めておこす言なればこ自ら初めにをれり（ことおゝすこゑと云あれどそは一事をいはんとする先におこる音のみにて意なければこゝに擧ることは異なり）

○幾志知仁比美伊利爲を體音(ウヅカヌコエ)と名づくたとへばかゝぶりといひあふぎといふ類に其物と定れる時の言なり此幾志知仁云云の音(コエ)萬づの言のはてに有時は其事定りて動かず其言既おこりて後定れるからに二にをれり

○久須門奴不武由留宇を用音(ウゴク)と名づくたとへば右にいへるかゝぶりを今かゝぶるをかぶるといひ扇を動し用るをばあふぐといふ類ひその物のわざをいふ言なり故この言萬づの事の下に有時ははたらけり既事定りて後に動けば三にをれり

○計世天禰反米衣例惠を令音(オフスルコエ)と名づくたとへばなせゆけいへなどの類ひなり是を言の下に用る時は人にいひ負(オ)する事と成ぬ言既動きて令(オフ)するからに四におりぬ

○袁己曾登乃保毛與呂於を助音(タスケル)と名づく【他は阿行を除ていへるにこれのみ袁を擧るは此音は多く通ふ事あればなり】是は萬づの言の下につきて其言の理りをわから或はたゞにそひて其言を助るなどくさ〴〵なれど凡は萬づの言の下にのみつきぬれば助言とし且はてにをけり

○此横韻には人のいぶからむべき事ばは附ていふべし

○袁に三つ有一つには是を彼をといふは其言を下へにし付る助音なり二つには與に通ひて令る音なり三つにはただに言の餘りの音のみ

○己(コ)は雅言(ミヤビコト)にはあらず平言(ツネ)なりたとへば雅にはゆかんゆかもといふを平言にはゆことといへりさて己(コ)より於(オ)までかく樣にいふは皆平言なり

○曾は是ぞ彼ぞ人ぞ我ぞなどいひ定むる助言なり又曾を清ていふは異にて勿來曾莫戀曾の類ひ皆合することばなり

○登は此と彼となど物と物の間におきて二つの物をたくらぶる辭なり（如を略きてと、いふ有は別なり）

○乃は上の言を下へつゞくる辭なり【から文に行三云云之時一と樣に有之はかしこの助辭の例のみなりから樣の文をこゝの言にてはよむべからず讀(ヨム)ば僞言となるなり】山の川の戀の思ひのなど體言(ウヅカヌ)を下へつゞくる時にのみいへることなるを後世はみだりなりそは俗言は用を體にいひなす物なるを其俗言のみ玄れる人から文の訓に行の時かへるの時などいふは皆俗言なり

○保は言の中にのみ有て助辭とせしは聞えず平言にはいはんをいほといふ類ひの事あり

○毛は物の玄たがひて添るゝ時是も彼もなどいふ辭なり又加毛那毛也毛などいふ類の毛は助けことばにて意なし

○與は專ら令(オウセ)言にてなせよやめよなどの類ひなり又彼よ某よなどいふ類はことわきて呼出すことばなり又やに通はしてあふみのや我は毛やうれしや悲しやなどいふはよの轉なり

○呂は戀しきろかなしきろ家ろ吾ろなどのろは助辭なり又等(ラ)に通はしてわれらといふべき所にわろといふも有

○於は下にいはぬことばにて助辭ならねどこゝに有は右の保の如し

○初言體言用言令言助言を二言にいふ類

阿行（此行の事は既いへり又延約は此行へもかゝれり）

行	将	體	今	令	約
加行	ゆかん行将	ゆき 行の體	ゆく 今行	ゆけ 令行	ゆこ こは加毛の約且平言
	なかん鳴将	なき 鳴の體	なく 今鳴	なけ 令鳴	なこ同
左行	まさん益将	まし 益の體	ます 今益	ませ 令益	まそ 佐毛の約
	ふさん臥将	ふし 臥の體	ふす 今臥	ふせ 令臥	ふそ同
多行	うたん打将	うち 打	うつ	うて	うと 多毛の約
	かたん勝将	かち 勝	かつ	かて	かと同
奈行	いなん去将	いに 去	いぬ	いね	いの なもの約
	しなん死将	しに 死	しぬ	しね	しの同
波行	いはん云将	いひ 云	いふ	いへ	いほ 波毛の約
	まはん舞将	まひ 舞	まふ	まへ	まほ同
麻行	いまん瘠将	いみ 瘠	いむ	いめ	いも まもの約
	かまん嚙将	かみ 嚙	かむ	かめ	かも同
也行	おいん老将	おい 老	おゆ	おえ えは由計の約	およ いもの約
	もいん萠将	もい 萠	もゆ	もえ 上同	もよ同
良行	しらん知将	しり 知	しる	しれ	しろ らもの約
	をらん居将	をり 居	をる	をれ	をろ同
和行	すわらん坐将	すゐ 坐 ゐは和利の約	すう うは和留の約	すゑ	すを わもの約
	うわらん植将	うゐ 植 同	うう同	うゑ上同	うを同

○老は紀に老此曰ニ於由一といひ萬葉に於伊また於與ともあれば也行の伊なりされど萬葉に於與之をばとよみしは伊を轉せしのみなりこゝのおよは前後の例の如く平言と心得べし

○おえのえは由計の約にて走ゆけと令する言なり次のえも均し

○萠はもゆもえとはたらくは常なり萬葉にもゆる事を毛伊つゝともよみたれば是も也行に入なりこれを推にもいんもよともいふべし又令の所にもえといふえは由計の約にてもえゆけてふ言なり常いふもえとは異なり

○すわらんはすわんともいふべし和良の約和なればしかいふ國も有べし（我國の内にていふ）

○須爲の爲も和利の約なればすわりなり

○須惠は體言に用るは本よりなりされどこゝにいふは和禮の約にてすわれてふ令言なること於衣（令老）毛衣（令萠）の類なり

○須於例の平言なり平言は略き轉じいふものなればかくいふ國も有べし（上に同）

○也行と和行には聞えなれぬ言もあるを疑ふ人あるべけれど既於伊由於與といふも有からは也行に入音なり然れば餘りの二音は是に准へて知べし和行も須惠宇（坐）惠宇（植）の言ともにすわりうわりうゝと働くからは和行に入なり餘りのうゐうおも是に准へて知べし

○同九行を各三言にいへる類

行	将	一	二	三	四
加行	さやがん究将 さやぎなん	さやぎ（究） さやがほ さやがひ さやがし	さやぐ さやがほ さやがす さやかゆ	さやげ さやがれ さやがせ さやがめ さやがへ	さやご（さやごは平言上に同じ下均し） さやがもし
左行	なかさん流将 なかしなん	ながし（流） ながさり なかさひ	ながす ながさる ながさゆ なかさひ	ながせ ながされ ながさめ ながさせ	ながそ なかさも
多行	はなさん はなちなん	はなち はなたり はなたひ はなたし	はなつ はなたず はなたゆ はなたふ	はなて はなたぬ はなため はなたせ	はなと はなたも
奈行	つかなん つかになん	つかに（束） つかなり つかなひ	つかれ つかなり つかなゆ つかなふ	つかぬ つかなせ つかなこ つかなめ	つかの つかなも
波行	おもはん おもひなん	おもひ（思） おもひり おもはひ	おもふ おもはく おもはゆ おもはる	おもへ おもはせ おもはぬ おもはめ	おもほ（ほはなほの如くいふ） おもはも
麻行	あゆまん あゆみなん	あゆみ あゆまひ あゆまり	あゆむ あゆまる あゆまく あゆまふ	あゆめ あゆまれ あゆませ あゆまへ	あゆも あゆまも
也行	さかやん さかいなん	さかい さかやり さかやき さかやひ	さかゆ さかやる さかやふ さかやく さかえる	さかえ さかやけ さかやれ さかゆけ	さかよ さかやも
良行	かへらん かへりなん	かへり かへらひ かへらし かへらり	かへる かへらゆ かへらく かへらふ	かへれ かへられ かへらめ かへらせ	かへろ かへらも
和行	すわわん すわゐなん	すわゐ すわわり すわわひ すわゑり	すわう すわわる すわわゆ すわゑる	すわゑ すわわれ すわわれ すわわせ すわわめ	すわ於 すわわも

【佐耶々々といふは物のなるころなり佐惠々々といふは佐和ぐ事なり此かなよくせずば惑ふべし】

○凡はつかね（束）と言をこゝにつかにと擧たるは本音の次のまゝなり【本音とは五音通ひ延約の道のまゝに依をいふ】約言もかなひ禰と爾は常に通はしいふをも思ふに世にはしかいふ國も有べしつかなんも右に准へてつかねなんてふ言と知べし（禰奈の約奈なればなり）○この今の音につかねと言は體言にいふは本よりなれどこゝにはなせの約にて令（オソセノ）言にも擧たり是も本音の次（ツイデ）によりてなり次々のさかえすわゑなどを令音の方にも擧しも共に是に准ふべし

○さかやんもさかえなんの略きなり

○すわわんの下のわは爲奈の約にてすわゐなんなりそのゐを又利に轉じ通はして常に はすわりなんといへり【音の本をもてすればすわゐ成を同韻を通はせて常は須和利といへりこゝには其本音の儘にすわゐと擧つすわりなんも右に同じ此外も常云と違ふは皆本音にて】

○す和於の於は平言なり

○和行にて通はしいふ言數々有うゑうゑするといひ古惠植餓坐聲を古和つかひこ和音と動かし【是はうゑ於には通はす】佐惠々々を佐藍々々佐和々々などはたらかしいふも皆上にいへり

○延言約言

後世にはから國に反といふに依てかへしといへどわが國には二言を約めて一言とし一言を延て二言にいふことあればかへしとのみいひてはたらはざるなり且先阿を延るを始めとすれば延言を先に擧るといへども是には童べの心得やすからんが爲に約言を先いへり其つゞむる事は

○淡海國はもと阿波宇美てふ名なるを其波宇を約れば布と成故に假字は阿布美と書なり

是をあうみの如く唱るは言便なり其唱のまゝにせばおうみともあうみとも書べきを必あふみとかき來しによりて其本阿波宇美てふことなるは知るゝなり

○遠江國はもと登保都阿波宇美といへるを其都と阿を約れば多と成故に假字は登保多布美と書なり【和名抄に止保太阿不三と有は阿の假字餘れり其比やゝかゝる誤の出こしなり】

是も唱へによらばとほとうみともとふとほみとも書べきを右のを約言の例によりて必登保多布美とかゝざればことわりをなきぬなり

○行知布戀知布など萬葉に有は行といふ戀と以布といふ言なるを登以を約れば知と成故に玄か有なり

今京こなたはその知を氐に轉じて氐布といふ今も東國にてはちふといへり

○和布を爾伎多倍といふをその多倍を約めて爾伎氐ともいへり（爾伎は調ひてうつくしきをいふ多倍は布の類をすべいふ名なり）

○我妹子を和藝毛古といふは和賀伊毛古の賀伊の約め藝なればなりこれらの類百千なれど皆是にならへ

本言の濁るは延約ともに濁れり其清濁違ひてはかなはず

○竪の音を直に約めいふは紀に伊比爾惠氐と有は伊比爾宇惠氐なり草木を植るを惠とのみ有も共に宇惠を約めたるなり伊夜を夜布保を保といふ類なり【古はふくむ事をほゝともふくともほともいへり口のほゝも含むよしなり】

○並の横韻を直に約めいふは萬葉に於毛比を毛比於登を登などいふ類なり是等は略くにあらず約めなり

○或は約め或は轉じたるも有萬葉に比流波志美良爾と云は書は曾の萬々爾ちふ言なるを曾のを約れば曾となるに其曾を志に轉じ通はし萬々の約は萬なるを美に轉じ通はし良も萬も通へば右の萬々の言にこめたり爾は辭にて本の如し○夜は須我良爾といふは夜は佐奈我良爾なり此佐は志加の約なるを須に轉じ通はし奈は須奈の約め佐となる故に其佐に須はこめたる事上の良をこめしに同じ良爾は本の如し然れば是もそのまゝてふ言なるを言便によりて玄みらともすがらともいへるなり

○志加志奈家良てふ言を一度つゞめて志加須家といひ二度約めて佐須我といへり其一度約りは志加は本の如くて此のごとくと云意なり次の志奈を約れば佐と成を須に轉せり我は我良の約我なり仍て志かす我といふ二度約るは志加を約むれば佐と成須我は奈我良なること右に同じ

かく約め通はせる本を心得ぬ人さすかてふ言に流石の字をあて、意得んとするは迂遠なり先さすがは玄かしながらてふ意なりと玄らば何のたとへをか用ゐん其言は物をかくせんと思へども玄かしながらさはなしがたしなど思ふ時にいひて人皆心得めり是を流石と書は流に石有て一方に行がたきに譬へしものにて是もとさすがは玄かしながらてふ言の略なるを玄らぬ俗意よりおこれり此言を解道を玄らば何のから字をか用ゐん何のたとへをかかるべき

○右の如く二言を約るは常にて三言四言をも一言に約るも有神代紀に都利婆里の事を知とのみいふは其上下の都と里と二ッを約めいふなり○比乃志多てふ事を比などいふは比は日なり乃志多の上下の乃多を約れば奈となればなり○言の下に須良といふ辭は曾乃萬々にいふ事なるを曾乃萬々一言の上下を約れば左となるを須に轉て通はせて須といひ次の萬は良に通ひて須良となれり上の夜はすがらに合せ見よ

かくその言の本を尋ねて後より思ひ當る時はむつかしけれどすべて打いづるがおのづから此五十聯の音にかなふにぞある既にもいへる如く天地のいはしむる言の國の妙なるなり

○延言

右の約言はその言長くしていひつゞけ難き時に約めい

ひ此延言は言短くして其言ついでのわろき時延て云になるを由都以波牟良と唱るは伊保の約は與なるを同音の由に轉じ云也（湯津爪櫛湯津桂などのゆづは皆是也）

○宇良夫禮は和備に同じ其宇良の約は和なり夫禮の約は倍なるを備に轉じて和備といへり

○御ことのりふみに命乃良萬止と有はみこと乃良は武止てふ言なるを其武を萬に轉じたるなり

○見萬志由加萬志などは見武行武と言ことなるを是も萬と武を轉じ通はしていひ下の志は志幾の略にて志幾は繁てふ言を下に添て其言を強からしむるなり古事記に磯繁國と有是なり且こゝはうれしきをうれし悲しきをかなしと略きいふに同じ

○略言

これにくさ〳〵有○高脚を多可しといふは加を引にあのこもればなり過去を過にし小青を佐乎腹赤を波良かなども右に同じ

○家を倍上を倍道を知石を志てふ類はたゞにはぶける也

○見るすくなきのるを延て見良久少きといひ戀る多きのるを延てこふ良久の多きといへり（是は良久の約め留なると表裏なり）あはむほしきのむを延て阿波萬久ほしきといふ（萬久の約武なり）此外花ちるを花ちらふうつるをうつろふなどいふ類ひ皆延ことばなり是また限りなかれど皆これらの意のみ

○二度延たる有萬葉一に家告閑と有は家を乃禮の禮を延て良閑とのたまひしにて右の類なり（良閑の約卽禮なり）【萬葉今本に家告閑と有ていへきかんと訓しは字も訓も誤れり○告る事をのると云は古の常なり】名告佐根と有はまつなの禮といふ禮を延て良世となるを其世を又延て佐根とよみませり是を約言もてつゞむる時は奈乃良佐禰の佐禰の約は世なりその世に上の良を合せて良世を約れば禮と成て名のれてふ言なりこを以て延言約言の有ことを知べしさて同集に草を加良佐禰といふも右に同じ此類多かれど皆かくなり

○轉回通

○紀萬葉等に五百箇磐石と書るはいほついはむらてふ言通ふ事もなくたゞに畧けり

○うら〳〵を宇良々久々を比佐々淺々をあさ〻など樣に畧くも有

○下を畧は天をあ足をあ時を登と云類なり

○上下を畧くにもくさ〳〵有○佐我美の國は牟佐我美の牟を畧き牟佐斯の國は牟佐斯毛の毛を畧きたり【奈良朝に相摸武藏の字を用しより實を失ひて後人附會の說をいふに及べり】

西北の國は前後もて名を分ち東國は上下もてすさて身狹といふ地名は諸國に多しこゝもその身狹の名より國の名とは成しなり

○十二月の名に此畧言多し○一月を牟月といふは毛登都月てふ事なり其毛都の約は牟なれは玄かいふ（こは約本に入べけれど月の名をいふ始めなれば假にこゝに擧）【親月といふはいふにたらず古言玄らぬ人のから字の意もていへるは皆此國にそむけり】

○二月を伎佐良藝月と言は久佐伎波里月なり草木の芽を張出すは二月なり其久佐伎のみ言の約めは伎なれば伎とのみもいふべく又は草は畧くともすべし佐良と波里は韻通へり【後世衣更着の意といふは不意に思ひていへる淺ら心の說なり】

○三月を也與比と云は草木伊也於比月なり二月に芽を張三月に繁る故に彌生といふ（いやのいを畧くは常多し）草木をいはぬは上の二月にいひしかばゆづりて畧けり月の名は多くは他の月と相對へていふなり

○六月を美奈月といふは加美那利月の上下を畧けり十月は陰月にて雷のならねばかみ無月といひ六月は專ら雷の鳴故にむかへて此名有雷をかみとのみいへる事古への常なり【後世水無月と云はひがことぞ】

○七月を布美月といふは保布々美月の上下を畧きいふなり稻は七月に穗を含めり萬葉に布久むをば布々萬里と云を布々と畧き又ほとのみもいへりかの春の二月三月は草木の蒲茂るもていひ秋三月は稻もていふなり

○八月を波月といふは保波利月の上下を畧きいへり稻は皆八月に穗を張なり

○九月を奈我月と云は伊奈我利月の上下を畧きいへり稻は九月に苅をさむるなり

○十二月を志波須といふは登志波都留月の上下を畧き波は本の如し都と須を通はしいへり

○乎々里と云は其もと木の枝草などのたよわく靡くことを畧き云なり先多和美なびくと云を其多和を重ねみを畧きて多和多和と云を多を登に通はせ和と乎を隅違に通はせて登乎々といひ其登乎々々を畧きて登乎々といふを又畧きて乎々里と云り（此里は美に通ひて多乎美と云に同じ卽多和美也）かくいく度も略ける言多し

○清濁を通はしいふ例

○五十聯音の中に加幾久計己を餓藝具解期と濁り佐志須世曾を坐自受是俗と濁り多知都天登を太治頭涅杼と濁り波比布閇保を婆備夫便凡と濁る此二十音のみ濁りありその清と濁るは言の本別なり然れば是を合せて七十音なりかくて萬づの言に本より濁る有言便の濁有其本より濁るをば通はし轉じ延約むるも同じく濁るなり言便の濁るはかはらずされども通はしなどしていふも本同音なればおのづから通はし轉じても言便の濁る多しそは中に本より清と濁ると却て相通ふ例有ことに此清濁の通ふ言の事は後世に傳へいへる人なくかの日の入國の音傳へしてふ人もこゝろ得ざれば左に擧【天竺には言甚繁く此國には言甚少きよし上にいへるが如し】

○婆備夫便凡の濁音を却て末美武米母の清音もていへりその婆は紀の歌に乎婆野始てふ事を烏麻野始於保婆古（小林）を於譜磨故と書又た、かへ婆を多々介倍磨ふたりこゆ（大葉子）れ婆を赴沱利古喩例磨など書り此外神奈備を神奈美加夫利を加武利須陪良藝を須米良藝比凡を比母など相通はしいふ數をゑらず

○坐自受是俗は奈仁奴泥乃もていふいざといな（不知と否と意通）志良自を之らに（萬葉の常なり）【美受と美奴（不見）（不と奴は常に通）波是と波禰（魚虫などにはぜるはねるを通はす）こ是とこね（物を交合するなり）

○太治頭傳土も又奈仁奴禰乃に通へり加太志と加奈志（金作なり金工をいふ）倍太知と閇奈里（隔を萬葉によめり）多治比を丹比とも書は多爾に通ふ故なり（但馬丹波も此意なり）美頭と美奴（みつに瑞の字を用るは其本眞瓊のよしなり）奴傳と奴禰（紀にぬてゆらくもと有は瓊音のうごき鳴ことなり）於杼禮と於乃禮（罵ことばなり）於廼々々すると云と於乃々久と同じ

○我藝愚解碁と良利屢例漏と通ふい我といら（芒苛の類）う我ちとう良ち多藝と多利（遠江の山中にて瀧を垂と云津の國の垂水も卽多藝なり且たぎのきは古へ必濁れり）ふ擬と布利（紀萬葉振をふきと云）ゑぐとゑる（味のゑぐきはものをゑるが如し）へ具とへる（減なり）由解とゆれ（梓ゆげとはほこをゆらげるにて良解の約は禮なり）こ其しきとこ呂しき（凝なり）和期と和呂（我を此こ言にいふは古多し）

○右をから字もて見る時は馬美武米母（吳音はまみむめも漢音はばびぶべぼ）儺爾祭禰廼（吳音はなにぬねの漢音はだぢづでど）この外仁（にん、ゑん）然（ねん、せん）などの類吳漢二音有を此國には吳を用て仁はにまた爾もに、用ゐ泥は禰と傳とに用烏は宇と乎に用廼は土と乃に用る類多し

○清濁の言は古事記日本紀その外古書の訓注に濁言には濁字を書り見て知べし又たま〳〵濁言にも清音の字を書し所はあれど清言に濁音の字を書ことはなし（萬葉などは千が一其違有は後に字を誤りしなり改むべし）

○言便の濁りは二言をいひつゞくる時に必ありそも又海河山河我人などの類は彼此をたゞならべいふ故に濁る事なし山之川の之を畧きてやまかはといふには川のかを濁る浦之人山之人をうら人山人といふ時もひを濁るは皆是なり又山之風をも山風といへどこは下にせの濁りあればゆづりてかを濁らず此類も有なり凡言便の濁りをよく心得る事は年經つゝ心を用ゐざればかなはず然るに平言にはおのづから此言便の清濁りを誤るはまれなり仍て平言に心を付て思ひ知べし惣ての言も平言に古言多したゞ古書にのみ古言雅言は有と思ふことなかれ【雅言とは古言は本よりにて今も傳へていへる正しき言を云平言とは常にいふ言にてゑかしながら誤ははなくて雅たらぬをいふ俗言とは訛り轉じ又他國の言と相交へいふなどをいふ】ゑか心得て先書の言を通り知て後平言に心を置心得ばよろづたりなん

○うれしきをうれしい悲しきをかなしいうれしくをうれしうかなしくをかなしうくらくしてをくらうしてからくしてをからうしてなどの類のきをいといひくをうといふは皆平言なり雅言には必かなしきうれしくといへり後世といへども歌には此平言はいはざるを文には誤る人有そは物語文によりて誤るめり物語ぶみはむかしむかしのあとなしばなしなれば平言を專らと書が中に雅言をも交へしなり仍て雅文を書人此心せでさる物語の言をみだりに取はひがことぞ又古事記日本紀其外の古書を訓には皆雅言を用うべきに今の訓には平言も交れり

○此記に多くは古書の書る例を擧ぬはわづらはしければなり擧ざるも皆より所有めり見ん人思へ又より所を擧るも一つ二つのみ擧てやみぬ然ればその故よしこれに限れりと思ふことなかれ

語意考終

文意考序

こたみ何くれと師の書おかれしものら板にゑらせておのれにものとひふるごと學せす人々等にしめしなむとするをこの文のこゝろとあるが中に學の草にしてもとよりかたへをぬき出給へるよしなればたらへる事難き書なれどこれのみ殘しおかむも愛たらしくてうたの意の末に加へて一冊とはなしぬなり

寛政十二年神無月　　あらき田神主久老

文意考

文のこゝろのうち

いとも〳〵かみつ代の人こゝろにしぬばぬおもひあればいにいでゝうたへりこをうたといへりまた目に見みゝに言事のもだすべからぬわざある時は言をつらねていふこをたゞへ言といへりこれを後の世にふみとなむいふなるしかあればうたは内よりおこりたゞへ言は外より來るものなりかれ世の中の人ことにつけて此ふたつをいひつゝわがおもひをやり人のこゝろをもなぐさめ天地の神わざをたゞへ君臣のおほまつろへ事をものりませれば萬にたらはぬ事なむあらざりきかくていにしへは常いふことばもよろしければ歌をもただへ言をも先は常のことばもていひつゞくりたるが中にうたといひふみとしもいふにいたりてはおのづからあやにつゞけなせるによりてめでたきものとなりにたり是をたとへば草木も色香のよきをばよみし鳥虫も聲ふしのあしきをばあしむは人のこゝろにしあれば何のことばもよろしくおもしろくこそいひなすべきなりけれかくてぞいはまくもかしこき

天つ神祖もふとき厚きのりと辭をめで給ひて久かたの天千代のいにしへにかへりおしてるや難波の法師契沖はふるき言の葉の道の後の世におひおほどれるをどろをかりわくる事のはじめをなすがついでこの文のこゝろをも知て事にふれて書ることばにあやあることもおほかりきおのれをちなかれとはやくよりこの手ぶりをこのみていささけもいとまある朝にげに久かたの日月のうつるをもおもほえずあらがねの土もさくてふ夏の日はあせもしとゞにこゝろをめぐらし足曳のあらし吹なる冬の夜は身さへこるかにとなへあかして百つたふ五十ちあまりの齡になりてこそさはなるふることをもふみのこゝろおもやゝおもひ通るべくなりにたれかれあがあがたゐをとなふる友の乞がまに〳〵しるしつゝそのしるせる事等はふることぶみやまとぶみふとのりとごとおほみことのりくに〳〵のことかける（記土）ふみ是等が中ににきびをたけびよろこびたのしみかなしみうらみかむほぎ人ほぎ宮ほぎむろほぎかみぶり宮ぶりひなぶり道ゆきぶりらのふるくもかたくもにほひありおもしろかるあはれなるくさ〴〵のさましたるをぬき出しるしてそれがこゝろをいさゝか解しるし又後の世々にかける歌のはじめに書るふみ旅ゆくこと葉歌のはしの詞物語ふみの中なることばのふしあるをも擧つ

照しおはしましかけまくもたふとき　天皇も高きくうるはしきおほみことのりをもてちはやふる人を和し給ふなればすめらみ國にうまれとうまる、人誰かはこのことばをよろこばざらんかゝるにさいくさの中つ世に言さへぐからの文のわたり來しゆ（後の人イ）せはく方なる事のとく得やすきまゝにそをのみとなふるものさはになりにてあがすめらぎのひろく天地にかなへる道はさとりかねてこゝのいにしへのふみまねぶことなければ人みなおのが國の手ぶりをわすれ（行イ）て此いにしへぶりのふみを書人あらずなむなりぬる（猶イ）たまさかに書ぬといへども或はかの言さへぐ文のさまにいひうつしあるはから文字の音をまじへてやまとにもからにもつかず中ぞらなるもありまたそをわろしとおもひてこゝの言もてかく人（し イ）もあれど殿に在べきふみに後のものがたりぶみらのこと葉をとり用（ね イ）またをとこ女の心ことばのわかちをも思はず或はものにつけことによりてさまことなるべき事をもわかず或はいにしへと後との心こと葉をもわきまへずしていひつらねつゝなむ在けるよ時なるかも玉しきの都なる荷田の宿禰あづま麿うしは　天皇の（いに しへの イ）道々のふみらを分とほり此ふみのくさ〴〵をもつばらにかきわけて八

後の世なるを後の人の心ゆ見ては何そはいにしへはこといたらぬほどぞなどおもふべかれどそはいまだしきなりよくおもひふかくものを知る人のいにしへをめでざるやはある後のあやは中つ世のにしきにしかず中つ世のにしきはかみつ代のしづはたにしかざる事はおりたちて知る人こそしらめしかいにしへをよくしらば物なほく事みやびかなる心もうつろひなりなむ人のこゝろしなほくみやびゆかばいにしへの安國のたり御代にかへらざらめやいにしへ今をわかちあへぬからに古ことしぬばへる人少なきこそうれはしけれかみつ世には文のあやてふこともなく後の世にぞよろづにうるはしき事はありといふ人有は上つ代のふみらを見も知らでおしはかりにいふになむあるよりてくさ〳〵のすがたをあげしらするが中にひとつふたつをこれには書りそも〳〵いにしへのふみのあやよ

神日本磐余彦天皇の橿原宮に初て天の下しらすることをほめまつりていへらくしたついはねに宮ばしらふとしり高天が原にちぎたかしりて初國しらすすめらみこと、たゞへ申せしはその宮柱たつる下つ綱根をかたくしみやの棟を高く造らし、てふ事をいふのみなるかくこと大らかにとりひろめてみやびかにいひなすこと中つ世よりこなたの人はかなはず其いひひろむるのみかはことおほくあるをばかへりてつゞめて初國しらすすめらみこと、いひなせしも妙ならずや又新年の祝詞に皇神たちのよさし奉らむ奥津御年を手な肱に水沫かきたり向股に泥かきよせてとり作らむおきつ御年を云々てふはたみどもの田作るとて水にひぢぬまにおりたちつゝくるしき業すめるさまをいふのみなるをしかいひなさるゝものぞまたすめらぎの食國はひろくは天雲を限りこまかには一寸一咫も殘らざるよしをたとへて天雲のおりゐ向伏かぎり谷蝦蟆の狭渡る極み潮沫のとどまるかぎり船のへのいたれるきはみなどいへるなりかゝるたぐひのかぎりなく多きを見知なばいかでいにしへをおもひとらざらん

をたけび

はやすさのをの命云々天にのぼり給ふ時に山川もことごとく動み國土もみなふりぬれば天照大御神聞しおどろき給ひてのたまはせらく吾奈勢の命の登來ますゆゑは必うるはしき心ならじあが國をうばゝまくするなりとて御髮をとき御髻にまかし左右のみゝづらにも御髻にもひたりみぎりの御手にもおの〳〵八さかの勾玉の五百津のみ

すまるの玉をまきもたしてそびらには千のりの靫をおはびしいほのりのゆぎをつけ又みたゝむきにはいつの高鞆を取はかし弓ずゑふりたてゝ堅庭を向股にふみなづみあわゆきなすくゑはらゝかしていつのをたけびにふみたけびてまち問申さくは何そのゆゑに上り來ましぬやと云云

にぎび

速素盞烏命まをしたまはく吾心あかしかれあがうめる子は手弱女を得きよりていへばおのづからあれかちぬとのたまひて勝佐備にあまてらす大みかみの御田のあはなち溝うめまたおほみへきこしめす御殿に屎麻理あかつかれしかすといへども天照大御神はとがめまさずてのたまはくくそなすは酔てたぐりあがつとこそ吾弟命は如此すなれまた田の畔はなちみぞうむるは地をあたらしとこそあがなせのみことはかくすなれとのたまひ直したまはすれどもなほそのさがなきわざやまずして轉あり

此たけび給ひにきび給をふかくおもふべし姫大御神といへどもこと有ときは雄たけびをなして殿なる御いつをもてをきめまし常にはこのにぎびたる御こゝろもて大かたの事をば見なほし聞直して治めますぞいともかしこき神の道の本にして國も家もをさまる御をしへなる

祭

大國主の大神云云此葦原の中つ國はおほみことのりのまに〳〵既に奉りぬ唯おのれが住なむところは天の神の御子の天つ日繼しらすとたる天の御栖なして底つ巖根に宮柱太敷高天の原に垂木高知てをさめたまはゞおのれはもたらず八十隈でに隱て侍りなむまたおのれが子ども百八十かみは卽八重事代主の神かみの御尾さきとなりて仕奉らむに違ひまつる神はあらじとかく申て出雲の國の多藝斯の小濱に天の御舍を造りて水戸の神の孫くしやたまの神を膳夫として天御饗奉ぬるときに新まをして奇八玉神鵜となりて海底に入そこつ土をくひ出て天の八十ひらかを作りめのからをかりて火きりうすを作りこものからをもて火きりぎねに作りて火をきり出していはくこのあがきれる火はたかまの原は神御魂の御祖の命のとだるあまのにひすのすゝの八擧たるゝまで燒あげつちの下はそこつ磐ねに燒こらして栲繩の千ひろなは打はへて海人がつらするくちぶとの尾ひれすゞきさわ〳〵に引よせあげてうち竹のとをゝとをゝに天のまなくひ奉る云

云

室賀の御詞

小計のみこ立て衣ひもをつくろひてむろほぎの詞をのたまふつきたつる稚むろ葛ねにつき立る柱はこの家ぎみのみ心のしづもりなり取ふけるむねはりはこの家ぎみのみこゝろのさかえなりとりおけるちぎはこの家ぎみのみこころのとゝのほりなりとりおけるえつりはこの家ぎみのみ心の平らぎなり取ゆへるかつらはこの家ぎみのみいのちのかためなりとりふけるかやは此いへぎみの御富の餘りなり出雲は新はりにひ墾(パリ)の十握稻(トツカシネ)の穗をさらけにかめる酒をうまらにをやらふるがねやあごらがあしひきこのかたやまさをしかの角をさゝげてたちまへばうまさけ(イハ)ゑがの市にあたひもてかへずたなそこもならゝにうちあげ給ふあかとこよたち

このたぐひのふるきふみども多く書て文の意とて別にありこゝにはそのかたへをかけるのみ

加茂の眞淵

文意考終

書意考

此すべらみ國の書は皆こゝの事なり然るをから文にならひて書きしは其記者の思ひたがへて文字の用ひ樣になづみてこゝの語を誤る所多し其もとを尋ぬればこゝの事なればよく古へを心得たる人は其文字になづまでいにしへの心詞にかへして見且訓にもさる事を專らとすべし然るを後の人は古への心詞を忘れつればたゞ字につきてこゝの語をそふる故に一わたり文字のかたにはことわり有樣なれど實にたがへり古事記日本紀その外も古き書はこゝのふるき語のつたはれる有を以てから文字を添たる物なればその意をよく得ては文字にはいさゝかたがふもくるしからず字にたがふといへども古意にいたればなり右のごとくいにしへの語に中頃文を極めたる時は古語猶傳れる世なるからはまどはざりけんそのゝち時代うつり來て人みなわが國の心語はわすれつれどたゞその字を守りて二たび語をほどこせる故に甚しき違どもの有べしその語の本をしらんには史の中にまじれる古語をおぼえ且史の歌或は宣命祝詞萬葉の歌はいにしへの人の心いにしへの人のことばなれば專ら歌にていにしへの心詞を知て立かへりて史を見ば字の用ひ樣のわろきをも又は一二字に多くの誤をほどこし五字六字をみじかき語をもてもよむべきを知べしそのむねのくはしき事はこゝにつくしがたしよりて歌意文意語意に書ることどもを合せてさとるべし

したしき友どちつどひてやまとぶみをよみ侍りける時にかきたる

そらみつやまとの古きふみどもゝことさやぐからの字もて書たるめれどそのもとみな此國のことを書つればこゝの古への心ことばもてよまずばいかでこゝのいにしへにかなはんたとへばことさやぐからのふみは本からの事にしあればからの語していはずやまとのことばを交へよまんはからの本の心にとほらぬ事もおほかるが如しこゝにならのみやのおほんときに書たるやまとふみてふふみありこはから文のさまにもとめて書なしつればいかでこゝの心ことばをよくいたさめやよりて事の心を失とんとおぼゆる物も少なからずそれにつけて後にはおもひまどへる人こそ多なれこはかの大御時の人ひとへにからふみに思ひ泥みて書たれば見る人のまどふもことわりなりしかはあれどわが古へ心のことばの猶傳れる時代の人はこ

このことばもてたはやすくもよみつらんを年月五百に千に移り來て後は古へよみけんことばとおぼしきは少くしてかのからの文をこゝによむが如くよめればいかで異ならざらんこの事をなげく人たま〳〵有といへども古きよの文のくまもおちずあさりわたらずしては得べき道なしされば古事記萬葉その外の文のまことといつはりを正してよみこゝろ得たらん人こそ中々に此ふみよりも上つ代の心ことばをも得て此紀を見下さん時にはよみ得る事も有てましその古事記は此日本紀におなし代々の事にて且上つ代の事もことばも此國ぶりのまに〳〵書たれば相むかへみてありさまをもことばをも知べしはたその記のうた萬葉集の歌或はみことのりのりとごとあるは古きくさぐさの文どもをもよく考へ見るにそれが中にもたゞかきつらねたる内には傳のおよづれよこなまれる事も又書人のあやなしそへたる事も有ためしなるを歌てふ物ばかり上つ代の心ことばをいさゝかのかけもあらで今も傳はれり然ればこれを年月に唱ふるにつけてこそ上つ代の人のこゝろことばもおのづからふかく思ひしらるれ其ことばを知ときはその代々のありさまをも今も見るごとくしらるべしさてその上つ代の雲きりをちわきにわきてこそ久かたの天つ神代の事をも思ひやらめ然るを後の世の人上つ世のさまをも人の心をもよく思ひしらずして雲をへだて霧をへだて、大空のほしを數へんが如くあからさまに神代のことをはからんとすれどいかで得べけんやたゞひとの國の宋といふ代にかたくなに人の心の理りをいひ教への道てふことを書たる文の有をうらやみてこゝの神代のふみをそのごとくとりなさばやとそらに思ふ理りをいふ事の侍りしさてこをもて人の教へをとかんとするこそから人のふみに心まどひして此國のことをわすれたる物なれ凡かけまくもかしこき我大君の御代は久かたの天地のまゝにしてよろづの事日月の丸らかによつの時のやうやくにいたるが如くそのきはみなくしてしかも日月のひるよるをわいだめ四の時のたがはず天地のむかし今かはらぬことを心にならひ來ぬればそれぞとことせばく教る業などはいとまれにちいさき事にぞ有けるさるをから國の道といふは人のたくみに作れるなればくしけなす所せく方にして心にかゝり耳にとく聞えぬる故に人のさる事におもふなりけりよりて今すべら御國のいにしへの文を人々とともによむにつけて得ねばかつ〳〵此わいだめをいはんかしから國はことに人の心の惡き國にしてよこしまにのみあるをなげく人有ていかで教へ正さんとおもふにいと古への人かりに仁義禮などいふ事をいひでつらんを次々にそれをうけ傳へたる人は卽是を思ひ泥みいひつのりてよの人はさるかたくなる定めを用る物ならぬを思ひかへもはらさへず終にかれは仁にあらず義にそむけり是は禮をしらず信に違へりなどあらそひもて行て人をにくみおのれもはら立などすめる事は常あれどその事もて治りし代は一代もなかりけりその中に夏殷周とかいふ世をあげて治れりし代のごとくさとすれどそれもそのよをうばひ得て初國しりたる君などのしばしのほどのみぞ謀にもさる樣をしつらめやがてその子うまごたゝなくこそ有けれさる道の天地にかなふものならばその後いと多き代々を經る中にはかの三つの代の法てふさまにたまたまもまじはりおこりなんを一代としてあらぬは天地の心にかなはぬ道なる事をしるべし且その治りし代も聖てふ人も徒に上つ代にのみつどひて有といふはさる文をいひつのる人のおよづれごとなる事明らかなり然れば教へも何にかなるやかの聖の道てふはいかなる時か行はれしや皆やうなくこそ聞ゆれたゞ我みかどには所せく名づくる事もなく强て教る語もなくあながちなるのりもなくおのづから天地のまに〳〵治めならはし給へる道こそたうとけれさて天皇を日にたとへ臣をほしにたとへすべて民を草木にたとふその星の日となるべからぬをしりて化す事なければ賤き民草はしも高き木とならんことをおもはずおのづからなびけり然ればかく天つ神代より傳りてすべらぎのあれつぎますを崇とむにつけておみもかはらずさかえ侍りぬよりて此事をついで、神代よりしるしたるは此やまとふみなり然れば凡はむつかしき事もなくたゞに崇とむべきなりけり是より前の清見原天皇のみかどのりして書せ給へる古事記上つ卷に教へなどの心もいはぬからはその後漸に降ゆく奈良朝に書る物に何のことなる事かあらんかのから國はやつこの立てみかど、なればしばらくは勢になびくたみくさにこそあれたれかはわがすべらぎとおもはん又やつこの立けん心をこそ下にはおもはめさるからに臣は君をなけらにしその臣も家人にはおそはれつ、いつか穩かなる日あらんやわがすべら御國にむかへていふべきものにあらずたゞすめ神をたふとみすべらぎをかしこむべしいにしへのみかど皇神を崇みて御みづからの御心を治め武き御勢をもてかくまれ給ふをもて世の民の大かたにあしきことをば見なほし聞なほし給

ひて治め給へりさて臣たみも神を崇めば心の内にきたなき事を隠すことを得ずすめらぎを恐るれば身の上にあしきふるまひをなしがたしよりて此二つの崇みかしこきを常わするまじきてふ外に世の治り身のとゝのはんことはなきをや

此書以眞淵翁自筆草稿之本文化十三年四月三日書寫す

藤原美波留

書意考終

明治三十六年十一月廿一日印刷
明治三十六年十一月廿五日發行

（賀茂眞淵全集第二）

編輯者　國學院編輯部
校訂者　賀茂百樹
發行者　吉川半七　東京市京橋區南傳馬町壹丁目拾貳番地
印刷者　野村宗十郎　東京市京橋區築地參丁目拾五番地
發行所　弘文館　東京市京橋區南傳馬町壹丁目拾貳番地

著作權所有

株式會社東京築地活版製造所印刷

008923-003-1

121.24-kKK

賀茂真淵全集

国学院編輯部／編

M36-39

AAD-0023